

樽味四反地遺跡

- 14次・16次調査 -

平成18年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書 1

2009

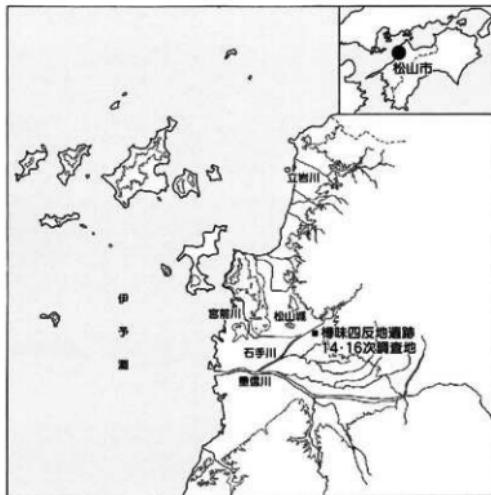
松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

たる み し たん じ

樽味四反地遺跡

- 14次・16次調査 -

平成18年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書 1



2009

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

序

樽味四反地遺跡は松山平野の中心部を南西に流れる石手川中流域左岸に位置し、西日本有数の規模を誇る弥生時代後期末から古墳時代初頭の大型建物址3棟が発見された遺跡です。これまでの埋蔵文化財発掘調査によって、縄文時代から中世にかけての集落の様相がしだいに明らかになってきました。しかし、大型建物址については隔絶した規模を有する注目すべき遺構でありながら、その範囲や性格を決定する周辺データが得られていませんでした。

今回報告する樽味四反地遺跡14次・16次調査は、重要遺跡確認調査として、大型建物址を中心とする遺跡の範囲確定と、その前後の時期の集落の分布状況の確認をめざして実施したものです。残念ながら大型建物址に関連する遺構は検出できませんでしたが、古墳時代中期初頭から後期にかけての集落經營の様相を示す住居の重複や建て替えの痕や住居廃絶に伴う祭祀行為に使用されたと思われる土器や装飾品が発見されています。また古代遺構として、L字状に折れ曲がる2本の溝を検出しておらず、古代集落の様相解明の貴重な手がかりとなりました。

しかし、大型建物址に関しては、類例のない特異な様相をもった存在と考えざるを得なくなりました。このことは大きな前進でもあります。今後は問題を整理し、さらなる調査を手がけてまいります。

本書が、重要遺跡確認調査の一環として、多くの方々と問題を共有しながら謎解きに向かう原動力になることを祈っております。

最後に、発掘調査および報告書刊行に、ご協力いただきました地権者ならびに周辺の住民の方々、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成21年1月31日

松山市教育長 山内 泰

例　　言

1. 本書は松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団が国庫補助事業として、平成18年度に実施した松山市樽味地区における埋蔵文化財の発掘調査報告書である。なお、本報告書は平成20年度の国庫補助事業として刊行したものである。
2. 本文中では遺構名を略号化し、堅穴住居：S B、掘立柱建物：掘立、溝：S D、自然流路：S R、土坑：S K、柱穴・小穴：S P、性格不明遺構：S Xで記述した。
3. 本書で使用した標高数値はすべて海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。
4. 基本上層や遺構埋土の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1998)に準拠した。
5. 屋外調査での写真は調査担当者と大西朋子が、遺物写真と図版作成は大西が担当した。
6. 遺構の実測は宮内慎一、水本完児、遺物の復元及び実測・製図は宮内の指示のもとに、山下満佐子、平岡直美、西本三枝、木西嘉子、森田利恵、鈴鹿八恵子、岡本邦栄がおこなった。
7. 掘図の縮尺は縮分値をスケール下に記した。遺物実測図は原則として、縄文土器、弥生土器、上師器、須恵器、陶磁器は1/4、石器、金属製品は1/2、玉類は1/1とした。
8. 調査では下條信行（元愛媛大学）、田崎博之（愛媛大学）、前園実知雄（奈良芸術短期大学）、長井数秋（日本考古学协会会员）、名本二六雄（日本考古学协会会员）の諸先生方にご指導、ご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。
9. 屋外調査における国土座標測量は、以下の2社に業務を委託した（国際航業株式会社、セントラルエンジニアリング株式会社）。
10. 本書の執筆は宮内、水本が分担し、編集は宮内が担当し山下、平岡の協力を得た。浄書は宮内の指示のもと平岡が担当した。
11. 本書に掲載した記録類や遺物は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて保管されている。

本文目次

第1章 はじめに	[水本].....	1
1. 調査に至る経緯	2. 調査・整理の経緯	3. 刊行組織
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	[宮内].....	2
1. 立地	2. 環境	
第3章 榛味四反地遺跡14次調査	[水本].....	7
1. 調査の経緯		
(1) 調査に至る経緯	(2) 調査の経緯	(3) 調査組織
2. 層位		
(1) 基本層位	(2) 検出遺構・遺物	
3. 遺構と遺物		
(1) 弥生時代の遺構と遺物		
(2) 古墳時代から古代の遺構と遺物		
(3) その他の遺構と遺物		
4. 小結		
第4章 榛味四反地遺跡16次調査	[宮内].....	25
1. 調査の経緯		
(1) 調査に至る経緯	(2) 調査の経緯	(3) 調査組織
2. 層位		
(1) 基本層位	(2) 検出遺構・遺物	
3. 遺構と遺物		
(1) 弥生時代の遺構と遺物		
(2) 古墳時代の遺構と遺物		
(3) 古代から中世の遺構と遺物		
(4) その他の遺構と遺物		
4. 小結		
第5章 調査の成果と課題	[宮内].....	83

挿図目次

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1図	松山平野の地形概要図(縮尺1/200,000)	3
第2図	周辺主要遺跡分布図(縮尺1/25,000)	4

第3章 樽味四反地遺跡14次調査

第3図	調査地測量図(縮尺1/300)	8
第4図	調査区北壁・西壁土層図(縮尺1/30)	9
第5図	調査区南壁・東壁土層図(縮尺1/30)	11
第6図	遺構配置図(縮尺1/100)	13
第7図	S K 1測量図・出土遺物実測図(縮尺1/30・1/4)	14
第8図	S K 2測量図(縮尺1/30)	15
第9図	S K 3測量図(縮尺1/30)	16
第10図	S D 1・2測量図(縮尺1/80)	17
第11図	S D 1出土遺物実測図(縮尺1/4)	18
第12図	S D 3測量図(縮尺1/30)	19
第13図	柱穴・包含層・地点不明出土遺物実測図(縮尺1/4)	21

第4章 樽味四反地遺跡16次調査

第14図	調査地位置図(縮尺1/500)	27
第15図	遺構配置図(縮尺1/150)	28
第16図	東壁土層図(縮尺1/30)	29
第17図	西壁土層図(縮尺1/30)	31
第18図	北壁・南壁土層図(縮尺1/30)	33
第19図	S B 4測量図(縮尺1/80)	35
第20図	S K 1測量図(縮尺1/60)	36
第21図	S K 1出土遺物実測図(縮尺1/4)	37
第22図	S B 1測量図(縮尺1/80)	38
第23図	S B 1遺物出土状況図(縮尺1/80)	39
第24図	S B 1出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	40
第25図	S B 1出土遺物実測図(2)(縮尺1/4・1/2・1/1)	41
第26図	S B 2測量図(縮尺1/80)	43
第27図	S B 2出土遺物実測図(縮尺1/4)	44
第28図	S B 11・12測量図(縮尺1/80)	45
第29図	S B 11カマド測量図(縮尺1/30)	46
第30図	S B 11・12出土遺物実測図(縮尺1/4)	47
第31図	S B 10測量図(縮尺1/80)	48

第 32 図	S B 10 カマド測量図（縮尺 1/30）	49
第 33 図	S B 10 出土遺物実測図（縮尺 1/4・1/1）	50
第 34 図	S B 5 測量図（縮尺 1/80）	51
第 35 図	S B 5 カマド測量図（縮尺 1/30）	52
第 36 図	S B 5 出土遺物実測図（縮尺 1/4）	53
第 37 図	S B 3 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/80・1/4）	55
第 38 図	S B 8・9 測量図（縮尺 1/80）	56
第 39 図	S B 8 カマド測量図（縮尺 1/30）	57
第 40 図	S B 8 出土遺物実測図（縮尺 1/4・1/2）	58
第 41 図	S B 6・7 測量図（縮尺 1/80）	59
第 42 図	掘立 1 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/80・1/4）	61
第 43 図	掘立 2 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/80・1/4）	62
第 44 図	掘立 4 測量図（縮尺 1/80）	63
第 45 図	掘立 5 測量図（縮尺 1/80）	64
第 46 図	S X 1 出土遺物実測図（縮尺 1/4・1/1）	65
第 47 図	掘立 3 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/80・1/4）	67
第 48 図	掘立 6 測量図（縮尺 1/80）	
第 49 図	柱穴出土遺物実測図（縮尺 1/4・1/2・1/1）	68
第 50 図	第 V 層出土遺物実測図（縮尺 1/4・1/2・1/1）	69
第 51 図	地点不明出土遺物実測図（1）（縮尺 1/4）	70
第 52 図	地点不明出土遺物実測図（2）（縮尺 1/2）	71

表 目 次

第 3 章	樽味四反地遺跡14次調査	
表 1	S K 1 出土遺物観察表（土製品）	23
表 2	S D 1 出土遺物観察表（土製品）	
表 3	S D 1 出土遺物観察表（石製品）	
表 4	柱穴出土遺物観察表（土製品）	
表 5	包含層出土遺物観察表（土製品）	24
表 6	地点不明出土遺物観察表（土製品）	
表 7	地点不明出土遺物観察表（石製品）	

第 4 章	樽味四反地遺跡16次調査	
表 8	S K 1 出土遺物観察表（土製品）	74
表 9	S B 1 出土遺物観察表（土製品）	
表 10	S B 1 出土遺物観察表（石製品）	75

表 11	S B 1 出土遺物観察表（金属製品）	76
表 12	S B 1 出土遺物観察表（玉類）	
表 13	S B 2 出土遺物観察表（土製品）	
表 14	S B 11 出土遺物観察表（土製品）	
表 15	S B 12 出土遺物観察表（土製品）	77
表 16	S B 10 出土遺物観察表（土製品）	
表 17	S B 10 出土遺物観察表（金属製品）	
表 18	S B 10 出土遺物観察表（玉類）	
表 19	S B 5 出土遺物観察表（土製品）	78
表 20	S B 3 出土遺物観察表（土製品）	79
表 21	S B 8 出土遺物観察表（土製品）	
表 22	S B 8 出土遺物観察表（石製品）	
表 23	掘立 1 出土遺物観察表（土製品）	80
表 24	掘立 2 出土遺物観察表（土製品）	
表 25	S X 1 出土遺物観察表（土製品）	
表 26	S X 1 出土遺物観察表（玉類）	81
表 27	掘立 3 出土遺物観察表（土製品）	
表 28	柱穴出土遺物観察表（土製品）	
表 29	柱穴出土遺物観察表（金属製品）	
表 30	柱穴出土遺物観察表（玉類）	
表 31	第 V 層出土遺物観察表（土製品）	
表 32	第 V 層出土遺物観察表（石製品）	82
表 33	第 V 層出土遺物観察表（金属製品）	
表 34	第 V 層出土遺物観察表（玉類）	
表 35	地点不明出土遺物観察表（土製品）	
表 36	地点不明出土遺物観察表（石製品）	

写真図版目次

第 3 章 樽味四反地遺跡14次調査

- 図版 1 1. 調査前全景（西より）
 2. 北壁上層（南東より）
- 図版 2 1. 遺構検出状況（東より）
 2. 完掘状況（東より）
- 図版 3 1. S K 1 検出状況（北より）
 2. S D 2 遺物出土状況①（北東より）

- 図版4 1. SD2遺物出土状況②(南東より)
2. SD1・2完掘状況(西より)
- 図版5 1. SD1出土遺物
2. 出土遺物(SP4、第Ⅲ層、地点不明)
- 第4章 樽味四反地遺跡16次調査
- 図版6 1. 調査地全景(北東より)
2. 西壁土層(南東より)
- 図版7 1. 北半部遺構検出状況(南より)
2. 南半部遺構検出状況(北より)
- 図版8 1. 北半部完掘状況(北東より)
2. 南半部完掘状況(北より)
- 図版9 1. SB4検出状況(北より)
2. SK1遺物出土状況(南東より)
- 図版10 1. SK1完掘状況(南より)
2. SB1・2検出状況(東より)
- 図版11 1. SB1遺物出土状況①(北より)
2. SB1遺物出土状況②(南より)
- 図版12 1. SB11・12検出状況(西より)
2. SB11カマド検出状況(東より)
- 図版13 1. SB10検出状況(南より)
2. SB10カマド検出状況(西より)
- 図版14 1. SB5検出状況(南より)
2. SB5カマド遺物出土状況(南東より)
- 図版15 1. SB5カマド検出状況(南より)
2. SB6・7検出状況(北より)
- 図版16 1. SB8・9検出状況(北東より)
2. 掘立5検出状況(北より)
- 図版17 1. 作業風景(南より)
2. 現地説明会(北より)
- 図版18 1. 出土遺物(SK1、SB1①)
- 図版19 1. 出土遺物(SB1②、SB2)
- 図版20 1. 出土遺物(SB11、SB12、SB10)
- 図版21 1. 出土遺物(SB5、SB8・9、SX1、柱穴)
- 図版22 1. 出土遺物(第V層、地点不明)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成18年度に、松山市樽味地区は国より重要遺跡確認地域に指定された。この結果を受け、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）と財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は委託契約を結び、樽味地区における重要遺跡確認調査を実施することになった。

まず、平成18年度は松山市樽味4丁目219番1と樽味4丁目222番1の2箇所を調査対象地とした。なお、既往の調査より前者を樽味四反地遺跡14次調査地、後者を樽味四反地遺跡16次調査地とした。とりわけ、16次調査地は平成8年度に実施した樽味四反地遺跡6次調査地（超大型建物検出遺跡）の西側に隣接した場所にあたる。

これらのことから、文化財課と埋文センターは協議をおこない、国庫補助事業として発掘調査を実施することが決定した。樽味四反地遺跡14次調査は平成18年7月、樽味四反地遺跡16次調査は11月より発掘調査を開始した。

2. 調査・整理の経緯

調査 樽味四反地遺跡14次調査は、平成18年7月から2ヶ月間、同16次調査は平成18年11月から平成19年3月までの5ヶ月間実施した。発掘調査は埋文センターが主体となり、重機の使用による表土掘削をおこない、その後、作業員を導入し包含層の掘り下げや遺構・遺物の検出及び測量作業を実施した。なお、調査は国庫補助事業であり遺構保護のため住居や土坑、柱穴等の遺構は半截を基本としたため未掘部分がある。そのため、未掘部分については配置図や測量図では点描または「未掘」として表記している。また、調査にあたり国家座標第Ⅳ座標系にもとづく4級基準点の設置業務を測量業者に委託した。発掘調査中には、下條信行氏（元愛媛大学教授）を中心とした委員会のメンバーによる遺跡検討会を数回実施し、調査方法や遺構・遺物の分析等の指導を受けた。なお、調査終了時には一般市民対象の現地説明会を開催し、啓蒙普及活動にも努めた。

整理 発掘調査の翌年度、平成19年度には埋文センター内にて報告書作成に伴う整理作業を実施した。発掘調査と同様、埋文センターと文化財課が整理作業に伴う委託契約を結び、14次調査の整理作業は平成19年4月から平成20年3月、16次調査は平成19年7月から平成20年3月までの間に出土遺物の復元や実測、測量図の合成や作図等をおこなった。その後、平成20年度には、調査報告書刊行に伴う編集や校正作業を実施した。

3. 刊行組織（平成21年1月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	山内 泰
事務局	局長	石丸 修
	企画官	仙波 和典
	企画官	古鎌 靖
	企画官	岸 紀明

文化財課	課長	家久 則雄
	主幹	森 正経
	主幹	森川 恵克
(財)松山市生涯学習振興財團	理事長	中村 時広
	事務局長	吉岡 一雄
埋蔵文化財センター	所長兼考古館長	丹生谷博一
	次長兼教育普及担当リーダー	折手 均
	次長兼調査担当リーダー	重松 佳久
	調査員	宮内 慎一
	調査員	水本 完児
	調査員	大西 朋子 (写真担当)

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 立地 (第1図)

樽味四反地遺跡14次・16次調査地が所在する松山平野は四国山地北西部に位置し、石手川や重信川などの大小河川で形成された複合扇状地性の平野である。このうち、調査地北側を流れる石手川は高檜山から西方に流れ、途中に重信川と合流する。石手川が形成した扇状地は、松山市石手付近（標高50m）を扇頂とし南西方向に広がりをみせ、その範囲は半径約4km、標高20mの地点までを含んでいる。石手川扇状地は、山麓部の松山市正円寺や畠寺にかけての古期扇状地面と、道後、中村に広がる新期扇状地面、さらには石手川南岸東側に広がる洪積世の段丘化した低位段丘面とに区分される。このうち、調査地は石手川南岸新期扇状地面に立地している。なお、調査地が所在する扇状地面は、今から約23,000年前、始良Tn火山灰の降下、堆積時には既に段丘化していたものと推測されている。近年の発掘調査において、樽味遺跡1次調査や樽味四反地遺跡1次調査で、2次的な堆積状況の火山灰が検出されているほか、同じ扇状地面にある東本遺跡4次調査からも同様の火山灰が確認されている。一方で、洪積世の最終氷期、約2万年～1.8万年前には、石手川は道後城北地区を通り、松山市堀江地区へ流化していたものと推定されており、石手川南岸にある樽味地区では洪積世最末期から完新世にかけて石手川北岸に比べ、安定した地形を形成していたものと考えられている。

2. 環境 (第2図)

樽味四反地遺跡14次・16次調査地が所在する松山市樽味地区では、道路建設工事や民間の開発行為等により近年発掘調査が増加している。ここでは、樽味地区をはじめ、前述の新期扇状地面に展開する遺跡を中心に遺跡の状況を概観する。

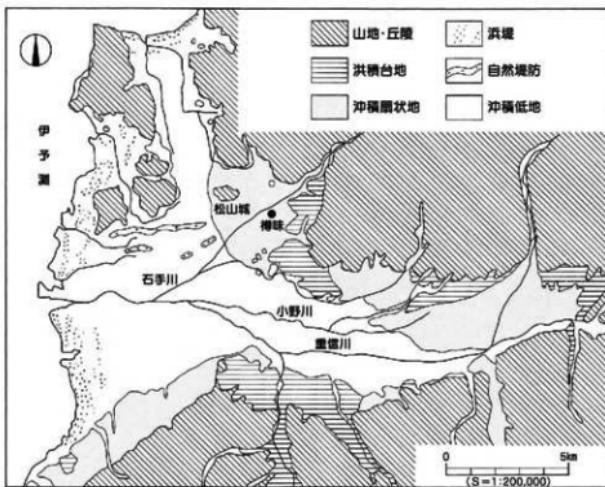
旧石器時代 当該期の遺構は確認されておらず、遺物は表面採集や後世の遺構への流入資料である。経石山古墳からはスクレーパーや楔形石器、桑原西稻葉遺跡2次調査では角錐状石器、さらには樽味四反地遺跡6次調査や東本遺跡4次調査よりナイフ形石器が出土している。このほか、始良Tn火山灰(ΔT火山灰)の確認された事例が、近年の発掘調査で報告されており、樽味遺跡1次調査や樽味四反地遺跡1次調査、枝松遺跡3次調査では2次的な堆積状況、東本遺跡4次調査では1次的な堆積状況の

テフラが確認されている。

縄文時代 當該期の遺構は稀少であるが、近年の調査で縄文時代晩期とされる遺構が検出されている。松山市道「樽味溝辺線」関連の調査において、東野森ノ木遺跡2次・4次調査と樽味立派遺跡3次調査では晩期の土器を含む貯蔵穴が数基検出され、樽味地区における集落の出現期を考えるうえで貴重な事例となっている。このほか、東本遺跡4次調査では、今から約6,300万年前に降下したとされる鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）が確認され、火山灰の下位層からは縄文時代早期の槍先形石器やスクレーパーが出土している。

弥生時代 弥生時代になると、対象となる遺跡数が増加する。前期では、樽味四反地遺跡5次調査において堅穴住居や土坑が検出され、さらに樽味立派遺跡3次調査や樽味四反地遺跡7次調査では前期末の溝が確認されている。中期では前半の資料ではなく、後半の資料が大半を占める。樽味高木遺跡2次調査や樽味四反地遺跡5次調査では、円形及び方形堅穴住居が検出され、樽味高木遺跡3次調査からは土坑が検出されており、当該期の集落構造や住居構造を知る手がかりとなっている。

後期では、後葉から終末期における堅穴住居の検出事例が増加すると共に、他地域との交流が知れる貴重な資料が数多く確認されている。後期後葉では、樽味立派遺跡や樽味四反地遺跡、樽味高木遺跡のほか、扇状地南側に所在する桑原高井遺跡1次調査や東本遺跡2・4・5次調査、枝松遺跡3・5次調査において堅穴住居が多数確認されている。特に、東本遺跡で検出した堅穴住居のうち、円形を呈する住居は直径8mを超える大型住居で、住居内からは鉄鏃や鉄斧などの鉄製品が多く出土することから、鍛冶関連の遺構である可能性が示唆されている。



第1図 松山平野の地形概要図

- 梅咲四反地遺跡前14次
- 梅咲四反地遺跡前16次
- 梅咲四反地遺跡前6次
- 梅咲四反地遺跡前8次
- 梅咲高木遺跡3次
- 梅咲西船塚2次
- 梅咲立窓1次
- 梅咲立窓3次
- 梅咲酒跡
- 鹿野森ノ木遺跡1次
- 煙寺竹ヶ谷古墳
- 東野谷茶屋台古墳
- 船石山古墳
- 三島柳社古墳
- 梅原高井塙跡11次
- 桑本遺跡4次
- 枝松遺跡5次
- 清安城址
- 岩崎遺跡
- 速後今市遺跡
- 久保遺跡
- 來京遺跡
- 松山大学城内遺跡
- 来喜神社古墳



図2 四周主要遺跡分布図(S=1:25,000)

このほか、東本遺跡4次調査検出のS-B203号住居からは破鏡、包含層資料ではあるが樽味立派遺跡1次調査からは中国鏡である「貨泉」、樽味高木遺跡3次調査では準構造船が描かれた絵画土器片などが出土しており、他地域との交流を知る貴重な考古資料が注目される。

古墳時代 古墳時代初頭では、3棟の超大型建物が注目されている。平成8年度に実施した樽味四反地遺跡6次調査において、床面積約130m²を測る総柱構造の床東式建物が発見された。その後、平成15年度には樽味四反地遺跡8次調査にて床面積160m²前後を測る3棟のうち最大規模の建物が発見された。さらに、平成17年度には樽味四反地遺跡13次調査において、床面積100m²前後を測る大型建物が発見された。これら3棟の建物は樽味地区において、当該期の首長層などに関係する特殊建物ではないかと考えられている。なお、前期の集落遺構は樽味地区のみならず、松山平野内においても検出事例が非常に少なく、集落様相は不明な点が多い。

中期から後期では、遺跡数が飛躍的に増大する。中期では樽味高木遺跡1次調査をはじめ、樽味四反地遺跡や樽味立派遺跡など多くの遺跡で堅穴住居や土坑が検出され、集落経営がさかんに営まれていたことがわかる。なお、樽味高木遺跡8・9・11次調査では堅穴住居内から波来系遺物が数多く出土している。後期では、樽味四反地遺跡7・8次調査や樽味高木遺跡7・9次調査などから堅穴住居や溝が確認されている。以上のことから、古墳時代中期から後期を通して集落が継続的に営まれていたものと推測される。一方、丘陵部や古期扇状地面上には中期から後期の古墳が数多く存在する。丘陵上では、中期後半の築造とされる畠寺竹ヶ谷古墳や東野お茶屋台古墳があり、古期扇状地面上には中期から後期の前方後円墳である経石山古墳や三島神社古墳が造営されている。

古代 樽味四反地遺跡1・5次調査では自然流路が検出され、5次調査からは円面硯や奈良三彩の壺が出土している。また、東野森ノ木遺跡1次調査や樽味四反地遺跡8次調査では土坑が検出されるなど、古代の集落関連遺構の検出事例が近年増加傾向にある。

中世 樽味遺跡1・2次調査では、14~16世紀の溝や掘立柱建物が検出されている。また、東野森ノ木遺跡1次調査からは溝や掘立柱建物のほか、完形の白磁四耳壺が埋納された土坑が検出され、樽味四反地遺跡8次調査では素振りの井戸が検出されている。これらのことから、当該期の生活関連遺構が部分的ではあるが、広く分布していることがわかる。なお、その中心は愛媛大学農学部構内あたりであると考えられている。

【文献】

- ① 平井 幸弘 1989 「樽味遺跡及び樽味遺跡をとりまく地形環境」「廬子・樽味遺跡の調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ
- ② 畠松 佳久 1992 「石手川水系に於ける旧石器文化」「桑原地区的遺跡」松山市文化財調査報告書第26集
- ③ 宮本 一夫 1989 「廬子・樽味遺跡の調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ
- ④ 梅木 謙一 1992 「樽味四反地遺跡」「桑原地区的遺跡」松山市文化財調査報告書第26集
- ⑤ 高尾 和長 1996 「東本遺跡4次調査」「東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査」松山市文化財調査報告書第54集
- ⑥ 梅木 謙一 1992 「桑原西稻葉遺跡2次調査」松山市文化財調査報告書第26集
- ⑦ 宮内 慎一 1994 「樽味高木遺跡3次調査」「桑原地区的遺跡Ⅱ」松山市文化財調査報告書第46集
- ⑧ 河野 史知 2007 「東野森ノ木遺跡1・2・3・4次調査」「東野森ノ木遺跡1・2・3・4次調査地、樽味立派遺跡3次調査地、樽味高木遺跡7・8・9・11次調査地、

樽味四反地遺跡7・8・9・11次調査地、枝松遺跡6次調査地

松山市文化財調査報告書第117集

- ⑨ 高尾 和長 2007 「樽味立派遺跡3次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- ⑩ 河野 史知 1994 「樽味高木遺跡2次調査」松山市文化財調査報告書第46集
- ⑪ 高尾 和長 2002 「樽味四反地遺跡5次調査」松山市文化財調査報告書第87集
- ⑫ 梅木 謙一 1996 「桑原高井遺跡1次調査」松山市文化財調査報告書第54集
- ⑬ 梅木 謙一 1996 「東本遺跡2次調査」松山市文化財調査報告書第54集
- ⑭ 河野 史知 2001 「東本遺跡5次調査」松山市埋蔵文化財調査年報12
- ⑮ 相原 浩二 1995 「枝松遺跡5次調査」松山市埋蔵文化財調査年報VI
- ⑯ 宮内 優一 1994 「樽味四反地遺跡4次調査」松山市文化財調査報告書第46集
- ⑰ 橋本 雄一 2005 「樽味四反地遺跡『-6次調査-』」松山市文化財調査報告書第106集
- ⑱ 加島 次郎 2007 「樽味四反地遺跡7・8次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- ⑲ 相原 秀仁 2006 「樽味四反地遺跡13次調査」松山市埋蔵文化財調査年報18
- ㉑ 高尾 和長 2007 「樽味高木遺跡7・8・11次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- ㉒ 加島 次郎 2007 「樽味高木遺跡9次調査」松山市文化財調査報告書第117集
- ㉓ 田崎 博之 1993 「樽味遺跡Ⅰ-樽味遺跡2次調査-」愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ

第3章 樽味四反地遺跡14次調査

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

調査地が所在する松山市樽味地区では近年、宅地開発や道路建設工事等により発掘調査が盛んにおこなわれ、縄文時代から中世に至る集落関連遺構や遺物が多数発見されている。松山市が建設した「市道樽味溝辺線」関連の発掘調査では縄文時代の土坑や弥生時代前期の溝など、樽味地区において初例となる遺構が検出されたほか、朝鮮半島系の土器が数多く出土した。また、古墳時代初頭とされる大型建物が3棟発見されるなど、松山平野において重要な地域であったことが近年の調査・研究の結果、明らかになってきた。

平成15年度には松山市教育委員会が主体となり、樽味地区重要遺跡確認調査として樽味地区内における試掘調査を実施した。このうちB区として実施した調査の結果、柱穴や遺物包含層を確認した。この結果を受け、平成17年度に財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）と松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）は協議を重ね、国庫補助事業として発掘調査を実施することを決定した。

発掘調査は埋文センターと文化財課が委託契約を結び、平成18年7月より開始した。

(2) 調査の経緯

2006（平成18）年7月3日、調査前の準備作業として調査地内に安全対策用の杭やロープを設定し、発掘用具を搬入する。7月5日より重機（バックホー0.1m³）の使用により、表土層の掘削を開始する。7月7日、作業員を投入し第V層上面にて遺構検出作業をおこない、溝や土坑、柱穴等を検出する。7月10日、測量業者（国際航業株式会社）に国家座標杭の設置業務を委託し、調査地内に5m四方のグリッドを設定する。7月12日、遺構検出状況写真を撮影後、土坑から順に掘り下げ及び測量作業をおこなう。7月26日、検出した溝の全体像が不明であったため、調査区を西側へ約1m拡張し、再度、遺構検出作業を実施する。8月25日、遺構完掘状況写真を撮影し、測量作業を終了する。8月26日、一般市民対象の現地説明会を開催し、参加者50名を得た。8月28日、重機により調査区北壁沿いに深掘トレンチを掘削し、遺構検出面下の土層堆積を確認する。8月29日、遺構保護の為、遺構内に真砂土を投入し、その後、重機により埋め戻し作業をおこなう。8月31日、発掘用具や事務所を撤去し、屋外調査を終了する。

(3) 調査組織

所 在 地：松山市樽味4丁目219番1

調査期間：2006（平成18）年7月3日～同年8月31日

調査面積：64m²

土地所有者：浅川 光大

調査目的：樽味地区重要遺跡確認調査

調査担当：松山市教育委員会文化財課主査 栗田 正芳

財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター調査員 水本 完児

2. 層位 (第4・5図)

(1) 基本層位

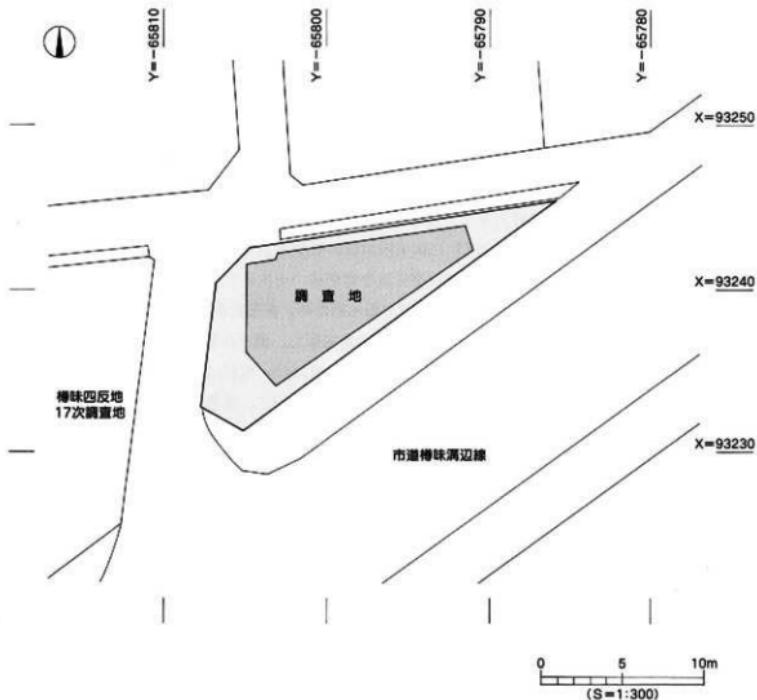
調査地は、調査以前は雑種地であった。現況では標高40m前後を測る。調査地の基本層位は、以下の7層である。なお、6・7層は調査区北壁沿いに設定した深掘トレンチにて確認した土層である。

I層：青灰色（10BG6/1）砂質シルトで、水田耕作に伴う耕作土である。層厚10~20cm。

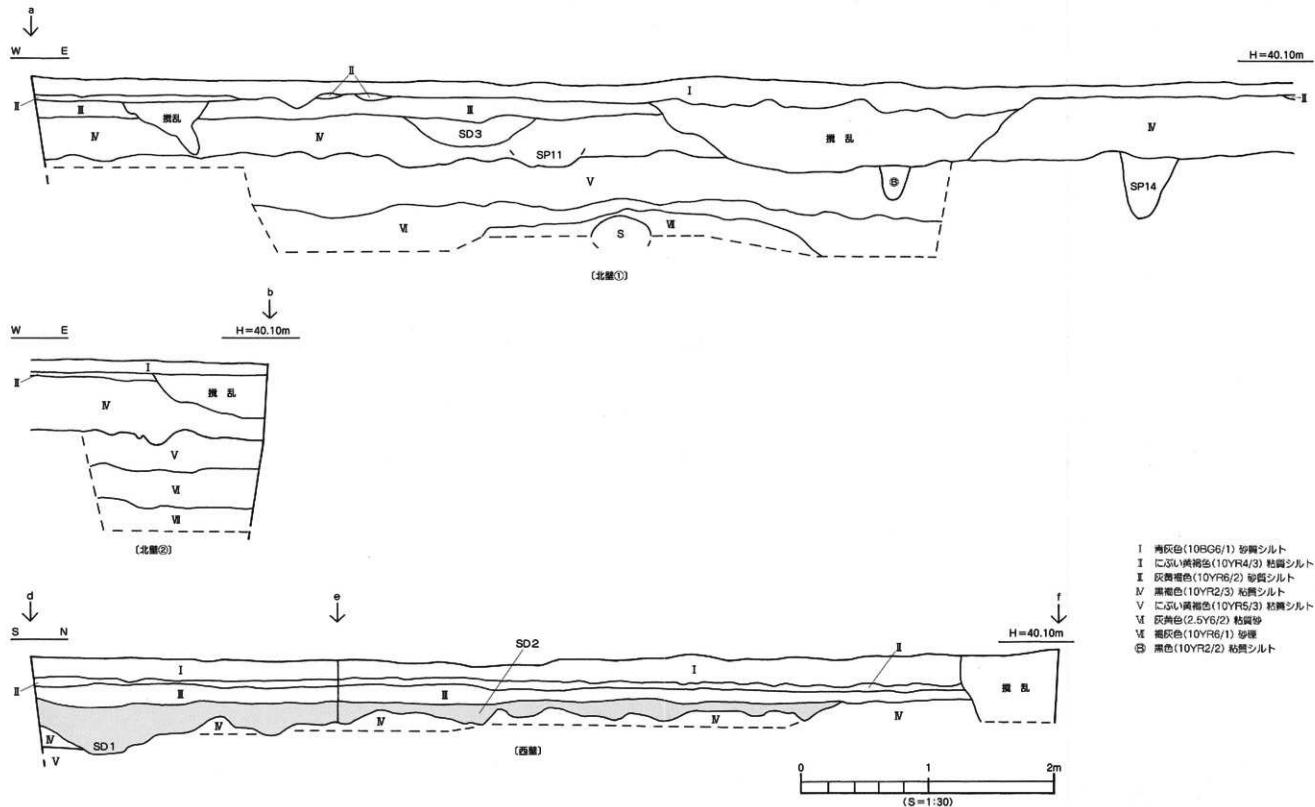
II層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルトで、水田耕作に伴う床土である。調査区内にて部分的に見られる。層厚2~5cm。

III層：灰黄褐色（10YR6/2）砂質シルトで、調査区ほぼ全域に見られる。層厚5~30cm。本層中からは、重機掘削時に弥生土器や土師器、須恵器が混在して出土した。

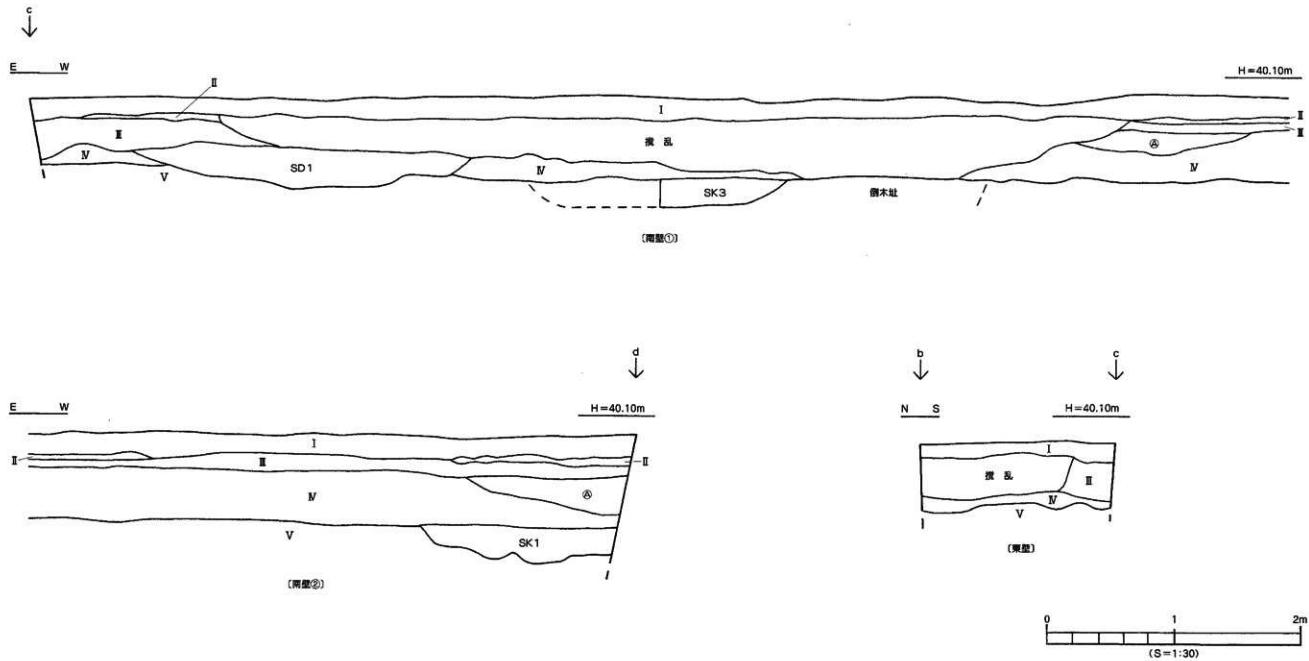
IV層：黒褐色（10YR2/3）粘質シルトで、調査区ほぼ全域に見られる。層厚10~40cm。調査壁の土層観察により、溝（SD1~3）や暗褐色粘質シルトを埋土とする遺構〔Ⓐ〕が本層上面から掘り込まれていることを確認した。本層中からは、主に古墳時代から古代に時期比定される土師器や須恵器が出土した。



第3図 調査地測量図



第4図 調査区北壁・西壁土層図



I 黄褐色(10BG6/1) 粘質シルト
II 黒褐色(10YR2/3) 粘質シルト
III 黄褐色(10YR6/2) 粘質シルト

IV 黑褐色(10YR2/3) 粘質シルト
V にじい黄褐色(10YR5/3) 粘質シルト
④ 暗褐色(7.5YR3/3) 粘質シルト

第5図 調査区南壁・東壁土層図

V層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質シルトで、深掘トレンチの土層観察により厚さ50cm程度の堆積をなす。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。なお、本層上面は調査区東側から西側へ向けて緩傾斜をなし、東端では標高39.4m、西端では39.2mを測る。

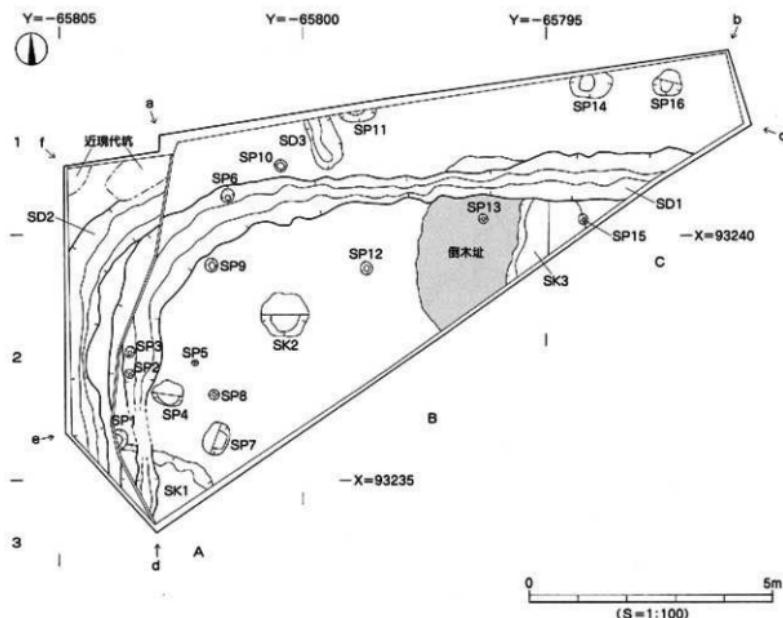
VI層：灰黄色（2.5Y6/2）を呈する粘質砂で、層厚30cm以上を測る。

VII層：褐灰色（10YR6/1）を呈する砂疊層で、径5～15cm大の円疊が混入する。

検出遺構や出土遺物から、IV層は古墳時代、III層は中世までに堆積したものと考えられる。なお、調査にあたり調査区内を5m四方のグリットに分けた。グリットは遺構の位置表示や遺物の取り上げに利用した。

（2）検出遺構・遺物

調査で検出した遺構は、溝3条（古墳～古代）、土坑3基（弥生）、柱穴16基、倒木址1基である。遺物は遺構や包含層、及び重機掘削時に出土したもので、弥生土器（中～後期）、土師器（古墳～中世）、須恵器（古墳～古代）、輸入陶磁器、石器である。



第6図 遺構配置図

3. 遺構と遺物

(1) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、土坑3基を検出した。

SK1 (第6・7図、図版3)

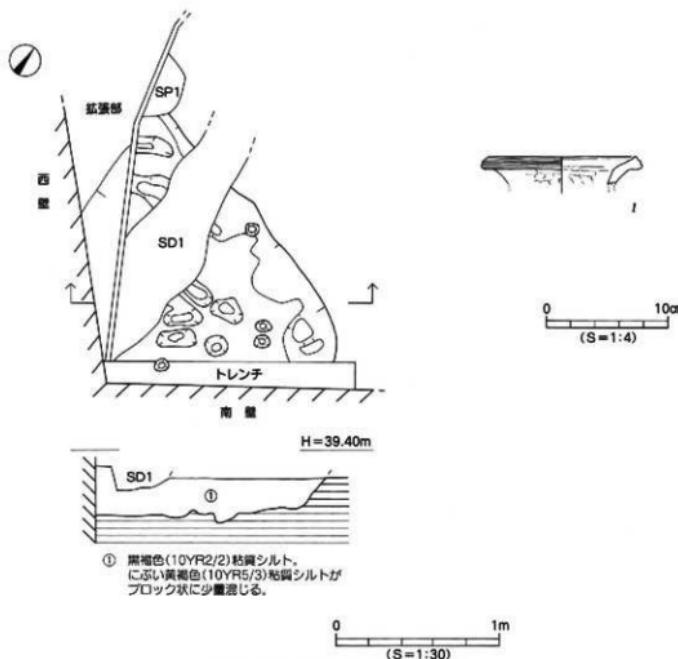
調査区南東隅A2・3区に位置する。土坑中央部上面には溝SD1、北西部はSP1（埋土：暗褐色粘質シルト）に切られ、南側は調査区外に続く。第V層上面での検出であり、第IV層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.40m、南北検出長1.50m、深さは検出面下25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）である。土坑底面にて小ビットや小溝が検出されたが、埋土はすべて土坑埋土と同様の黒褐色粘質シルトである。

遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化し得るものを1点掲載した。

SK1出土遺物 (第7図)

1は弥生土器の壺である。口縁端部を上下方に拡張させ、口縁端面に凹線文3条を施す。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、検出層位や出土遺物から、概ね弥生時代中期後半以降とする。



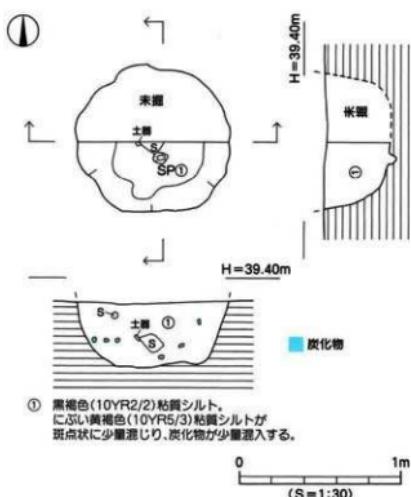
第7図 SK1測量図・出土遺物実測図

SK2 (第6・8図)

調査区中央部や南西寄りA2区に位置する。第V層上面での検出であるが、土坑北半部は遺構保護の為、未掘である。平面形態は円形を呈し、規模は径0.80m、深さは検出面下38cmを測る。断面形態は丸みのある逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトが斑点状に少量混入）である。なお、埋土中には少量の炭化物が含まれている。土坑中央部底面にて、径15cm、深さ10cm程度の小ピットを検出した。ピット埋土は、黒褐色粘質シルトである。

遺物は埋土中より弥生土器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や埋土から、概ね弥生時代の遺構とする。



第8図 SK2 測量図

SK3 (第6・9図)

調査区中央部東寄りB1～C2区に位置する。土坑北側は溝SD1に切られ、東側はSP15（埋土：暗褐色粘質シルト）に切られている。第V層上面での検出であり、第IV層が覆う。土坑東半部は遺構保護の為、未掘である。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.70m、南北検出長2.00m、深さは検出面下15cmを測る。断面形態は丸みのある逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）である。土坑底面は起伏があり、土坑壁体及び底面は倒木址（埋土：極暗褐色粘質シルト）となる。

遺物は埋土中より弥生土器片と径5～10cm大の礫が数点出土したが、図化しうるものはない。

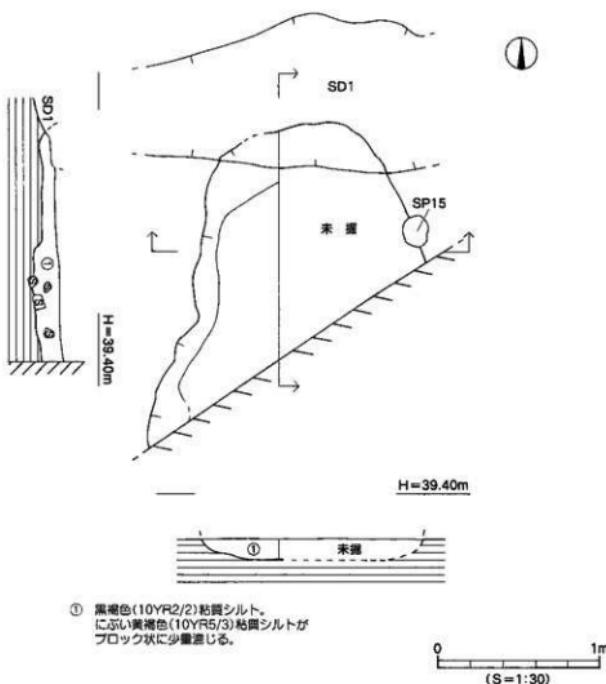
時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や埋土等から、概ね弥生時代の遺構とする。

(2) 古墳時代から古代の遺構と遺物

古墳時代から古代の遺構は、溝3条を検出した。

SD1 (第6・10図、図版4)

調査区中央部を東西方向に延び、北西部で南側へ「L」字状に折れ曲がる溝である。A1～C1区に位置する。溝南西部は土坑SK1、東側は土坑SK3を切り、溝東端及び南端は調査区外に続く。第V層上面での検出であるが、調査区南壁の土層観察により第IV層上面から掘り込まれていることを確認した。なお、溝上面は第III層が覆う。規模は検出長約17m、幅30～120cm、深さは検出面下6～20cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底面は東側から南側へ

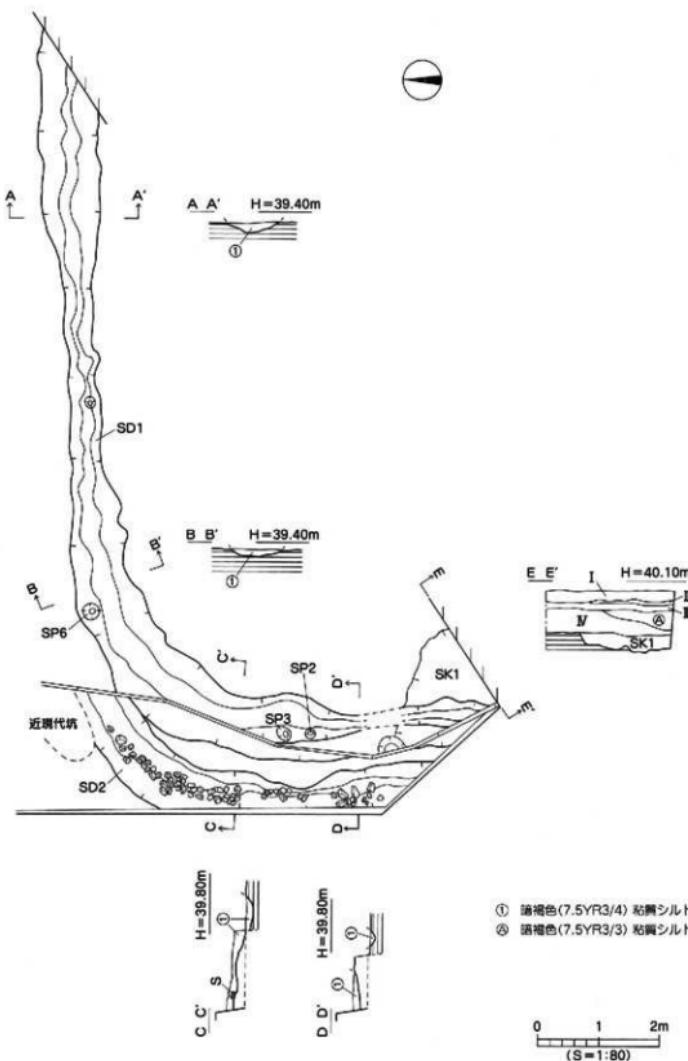


第9図 SK3 測量図

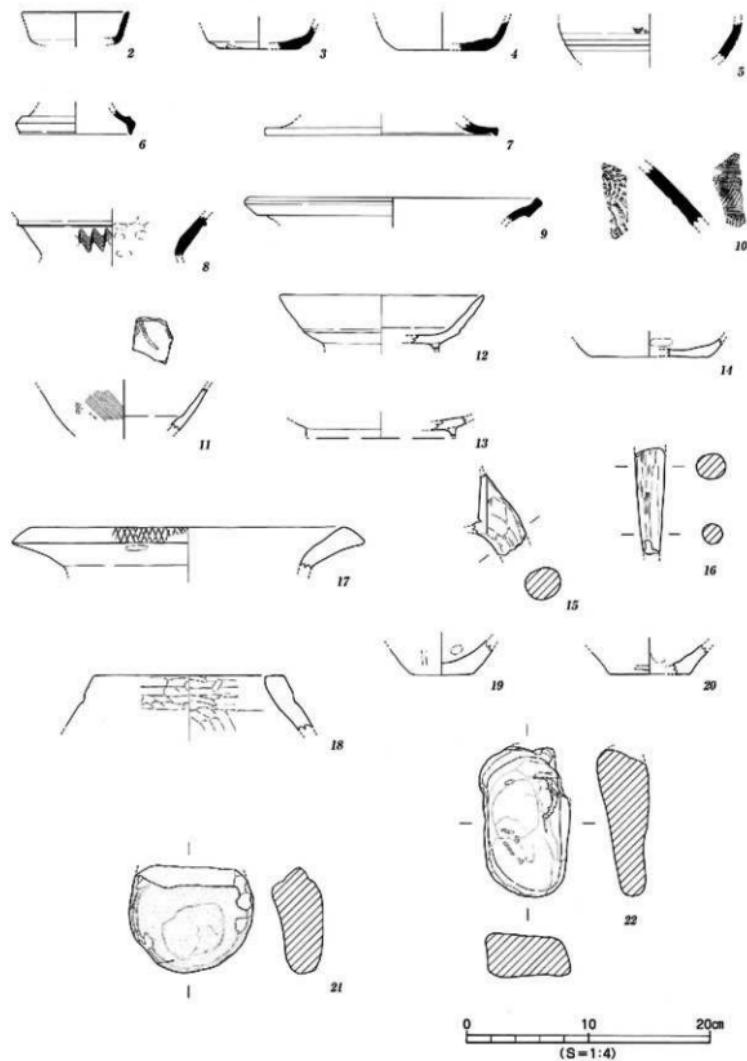
向けて傾斜をなし、比高差約15cmを測る。溝西側壁体にて3基の柱穴（S P 2・3・6）を検出した。柱穴規模は径15~30cm、深さ3~10cmを測る。柱穴掘り方埋土は暗褐色粘質シルトである。溝内からは弥生土器片や土師器片、須恵器片のほか石器が混在して出土した。

SD1 出土遺物（第11図、図版5）

2~4は須恵器の壺で、2の壺部下位には1条の沈線が巡る。3・4は平底で、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。5~7は須恵器の高壺である。5は無蓋高壺の壺部で、壺部下位に波状文と凸線2条を施す。6・7は脚部片で、裾端部は下方に屈曲する。8は須恵器の壺で、頸部に凸線1条と波状文を施す。9・10は須恵器の壺である。9は口縁端部が断面長方形形状を呈する。10は肩部片で外面に平行印き、内面には円弧印きを施す。11は龍泉窓系の青磁碗で、釉調は薄緑灰色を呈する。12・13は土師



第10図 SD1 + 2 測量図



第11図 SD1 出土遺物実測図

器の椀である。12は体部が直線的に立ち上がり、体部下位に稜をもつ。13は断面三角形状の高台をもつ。14は土師器壺の底部で平底となるが、底部調整は摩滅の為不明である。15・16は土師器土釜の脚部であり、断面円形状を呈する。17・18は弥生土器の壺である。17は広口壺で、口縁端面に斜格子目文を施す。18は無頸壺で、口縁端面は面をなす。19は甕、20は壺の底部で平底となる。21は敲石、22は磨石で、23は中央部が凹む。

時期：遺物が混在しており時期特定は難しいが、出土品のうち古墳時代から古代に時期比定される須恵器片や土師器片の占める割合が多く、土坑との切り合いや検出層位から、概ね古墳時代から古代の遺構とする。

SD2 (第6・10図、図版3・4)

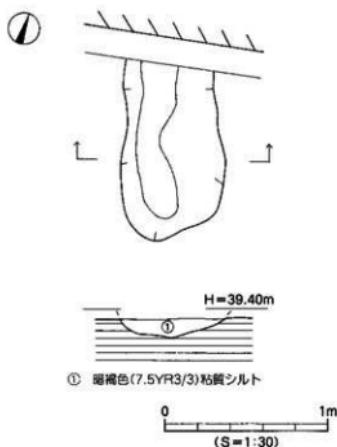
調査区西側A1～3区に位置する。調査区を西側に拡張した際には検出した溝で、溝北側は近現代坑に削平され、南端は調査区外に続く。第IV層上面での検出であり、第III層が覆う。規模は検出長6.5m、幅30～90cm、深さは検出面下5～10cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土はSD1と酷似する暗褐色粘質シルトである。溝底面は北側から南側へ向けて緩傾斜をなし、比高差約7cmを測る。溝内からは少量の弥生土器片や土師器片が出土したほか、埋土中位から下位にて径5～20cm大の河原石が列をなして出土した。なお、SD1と一部重複する箇所があり、SD1とSD2は同一の溝である可能性がある。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や埋土がSD1と同様であることから、概ね古墳時代から古代の遺構としておく。

SD3 (第6・12図)

調査区北側中央部B1区で検出した南北方向の溝で溝南端は消失し、北側は調査区外に続く。第V層上面での検出であるが、調査区北壁の土層観察により第IV層上面から掘り込まれた遺構であることを確認した。規模は検出長1.12m、幅0.66m、深さは検出面下10cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定はできないが、検出層位や埋土等から、概ね古墳時代から古代の遺構としておく。



第12図 SD3 測量図

(3) その他の遺構と遺物

調査では、倒木址 1 基と 16 基の柱穴を検出したほか、包含層や重機掘削時に遺物が出土した。重機掘削時に出土した遺物は層位や地点が不明なものがあり、それらは「地点不明出土遺物」として実測図を掲載した。

1) 倒木址（第6図）

調査区東側 B 1・2 区で検査した。倒木址上面には溝 S D 1 や土坑 S K 3 のほか、S P 13（埋土：灰褐色粘質シルト）が存在する。倒木の規模は東西検出長 2.3m、南北検出長 3.7m を測る。なお、発掘調査時は平面プランのみを測量し、掘り下げ等は行っていない。埋土は粘性の強い極暗褐色粘質シルトである。倒木上面は第Ⅳ層が覆う。

2) 柱穴（第6図）

調査では 16 基の柱穴を検出した。埋土で分類すると、以下の 4 種類（1 類～4 類）に分けられる。

- 1 類：灰褐色粘質シルト………S P 8～10・12・13 （5 基）〔土師器が出土〕
- 2 類：暗褐色粘質シルト………S P 1～3・6・15 （5 基）〔弥生土器・土師器・須恵器が出土〕
- 3 類：黒褐色粘質シルト………S P 4・5・7・11・14（5 基）〔弥生土器・土師器が出土〕
- 4 類：黒色粘質シルト………S P 16 （1 基）〔弥生土器が出土〕

上記の柱穴のうち、3 類と 4 類の柱穴から出土した遺物を 4 点掲載した。

出土遺物（第13図、図版 5）

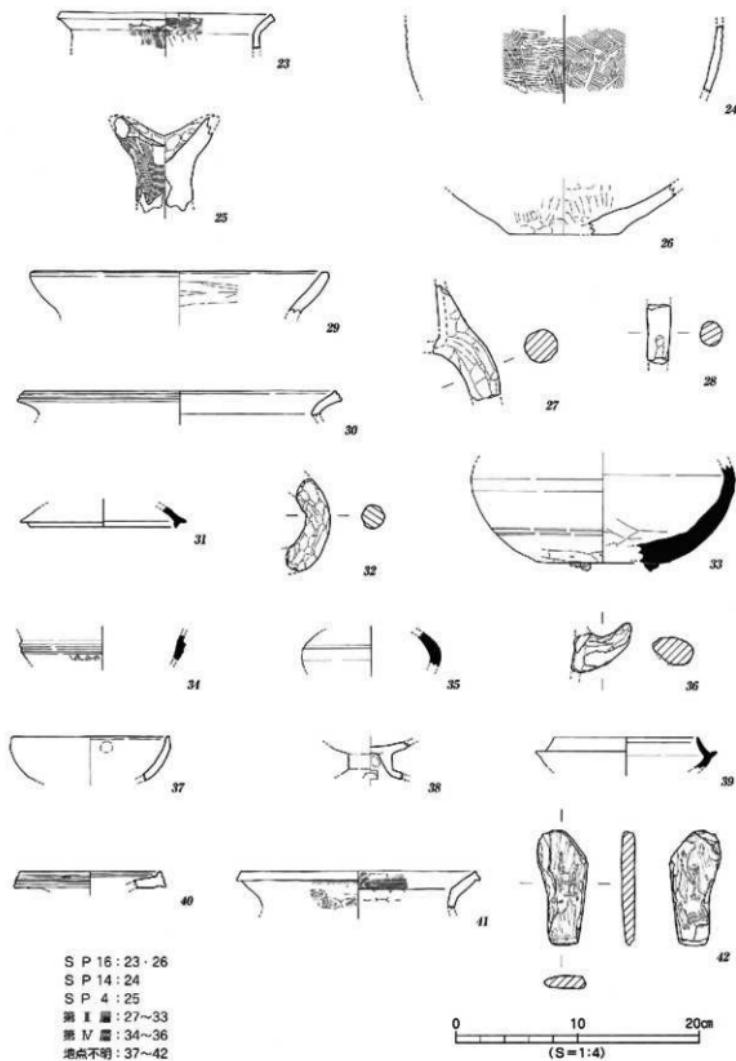
23・26 は S P 16 出土品、24 は S P 14 出土品、25 は S P 4 出土品である。23・24 は弥生土器の壺で、24 は外面にタキ調整、内面にはヘラミガキ調整を施す。25 は弥生土器の支脚で、受部は「U」字状にカットされ、柱部は中実となる。弥生時代末。26 は弥生土器の壺で、平底となる。弥生時代中期後半。

3) 包含層出土遺物（第13図、図版 5）

27～33 は第Ⅲ層、34～36 は第Ⅳ層出土品。27・28 は土師器上釜の脚部片で、断面円形状を呈する。14～15 世紀。29 は土師器の壺で、口縁端部は丸く仕上げる。6 世紀。30 は弥生土器の壺で、口縁端部に凹線文 2 条を施す。弥生時代中期後半。31 は須恵器の壺蓋で、かえり端部は尖る。7 世紀前半。32 は須恵器四耳壺の把手部で、断面円形状を呈する。6 世紀。33 は須恵器長頸壺の底部で、焼成時の火ぶくれが残る。7 世紀。34 は須恵器の無蓋高壺で、凸線 2 条と波状文を施す。5 世紀後半。35 は須恵器の壺で、胴部上位に 1 条の沈線が巡る。6 世紀。36 は土師器壺の把手部で、やや上方に外反し、断面梢円形を呈する。6 世紀。

4) 地点不明出土遺物（第13図、図版 5）

37 は土師器の壺である。体部は内汚し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。5 世紀。38 は土師器の高壺である。低脚で、脚部に径 1.0cm 大の円孔を穿つ。4 世紀。39 は須恵器の壺身で、たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は尖る。6 世紀。40 は弥生土器の壺で、口縁端部に凹線文 3 条を施す。弥生時代中期後半。41 は弥生土器の壺で、口縁端部は「コ」の字状に仕上げる。弥生時代後期前半。42 は緑色片岩製の扁平片刃石斧で、敲打段階の未成品である。



第13図 柱穴・包含層・地点不明出土遺物実測図

4. 小 結

調査では、弥生時代から中世までの遺構や遺物を確認することができた。遺構は弥生時代の土坑と、古墳時代から古代までに存在したと考えられる溝のほか、柱穴を検出した。SK1は弥生時代中期後半の土器が出土した不整形状の土坑であるが、近年の調査において該期の竪穴住居や土坑が点在して確認されており、その分布範囲が調査地周辺まで広がっていることが判明した。溝は「L」字状に折れ曲がる形状をなし、第IV層（黒褐色粘質シルト）上面から掘り込まれた遺構である。樽味地区で検出される黒褐色系のシルト層は主に弥生土器や土師器、須恵器を包含しており、古墳時代までに堆積したものと推測されている。溝の時期特定は困難であるが、少なくとも古墳時代以降に掘削されており、古代まで存続した可能性がある。樽味地区における古代遺構の検出例は少ないが、調査地南東部に所在する樽味四反地遺跡5次調査では流路内から侃や奈良三彩など、古代寺院や官衙遺構に関連すると思われる資料が出土している。今回検出の溝や周辺調査の結果などから、今後は弥生時代や古墳時代のみならず、樽味地区における古代集落の解明が急務となる。

遺物一覧 一凡例一

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

調整欄 上器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、口端→口縁端部、胴→胴部、体→体部、脚→脚部、底→底部、坏→坏部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウラモ、密→精製土。

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4)→「1~4mmの大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

遺物観察表

表1 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	壺	口径(12.0) 残高 2.2	口縁側面に凸線文3条。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	茶色 茶色	石・長(1~2) ◎		

表2 SD1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
2	壺	口径(8.6) 残高 3.5	底部下位に1条の沈線が巡る。	凹輪ナデ	凹輪ナデ	灰色 白灰色	密		
3	壺	底径(6.8) 残高 1.9	底部下位に横あり。小片。	凹輪ナデ ヨコ軸へら切り	凹輪ナデ	淡乳白色 淡乳白色	密		
4	壺	底径(7.5) 残高 2.4	小片。	凹輪ナデ ヨコ軸へら切り	凹輪ナデ	灰系色 灰色	密 ◎		5
5	高壺	残高 3.0	無溝高壺。波状文+凸線2条。	凹輪ナデ	凹輪ナデ	青灰白色 灰色	密 ◎		
6	高壺	底径(9.0) 残高 2.0	脚部小片。 脚部は下方に屈曲する。	カキメ?	凹輪ナデ	青灰色 青灰色	密		
7	高壺	底径(18.7) 残高 1.1	脚部小片。 脚部は下方に屈曲する。	凹輪ナデ	凹輪ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
8	壺	残高 3.3	頭部片。凸線1条+波状文14条。	凹輪ナデ	ナデ・凹輪ナデ	灰色 灰色	密		
9	壺	口径(23.5) 残高 1.9	断面長方形の口縁部。小片。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	密 ◎		5
10	壺	残高 4.9	周部小片。	カキメ→ 平行印き	円弧印き	灰白色 焦灰色	密 ◎		
11	壺	残高 3.5	青磁表。	施粧	施粧	薄緑灰白色 薄緑灰白色	密 ◎	胎土: 灰色	
12	壺	口径(16.4) 残高 4.4	体部下位に横あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 淡茶褐色	密 ◎	黒斑?	
13	壺	残高 1.6	断面三角形状の高台。	ヨコナデ	マメツ	灰色 淡茶色	密・全 ◎	黒斑?	5
14	壺	底径(9.3) 残高 1.5	平底。	マメツ	ナデ・マメツ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~2) ◎		
15	土釜	残高 6.7	脚部片。断面円形。	ナデ ハケ?	-	-	暗茶褐色	石・長(1~3) ◎	
16	土釜	残高 8.6	脚部片。断面円形。	ナデ ハケ?	-	-	淡茶褐色	石・長(1~2)金 ◎	
17	壺	口径(25.4) 残高 3.4	広口壺。 口縁裏面に斜格子目文あり。	ナデ	ナデ(マメツ)	乳白色 橙黄灰褐色	石・長(1~3) ◎		5
18	壺	口径(15.4) 残高 4.5	無縫壺。口縁裏面は毫をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	淡灰色 灰色	石・長(1~2)金 ◎		5
19	壺	底径(5.0) 残高 2.8	平底。	ナデ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~2)金 ◎	黒斑	
20	壺	底径(6.5) 残高 2.4	平底。	タタキ (マメツ)	ナデ	淡褐色 暗灰色	石・長(1~3) ◎		

表3 SD1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材 質	法 量			備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
21	敲石	2/3	安山岩	8.7	10.1	4.0	479.3	
22	磨石	ほぼ完存	不明	12.2	7.0	4.1	506.3	

表4 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
23	壺	口径(17.2) 残高 2.9	「く」の字状口縁。口縁裏部は「コ」の字状に仕上げる。小片。	◎バケ・ヨコナデ ◎ハケ	◎バケ・ヨコナデ ◎板ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) ◎	SP16	
24	壺	残高 5.1	脚部片。	タタキ→ ハケ(4~5cm/m)→ミガキ	ハケ(4~5cm/m)→ミガキ	黑色 棕茶色	石・長(1~3) ◎	SP14 煤付	
25	支脚	残高 7.7	受部は「U」字状にカットされる。中実。	ナデ・ハケ	ナデ	深乳褐色 淡乳褐色	石・長(1~3)金 ◎	SP4	5
26	壺	底径(8.8) 残高 4.1	平底。	ナデ(マメツ)	ナデ	橙茶色 棕茶色	石・長(1~2) ◎	SP16	

表5 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	質 種		色調(外面) 乳茶色	胎土 焼成	備考	回版
				外 面	内 面				
27	土釜	残高 9.3	脚部片。断面円形。	ナデ	ナデ(マメツ)	淡茶色 乳茶色	密・金 ◎	石・長(1~2)金 ◎	Ⅳ層
28	土釜	残高 4.8	脚部片。断面円形。	ナデ	—	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ◎	石・長(1~2)金 ◎	Ⅳ層
29	壺	口径 (23.5) 残高 3.5	内港口縁。口縁諸部は丸い。	マメツ (ナデ?)	マメツ (ミガキ?)	乳茶色 乳橙褐色	石・長(1~4) ◎	石・長(1~4) ◎	Ⅳ層
30	壺	口径 (25.2) 残高 2.1	口縁諸面に巴紋文2条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1~2)金 ◎	石・長(1~2)金 ◎	Ⅳ層
31	环巻	口径 (11.8) 残高 1.6	小片。 (口縁)回転ナデ	マメツ (口縁)回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	密 ◎	Ⅳ層
32	壺	残長 7.6	四耳壺。断面円形。	ナデ	—	青灰色	密 ◎	石・長(1~2) ◎	Ⅳ層 5
33	壺	直径 (11.0) 残高 8.6	焼成時の火ぶくれあり。	②回転ナデ (口縁)ナデ?	⑥回転ナデ (口縁)ナデ?	灰色 灰色	密 ◎	石・長(1~2) 自然釉	Ⅳ層 5
34	高杯	残高 2.1	無蓋高杯。 凸縁2条+波状又5条以上。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 黒灰色	密 ◎	石・長(1~2) ◎	Ⅳ層
35	壺	残高 2.8	小片。	(頂上)回転ナデ (頂下)波筋ヘラクソリ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎	石・長(1~2) ◎	Ⅳ層
36	壺	残高 4.1	把手部。断面扇円形。	ナデ	ナデ	茶色 茶色	石・長(1~2) ◎	石・長(1~2) ◎	Ⅳ層

表6 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	質 種		色調(外面)	胎土 焼成	備考	回版
				外 面	内 面				
37	壺	口径 (12.8) 残高 3.5	体部は内溝し、 口縁諸部は尖り気味。	ヨコナデ	ヨコナデ	棕褐色 棕褐色	密・金 ◎	黑斑	
38	高杯	残高 3.1	低脚。底部にφ1.0cmの円孔あり。	マメツ	④マメツ ⑤ナデ(マメツ)	明褐色 明褐色	密 ◎		5
39	环巻	口径 (11.6) 残高 2.4	たちあがりは低く内溝し、 諸部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
40	壺	口径 (11.4) 残高 1.3	口縁諸面に巴紋文3条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1)金 ◎		
41	壺	口径 (18.2) 残高 3.0	「く」の字状口縁。 口縁諸部は「コ」の字状に仕上げる。 →ヨコナデ	ハケ(7本/cm) ナデ	ヨコナデ ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~3) ◎		

表7 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	回版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
42	両平片刃石斧	不明	緑色片岩	9.3	4.1	1.0	66.0	未完成	5

第4章 樽味四反地遺跡16次調査

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

調査地が所在する石手川中流域左岸では、樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）をはじめ、樽味四反地遺跡や樽味高木遺跡など数多くの発掘調査が実施され、绳文時代から中世までの複合遺跡であることが近年の調査・研究の結果、明らかになりつつある。調査地を含む樽味地区は、平成18年度には国から重要遺跡確認地域としての指定を受け、今回の調査は、重要遺跡確認調査として実施する最初の発掘調査である。調査は、財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）と松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）が同埋蔵補助事業として委託契約を結び、埋文センターが主体となり文化財課の協力のもと、平成18年11月より開始した。

(2) 調査の経緯

調査は廃土置き場の都合上、調査地を北側と南側とに分けて実施した。平成18年11月1日より北半部の調査を開始する。重機（バックホー0.25m³）を使用し、表土層及び包含層を掘削し、土層ごとに遺物を取り上げる。11月15日、第Ⅶ層上面にて堅穴住居や柱穴等の遺構を検出する。11月16日、測量業者（セントラルエンジニアリング株式会社）に国家座標軸測量業務を委託し、調査地内に5m四方のグリッドを設定する。遺構検出時には切り合いが多数見られ、各遺構の平面プランや重複関係が判断できなかったため、調査地内に東西、及び南北方向のベルトを設定し断面観察により掘り方や埋土、平面プラン等を決定した。その後、堅穴住居を中心に調査を進めた。平成18年12月20日、北半部の調査を終了し、重機による埋め戻し作業をおこなう。

平成19年1月5日より、南半部の調査を開始する。北半部と同様、重機の使用により表土層を掘削し、1月9日からは包含層の掘削と遺物の取り上げをおこなう。1月18日、第Ⅳ層掘り下げ時に焼土が数箇所で検出され、さらに焼土内からまとまって土器が出土した。カマドの遺存する可能性があるため、焼土周辺は掘削せず部分的に残すこととした。1月22日、第Ⅷ層上面にて多数の堅穴住居や柱穴を検出した。1月29日、測量業者に再度、座標軸測量業務を委託する。その後、堅穴住居を中心に遺構の掘り下げや測量作業をおこなう。3月14日よりカマドの断ち割り作業をおこない、3月15日、完掘状況写真を撮影する。3月17日、一般市民対象の現地説明会をおこない、約80名の参加を得る。説明会終了後はカマドの測量作業をおこなう。なお、調査地は調査終了後も水田耕作をおこなうため、遺構は真砂土で保護した後、3月19日より重機の使用により包含層、表土の順に埋め戻し作業をおこなった。3月30日、すべての埋め戻し作業を終了し、発掘調査を終了する。

(3) 調査組織

所在地：松山市樽味4丁目222番1

調査期間：2006（平成18）年11月1日～2007（平成19）年3月30日

調査面積：523m²

調査担当：財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター調査員 宮内慎一

2. 層位 (第16~18図)

(1) 基本層位

調査地は、調査以前は水田として利用されていた。現況では標高39.4m前後を測る。調査地の基本層位は、以下の7層である。

- I層：近現代の農耕に伴う客土で、土色、土質の違いにより4層に分層される。
 - I①層－青灰色（10BG6/1）砂質シルトで、水田耕作土である。層厚10~40cm。
 - I②層－明赤褐色（2.5YR5/6）粘質シルトで、水田底土である。層厚5~18cm。
 - I③層－灰色（7.5Y6/1）砂質シルトで、旧水田耕作土である。層厚4~10cm。
 - I④層－にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質シルトで、旧水田土である。層厚2~8cm。
 - II層：灰黄褐色（10YR6/2）砂質シルトで、調査区中央部付近にみられる。層厚3~20cm。本層中からは、中世の土師器片や陶磁器片が重機掘削時に少量出土した。
 - III層：褐灰色（10YR4/1）砂質シルトで、調査区南西部にみられる。層厚5~30cm。調査区東壁及び南壁の土層観察により、III層上面から灰褐色（7.5YR6/2）砂質シルトを埋土とする遺構〔⑧〕が掘り込まれていることを確認した。本層中からは、古代の土師器片や須恵器片が重機掘削時に少量出土した。
 - IV層：暗褐色（7.5YR3/3）粘質シルトで、調査区北半部にみられる。層厚10~30cm。調査区西壁の土層観察により、IV層上面にて灰褐色（7.5YR6/2）砂質シルトや褐灰色（7.5YR6/1）砂質シルトを埋土とする遺構〔⑨、⑩〕が掘り込まれていることを確認した。本層中からは、主に古墳時代から古代の土師器や須恵器が重機掘削時に少量出土した。
 - V層：黒褐色（10YR2/3）粘質シルトで、調査区北東部を除く地域に見られる。層厚10~30cmを測る。調査区西壁の土層観察により、V層上面より掘立柱建物や褐色（7.5YR4/6）粘質シルトを埋土とする遺構〔⑪〕が掘り込まれていることを確認した。また、検出した堅穴住居は、いずれもV層上面またはV層中から掘り込まれた可能性が高いものばかりである。なお、調査区北半部にて楕円形状の凹み（SX1）を検出したが、SX1はV層で埋没している。本層中からは、弥生土器や古墳時代の土師器、須恵器が数多く出土した。
 - VI層：暗褐色（7.5YR3/4）を呈する粘性の極めて強いシルト層で、調査区南半部に部分的に見られる。層厚3~20cm。本層中からは、少量の弥生土器片や土師器片が出土した。
 - VII層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質シルトで、下部には礫が混入する。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。なお、本層上面の標高を測量すると北側から南側に向けて傾斜をなし、調査区北西隅が最も高く標高39.1m、南西隅が最も低く標高38.9mとなる。
- 検出状況や出土遺物から、V・VI層は古墳時代、III・IV層は古代、II層は中世までに堆積したものと考えられる。なお、調査にあたり調査区内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

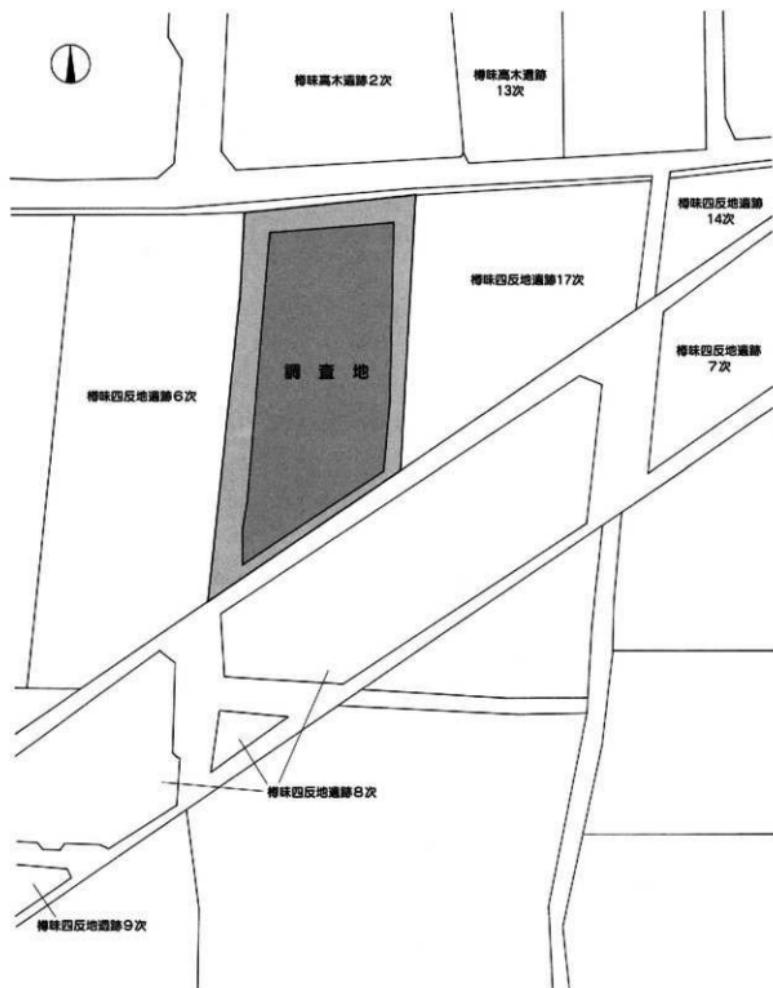
(2) 検出遺構・遺物

調査で検出した遺構は、堅穴住居12棟（弥生：1棟、古墳：11棟）、掘立柱建物6棟（古墳：4棟、古代：1棟、中世：1棟）、土坑1基（弥生）、性格不明遺構1基（古墳）、柱穴205基（掘立柱建物柱穴、及び住居床面検出の柱穴を除く）である。なお、今回の調査では、堅穴住居や土坑底面で検出し

層位

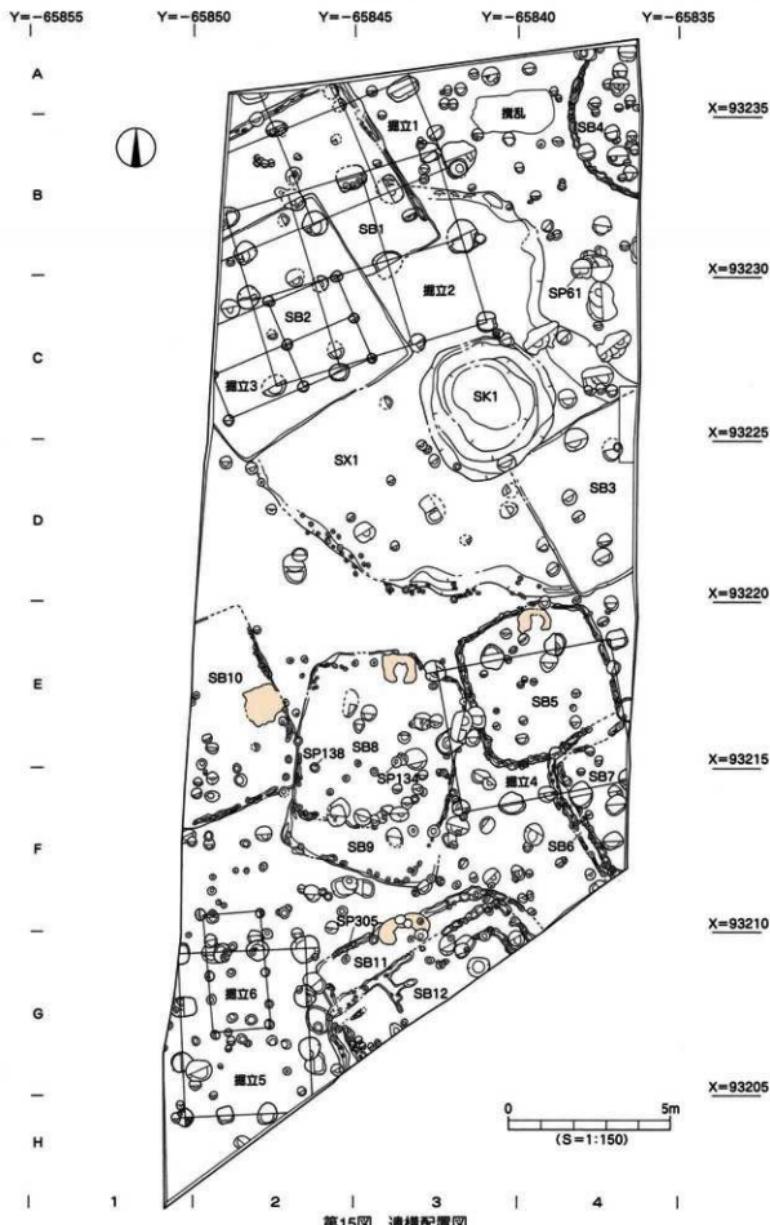
た溝や柱穴は、遺構ごとに通し番号を付けた（例：S B 1 内 S P ①、S B 6 内 S D ②）。

遺物は遺構や包含層、及び重機掘削時に出土したもので、縄文土器（晩期）、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳～中世）、須恵器（古墳～古代）、陶磁器（備前）、輸入陶磁器、石器、鉄器のほか白玉、ガラス玉、管玉などが出土した。



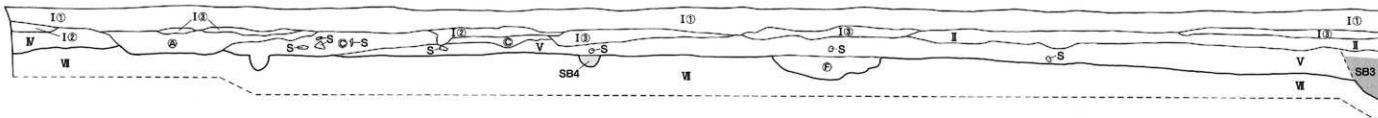
第14図 調査地位置図 (S = 1:500)

樽味四反地遺跡16次調査



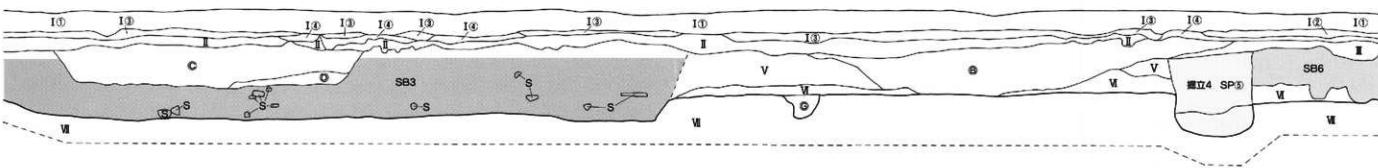
N S

H=39.60m



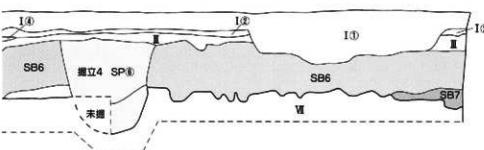
N S

H=39.60m



N S

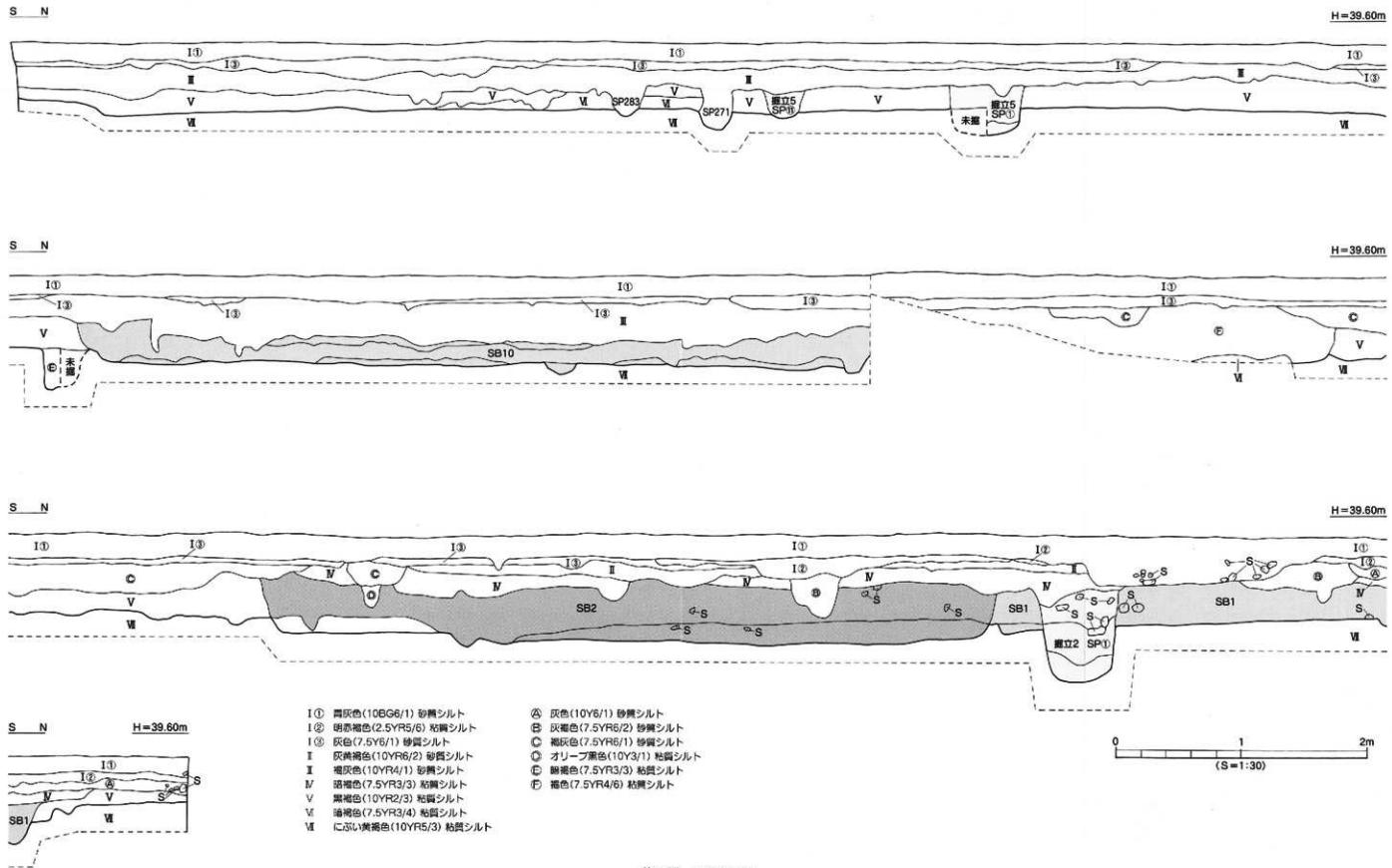
H=39.60m



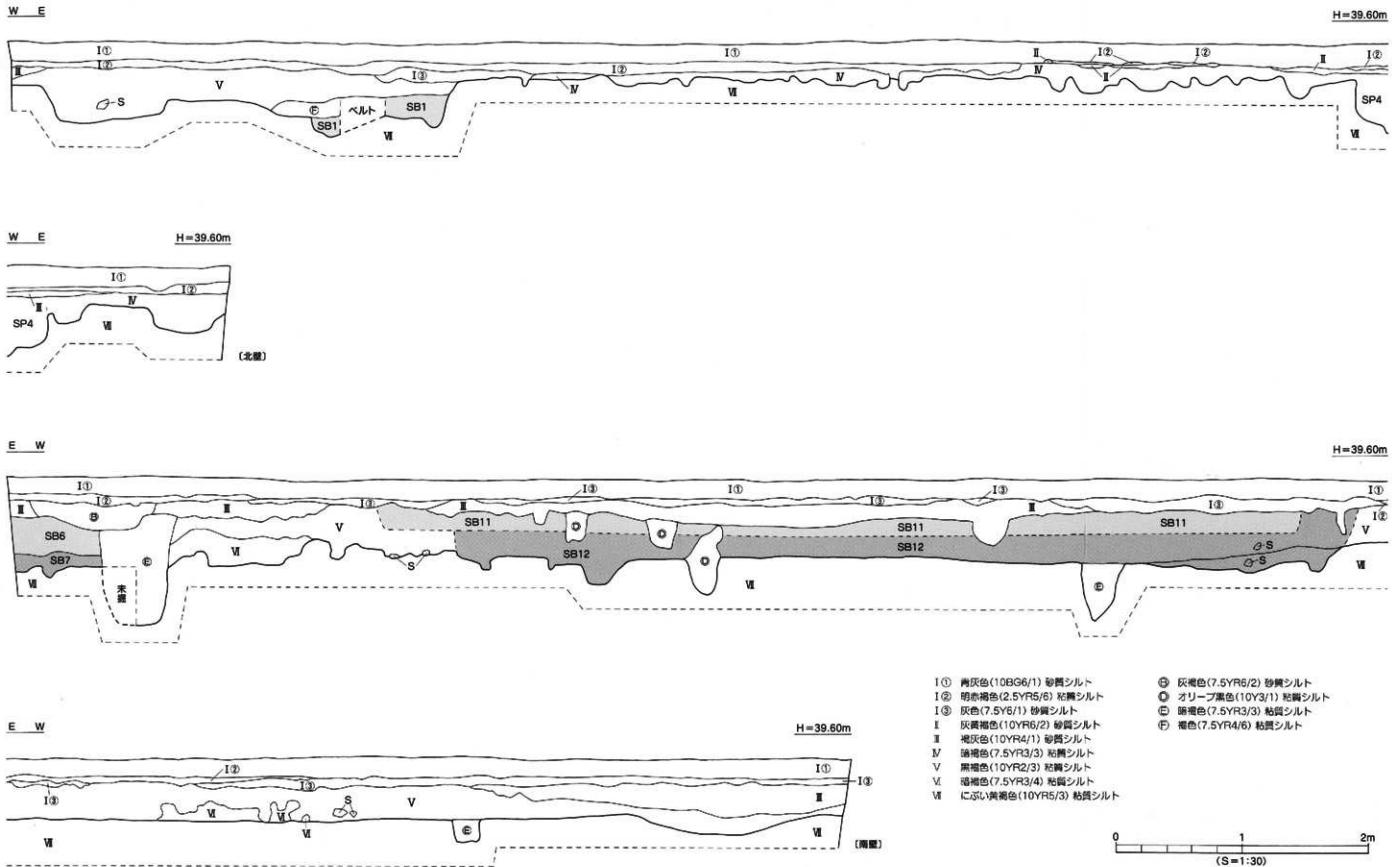
- | | |
|--------------------------|------------------------|
| I① 青灰色(10BG6/1) 砂質シルト | Ⓐ 灰色(10Y6/1) 砂質シルト |
| I② 明褐色(2.5YR5/6) 砂質シルト | Ⓑ 灰褐色(7.5YR6/2) 砂質シルト |
| I③ 灰色(7.5Y6/1) 砂質シルト | Ⓒ 紫灰褐色(7.5YR6/1) 砂質シルト |
| I④ にじみ黄褐色(10YR5/4) 砂質シルト | Ⓓ オリーブ黒色(10Y3/1) 砂質シルト |
| Ⅱ 灰褐色(10YR6/2) 砂質シルト | Ⓔ 略褐色(7.5YR3/3) 砂質シルト |
| Ⅲ 紫褐色(10YR4/1) 砂質シルト | Ⓕ 黑褐色(7.5YR3/1) 砂質シルト |
| Ⅳ 略褐色(7.5YR3/3) 砂質シルト | |
| Ⅴ 黒褐色(10YR2/3) 砂質シルト | |
| Ⅵ 深褐色(7.5YR3/4) 砂質シルト | |
| Ⅶ にじみ黄褐色(10YR5/3) 砂質シルト | |

0 1 2m
(S=1:30)

第16図 東盤土層図



第17図 西壁土層図



第18図 北壁・南壁土層図

3. 遺構と遺物

(1) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴住居1棟と土坑1基を検出した。

1) 竪穴住居

S B 4 (第15・19図、図版9)

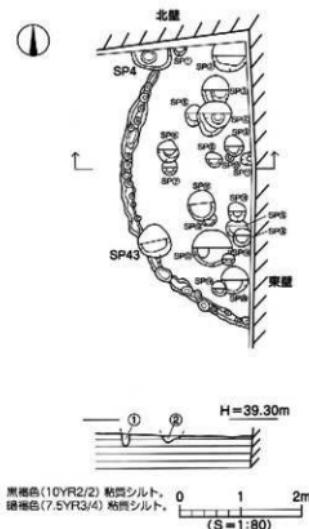
調査区北東隅A・B 4区に位置し、住居北壁はS P 4 (埋土：暗褐色粘質シルト)、南西壁はS P 43 (埋土：褐色粘質土)に切られ、住居北側及び東側は調査区外に続く。第VII層上面での検出であり、第IV層が覆う。なお、住居検出時には既に壁体は遺存しておらず、周壁溝のみの検出である。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.13m、南北検出長4.65mを測る。壁溝はほぼ全周し、規模は幅6~27cm、深さ2~10cmを測る。壁溝埋土は黒褐色粘質シルトである。壁溝内からは径3~10cm、深さ3~5cmを測る小ビットを多数検出したことから、小ビットは壁溝に打ち込まれた杭痕と考えられる。このほか、住居床面からは大小20基の柱穴を検出したが、主柱穴を特定することはできなかった。各柱穴の規模は径10~66cm、深さ10~30cmを測る。柱穴埋土は3種類あり、S P ①・②・⑧~⑪・⑯・⑰は褐灰色シルト、S P ③・⑤~⑦・⑬・⑭~⑯・⑰は暗褐色粘質シルト、S P ④は灰色シルトである。住居床面は第VII層であり、わずかに住居中央部に向けて緩傾斜をなす。遺物は周壁溝内より少量の弥生土器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、切り合いや住居埋土などからS B 4の廃棄・埋没時期は概ね弥生時代後期とする。

2) 土 坑

S K 1 (第15・20図、図版9・10)

調査区中央部や北東寄り、C 3~D 4区に位置する。土坑北側はS P 76 (埋土：灰色砂質シルト)に切られている。第VII層上面での検出であり、土坑上部はS X 1埋土が覆う。平面形態は両側がやや広がる円形を呈し、規模は南北長4.46m、東西長4.10m、深さは検出面下1.3mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、上坑下部は舟底状となる。埋土は7層に分層でき、①層黒褐色粘質シルト、②層オリーブ黒色粘質シルト、③層灰黄褐色砂質シルト、④層黒色粘質シルト、⑤層黒褐色粘質シルト、⑥層黒褐色粘質シルト、⑦層灰黄色粘質砂である。なお、②層及び⑤層中には径1~5cmの小砾が少量混じり、④層中には径3~15cmの比較的大型の円礫がレンズ状の堆積をなしていた。また、⑥層中には径1~3cmの小砾が大量に含まれていた。土坑壁体は中位付近までは第VII層であるが、土坑下位から底面は黄色の砂層



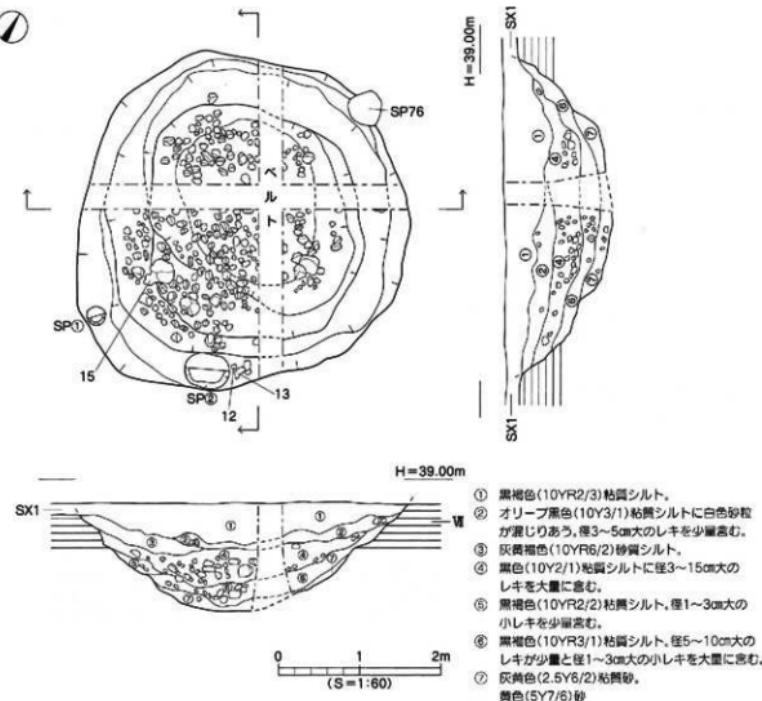
第19図 SB4 測量図

である。底面付近からは、発掘調査時に多少の湧水が認められた。土坑南側壁体にて2基のピット(S P①・②)を検出した。S P①は径20~22cm、深さ8cmを測る円形ピット、S P②は長径54cm、短径42cm、深さ18cmを測る梢円形ピットで、埋土はS P①、S P②共に黒褐色粘質シルトである。

遺物は土坑南側壁体付近の②層中より、弥生土器の壺(12・13)が出土したほか、④層中からは弥生土器片が際に混じて出土した。このほか、土坑検出時に土坑中央部南寄りの①層上面付近から土師器壺(15)が押しつぶされた状態で出土した。

出土遺物(第21図、図版18)

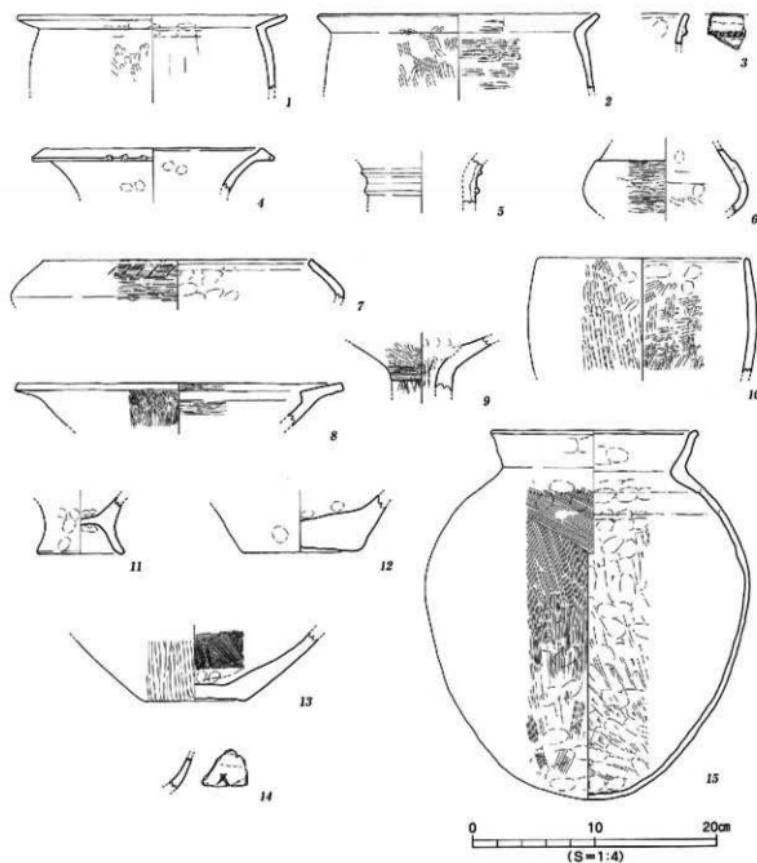
1~3は弥生土器の壺である。1・2の口縁部は「く」の字状を呈し、胴部外面にはヘラミガキ調整を施す。弥生中期後半。3は弥生前期の壺で、口縁部に刻目凸帯文を貼り付ける。4~6は弥生土器の壺である。4は広口壺で、口縁端面に刻目を施す。5は頸部片で、凸帯文2条を貼り付ける。弥生中期中葉。6は弥生前期の壺で、頸部に段をもつ。胴部外面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。7~9は高坏で、7は口縁部に貝殻施文による列点文を施す。弥生中期後半。8は口縁内面に段をもち、外面にヘラミガキ調整を施す。弥生中期中葉。9は坏柱部片で、柱部にヘラ描き沈線文5条と山



第20図 SK1 測量図

形文を施す。弥生中期後半。10はジョッキ形土器で、口縁端部は尖り気味に仕上げ、内外面共にヘラミガキ調整を施す。弥生中期中葉。11は壺、12・13は壺の底部である。11はくびれをもつ上げ底、12・13はやや上げ底となる。弥生中期中葉～後半。14は器種不明品であるが、外面に「×」状の線刻が残る。15は土師器の壺である。復元完成品で、口径17.0cm、器高30.1cmを測る。口縁部及び口縁端部は内傾する。胴部外面はハケメ調整、内面は板ナデを施す。

時期：出土遺物が混在しており時期特定は困難であるが、上限を弥生時代中期後半、下限を古墳時代中期とする。



第21図 SK1 出土遺物実測図

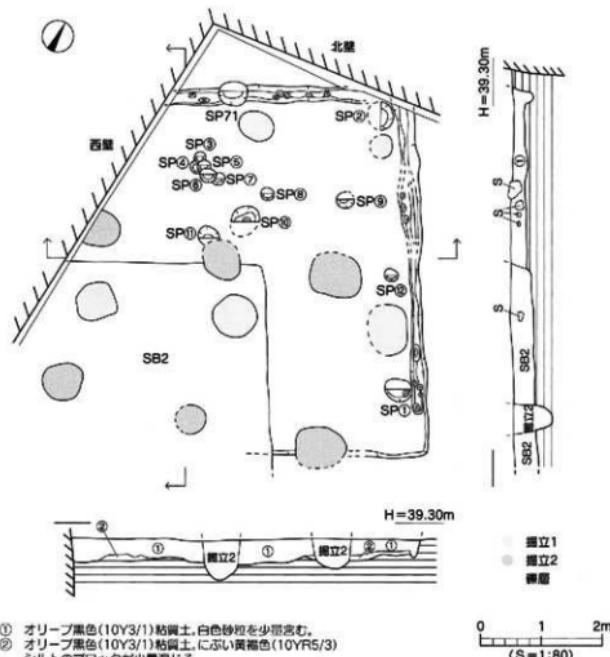
(2) 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、竪穴住居11棟、掘立柱建物4棟、性格不明遺構1基を検出した。

1) 竪穴住居

SB1 (第15・22・23図、図版10・11)

調査区北西部A2～B3区に位置する。第Ⅲ層上面で検出した住居で、住居南西部はSB2、住居北壁はSP71(埋土:灰色土)に切られ、西側は調査区外に続く。また、ベルトの土層観察により、SB1上面から掘立2柱穴が掘り込まれていることを確認した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は南北長5.88m、東西検出長5.64m、壁高は検出面下約30cmを測る。住居埋土は2層に分層でき、①層オリーブ黒色粘質土(白色砂粒混入)、②層オリーブ黒色粘質土(にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入)である。検出状況から、②層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。住居壁体に沿って周壁溝を検出した。壁溝の規模は幅10～15cm、深さ2～15cmを測る。壁溝埋土は、住居埋土①層と同様のオリーブ黒色粘質土である。なお、壁溝底面にて径8～12cm、深さ3～5cm程度の小ピットを多数検出した。このほか、住居床面にて大小12基の柱穴を検出した。各柱穴の規模は、径15～48cm、深さ5～15cmを測る。柱穴埋土は2種類あり、SP①～⑤・⑦・⑧は褐色粘質シルト、



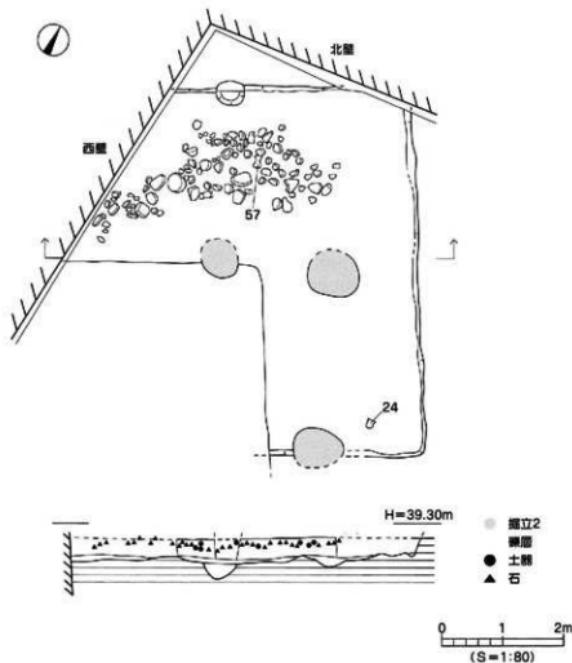
第22図 SB1 測量図

その他はオリーブ黒色粘質土である。なお、主柱穴は特定できなかった。住居底面にはやや起伏があり、住居中央部が楕円形状に凹む。

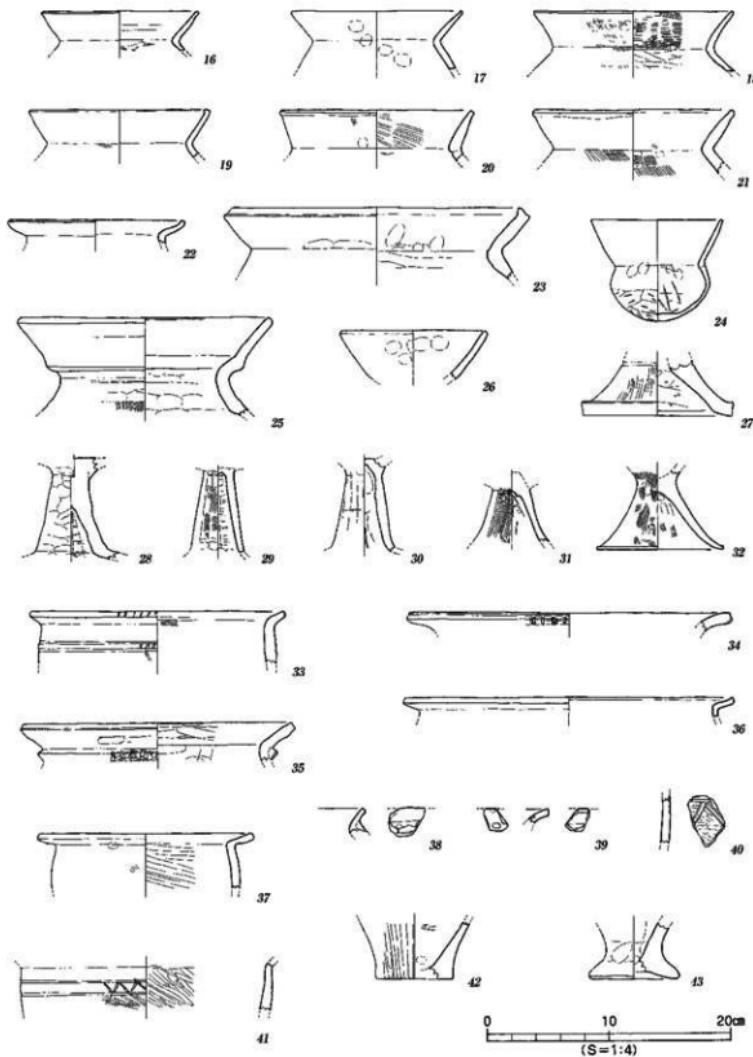
遺物は住居南東部、②層上面付近にて完形の小型丸底壺（24）が出土したほか、①層下部からは土師器片や白玉、鉄器が散在して出土した。一方、①層上位からは径5~20cmの大河原石が住居北半部（2m×4mの範囲）に密集して出土したほか、河原石に混じって縄文土器片や弥生土器（前期～後期）が出土した。なお、河原石が出土した周辺では明確な掘り方は検出されなかったことから、これらの石や土器は住居廃絶の際に投入されたものと推測される。

出土遺物（第24・25図、図版18・19）

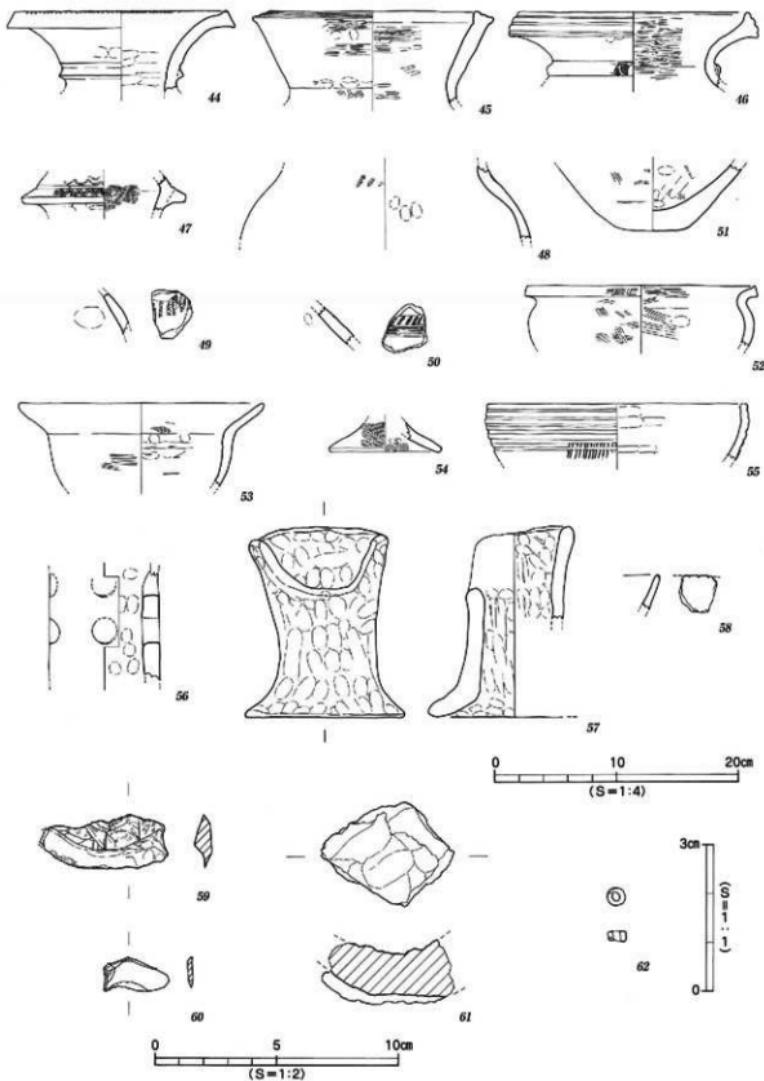
16~23は土師器の甕である。16~21は「く」の字状口縁で、16・17は口縁端部が先細りする。22・23は口縁端部が上方につまみ出され、23の口縁端面はナデ凹む。24は完形の小型丸底壺で、口径10.7cm、器高8.3cmを測り、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。25は二重口縁壺で、口縁部は大きく外反する。26は直口鉢、27は脚付鉢である。28~32は高杯の脚部である。28~30は細脚で、28・30の柱部内面にはシボリ痕が残る。33~43は弥生土器の甕である。33・34・38・39は折曲口縁で、33・34は口縁端部に刻目、胴部にはヘラ描き沈線文を施す。39の口縁部内面には刺圧痕が残る。弥生前期。



第23図 SB1 遺物出土状況図



第24図 SB1 出土遺物実測図(1)



第25図 SB1 出土遺物実測図(2)

35～37は「く」の字状口縁で、35はII縁下に押圧凸帯文を貼り付ける。36は口縁端部を上方につまみ上げる。弥生中期後半。40・41は胴部外面に山形文を施す。弥生前期。42は平底、43は上げ底の底部である。弥生中期後半。44～51は弥生土器の壺である。44～46は広口壺で、44はII縁上端面に刻目、頸部に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。弥生中期中葉。47は複合口縁壺で、波状文を施す。弥生後期。48～50は肩部片で、48・49は貝殻施文による列点文、50は列点文と沈線文を施す。51は底部で平底となる。弥生中期後半。52～54は弥生土器の鉢である。52は外反口縁、53は「く」の字状口縁、54は脚付鉢の脚部である。弥生後期。55は高杯の坏部で、門線文6条と刻目を施す。弥生中期中葉。56は器台の柱部で、径2.0cm大の円孔を穿つ。弥生後期後半。57は支脚で、受部は「U」字状にカットされ、柱部は中空となる。弥生後期後半。58は繩文晚期の深鉢で、口縁端部に刻目を施す。59・60はサスカイト製のスクレーパー、61は金属製の滓である。62は灰色を呈する滑石製の白玉で、重量0.03gを測る。

時期：出土した土師器の特徴より、S B 1 の廃棄・埋没時期は古墳時代前期後半、4世紀後半とする。

S B 2 (第15・21図、図版10)

調査区北西部B 2～D 2区に位置する。第Ⅸ層上面で検出した。住居北側はS B 1を切り、住居西側は調査区外に続く。また、住居北側壁体は掘立2柱穴に切られている。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西長6.34m、南北長5.98m、壁高は約40cmを測る。住居埋土は3層に分層でき、①層黒褐色粘質土、②層黒褐色粘質シルト、③層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入）である。なお、検出状況から③層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。

主柱穴はS P ①～③の3本を検出したが、その配置から本来は4本と考えられるが、その位置には掘立2柱穴が存在している。主柱穴の規模は径48～55cm、深さ10～30cmを測り、埋土は暗褐色粘質土を基調とし、S P ②は、にぶい黄褐色粘質シルトが少量混入する。このほか、住居床面にて10基の柱穴を検出した。このうち、住居南半部で検出した8基の柱穴は總柱構造の建物（掘立3）となった。建物を構成する柱穴の埋土はS B 2埋土と類似しており、調査時には両者の前後関係が判断できなかったが、掘立3柱穴出土品には平安時代頃の土師器片が少量含まれていた。このほか、2基の柱穴（S P ④・⑤）は黒褐色粘質土を埋土とする柱穴であり、柱穴内からは弥生土器片や土師器片が数点出土した。住居底面は第Ⅸ層であり、北側から南側へ向けて緩やかな傾斜をなす。

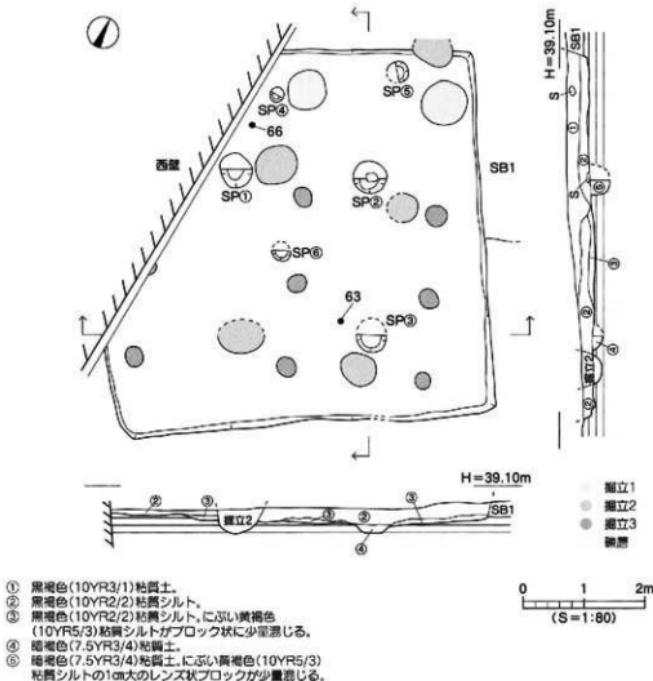
遺物は住居北西部の③層上面にて、完形の小型丸底壺（66）や住居内に設定したベルトの②層中より土師器壺（63）が出土した。また、②層中からは土師器高杯や瓶片が点在して出土した。①層中からは、住居北側を中心にして繩文土器や弥生土器（前期～後期）が数点出土した。

出土遺物（第27図、図版19）

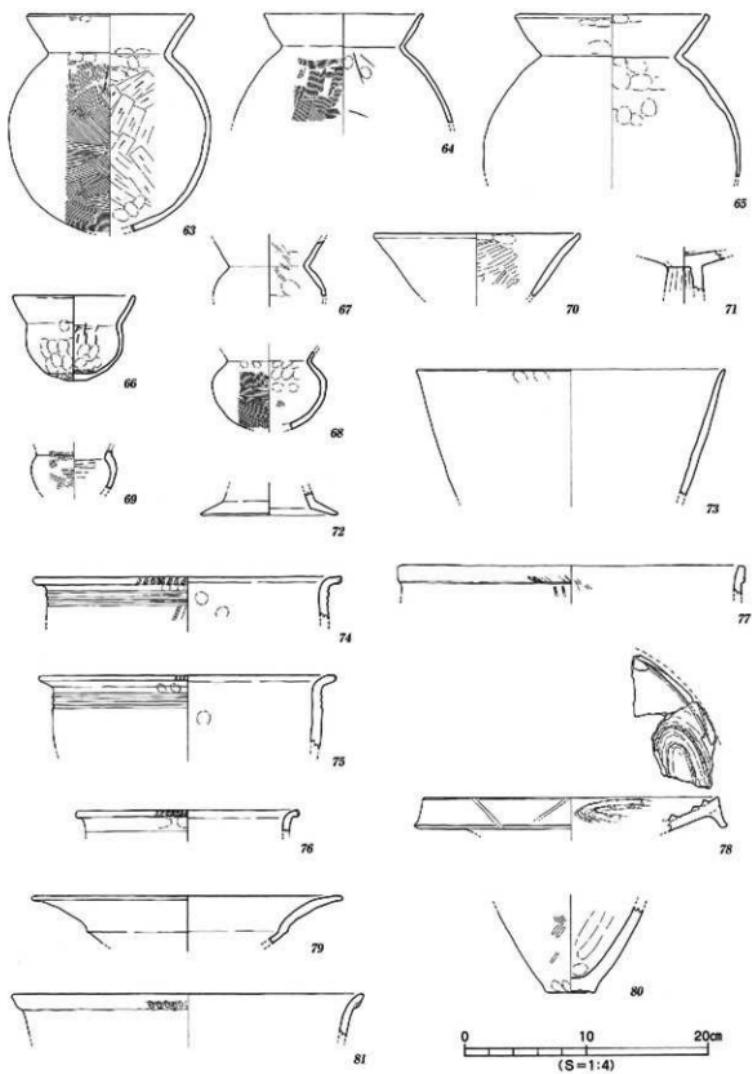
63～65は土師器の壺である。63はII縁部が直立気味に立ち上がり、胴部は球形を呈する。胴部外面はハケメ調整、内面にはヘラケズリ調整を施す。64・65は口縁部がやや内湾する。66は完形の小型丸底壺で、II径9.8cm、器高6.9cmを測る。底部下半部外面には手持ちヘラケズリを施す。67～69は小形丸底壺の頸部片である。70～72は土師器の高杯、73は瓶である。72は柱掘部前面にわずかな稜をもつ。74～77は弥生土器の壺である。74～76は折曲口縁で、口縁端部に刻目、74・75は胴部にヘラ描き沈線文を施す。77は口縁部が断面方形となる。弥生前期。78は弥生土器の広II壺で、II縁部は下方に垂下し、II縁端面に山形文、口縁内面に凸帯を貼り付ける。弥生中期前半～中葉。79は弥生土器

の高坏で、口縁部は大きく外反する。弥生後期後半。80は弥生土器の壺底部で、わずかに上げ底となる。弥生後期前半。81は縄文晚期の深鉢片で、口縁下端部に刻目を施す。

時期：出土した上部器の特徴とSB1との切り合いから、SB2の廢棄・埋没時期は古墳時代中期初頭から前半、5世紀前半とする。



第26図 SB2 測量図



第27図 SB2 出土遺物実測図

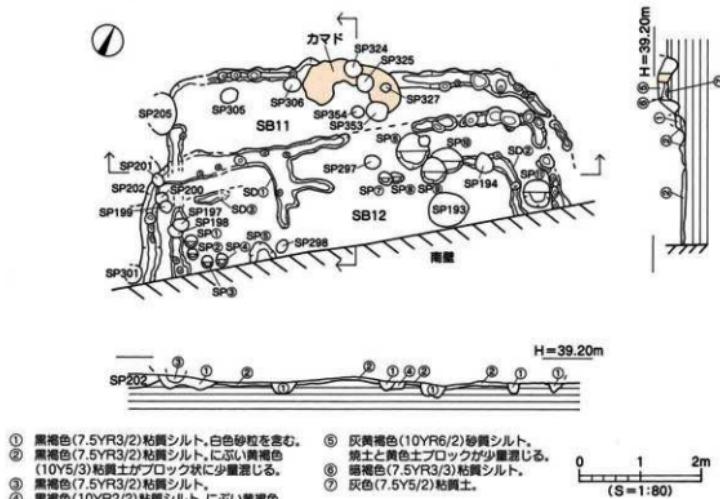
SB11 (第15・28・29図、図版12)

調査区南側F 2～G 4区に位置する。住居南側はSB12と重複し、調査区外に続く。また、住居北西隅はSP205(埋土：暗褐色粘質シルト)に切られている。第V層上面での検出であるが、調査区南壁の土層観察により第V層中もしくは第V層上面から掘り込まれた遺構である。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長6.8m、南北検出長3.4m、壁高は10cmを測る。住居検出時には住居埋土の大半は遺存していなかったが、調査区南壁の土層観察により住居埋土は黒褐色粘質シルトである。なお、土層観察によりSB11がSB12より後出することを確認した。

内部施設は周壁溝とカマドを検出した。壁溝は住居北西部と南東部を除く箇所にみられ、幅15～40cm、深さ12～16cmを測る。壁溝内には径10～20cm、深さ3～12cmを測る小ピットが点在する。壁溝及びピット埋土は住居埋土と同様の黒褐色粘質シルトである。

カマドは住居北壁中央部やや西寄りに付設されている。カマド上部は灰色土を埋土とする4基の柱穴(SP324・325・327・353)に削平され、炊口付近も一部削平を受けている。カマドは南側に聞く馬蹄形状を呈し、規模は東西検出長1.62m、南北検出長0.85m、高さ約30cmを測る。カマド下部はカマド本体の形状に沿って、深さ10～15cm程度掘りくぼめた後に4層(暗灰黄褐色土)を貼って基盤としている。燃焼部中央付近に土師器の壺(84)が正置で押しつぶされた状態で出土した。接合した結果、底部は欠損していた。このほか、住居底面にて2基の柱穴(SP305・354)を検出したが、埋土は灰色土である。

遺物は埋土中より、土師器の壺や高杯の破片が少量出土した。



第28図 SB11・12 測量図

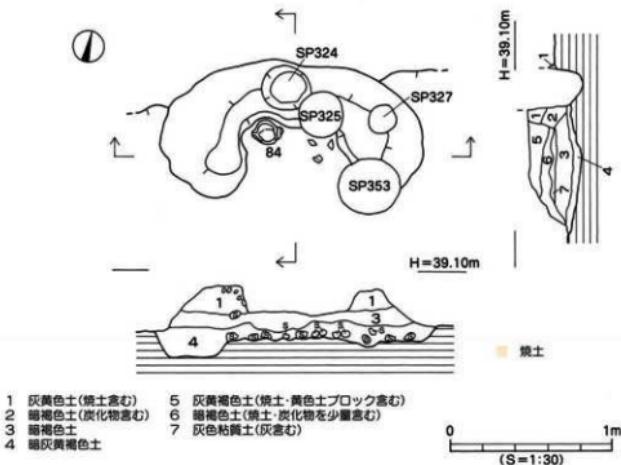
出土遺物（第30図、図版20）

82～84は土師器の壺である。82は口縁部中位が膨らみをもち、口縁端部は内方に肥厚する。83は口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する丸みのある面をもつ。84は口縁部が外反し、口縁端部は丸く仕上げる。胴部内面にはヨコ方向の板状工具によるナデ調整を施す。85～87は土師器の高坏である。85・86は坏部片で、86は坏部下位に稜をもつ。88は土師器の椀で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。

時期：出土遺物の特徴より、SB11の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半、5世紀後半とする。

SB12（第15・28図、図版12）

調査区南側F3～G4区に位置する。住居西壁は4基の柱穴〔S P199～201・301（埋土：灰色土）〕に切られ、南側は調査区外に続く。第VII層上面での検出である。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西長7.0m、南北検出長2.0m、壁高は検出面下15cmを測る。住居埋土は2層に分層でき、①層黒褐色粘質シルト、②層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土がブロック状に少量混入）である。なお、検出状況から、②層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。住居壁体に沿って周壁溝を検出した。壁溝は住居北壁中央部が途切れしており、幅20～40cm、深さ13～20cmを測る。壁溝埋土は住居埋土①層と同様の黒褐色粘質シルトである。このほか、埋土②層上面にて壁溝と重複する状態で溝SD①を検出した。SD①は南北方向とそれに直交する東西方向の溝で、幅16～36cm、深さ14～20cmを測る。溝埋土は壁溝埋土と同様の黒褐色粘質シルトである。両者の前後関係は判断できなかつたが、埋土が酷似することから住居に伴う施設の可能性が高く、住居内を区画する仕切り溝と考えられる。また、壁溝より40～50cmほど内側にて溝SD②・③を検出した。幅16～20cm、深さ8～18cm



第29図 SB11 カマド測量図

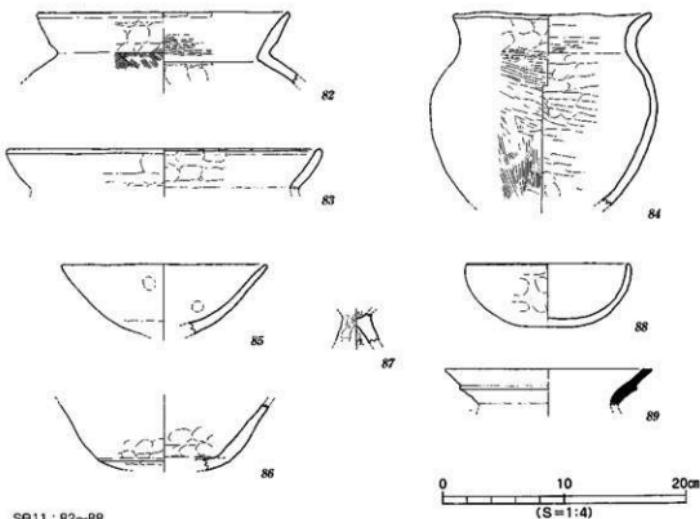
を測り、埋土は黒褐色粘質シルトである。溝内からは径6~12cm、深さ3~6cm程度の小ピットを検出したことから、S D②・③は周壁溝の可能性がある。このことから、S B12は改築が施された住居の可能性が考えられる。このほか、住居埋土②層上面にて大小11基の柱穴を検出した。各柱穴の規模は径15~44cm、深さ8~22cmを測る。埋土は2種類あり、S P①~③・⑦・⑨・⑪は黒褐色粘質シルト、S P④~⑥・⑧・⑩は黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土がブロック状に混入）である。柱穴内からは少量の土師器片や須恵器片が出土した。住居底面はやや凹凸があり、住居中央部付近がやや高くなっている。

遺物は①層中より、土師器片や須恵器片が散在して出土した。図化しうるものを1点掲載した。

出土遺物（第30図、図版20）

89は須恵器の壺で、口縁部中位に凸線1条を施し、口縁端部は凹む。

時期：時期特定しうる遺物は少ないが、S B11に先行することから、S B12の廃棄・埋没時期は概ね、古墳時代中期後半以前、5世紀中葉から後半とする。



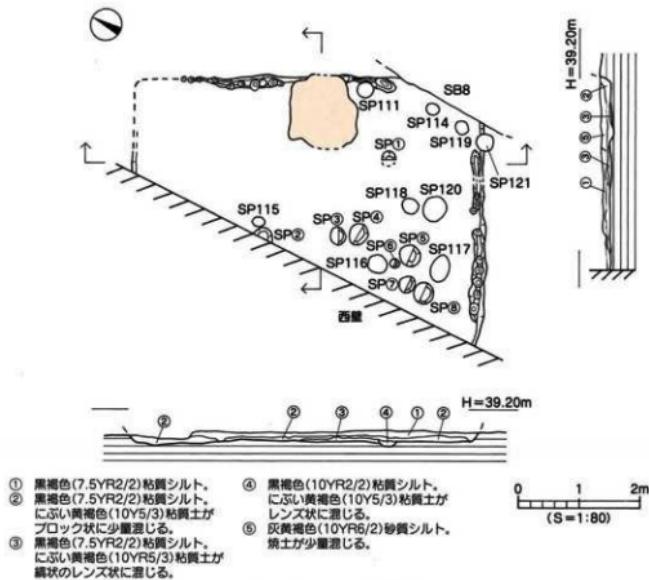
SB11: 82~88
SB12: 89

第30図 SB11・12 出土遺物実測図

SB10 (第15・31・32図、図版13)

調査区中央部やや南西寄りE 1～F 2区に位置する。住居北東隅はSB8に切られ、南側は調査区外に続く。住居検出時には、住居上面にて9基の柱穴 (SP111・114～121) を検出した。柱穴埋土はすべて灰色土である。第Ⅵ層上面での検出であるが、調査区西壁の土層観察により第V層中もしくは第V層上面から掘り込まれた遺構である。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は南北長5.72m、東西検出長4.36m、壁高は15～20cmを測る。住居埋土は3層に分層でき、①層黒褐色粘質シルト、②層黒褐色粘質シルト (にぶい黄褐色粘質土がブロック状に少量混入)、③層黒褐色粘質シルト (にぶい黄褐色粘質土が縞状のレンズ状に混入) である。なお、検出状況から③層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。内部施設は、周壁溝とカマドを検出した。壁溝は住居北壁及び東壁にて部分的に検出され、径10～16cm、深さ8～18cmを測る。また壁溝内にて径8～16cm、深さ3～8cmを測る小ビットを検出した。小ビットは壁溝に伴う杭痕と考えられる。壁溝及びビット埋土は、黒褐色粘質シルトである。

カマドは住居北壁中央部に付設されている。第IV層掘り下げ時に住居上面にて焼土の広がりを検出したことから、カマドの存在を確認した。なお、焼土や炭を含む灰褐色土が1.1m×1.2mの範囲に検出されたがカマドの形状を確認するには至らなかった。カマド下部は円形状に3～6cm程度掘りくぼめられ、3層（黒褐色土と黄色土の混合土）を貼って基盤としている。カマド燃焼部と思われる位置に、



第31図 SB10 測量図

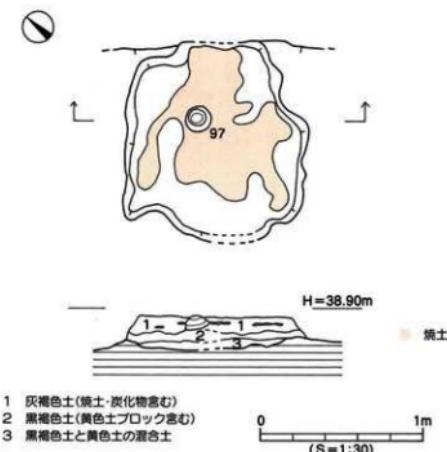
土師器高坏（97）の坏部が伏せた状態で出土した。脚部は破損している。坏部内側には黒褐色土が充填されており、高坏はカマドの廃施まで存在したことが伺われる。よって、高坏は何らかの祭祀に伴う遺物と考えられる。なお、高坏の外面には二次的な焼成を受けた痕跡や煤などは認められなかった。

このほか、住居埋土③層上面及び住居底面にて大小8基の柱穴を検出した。③層上面では2基の柱穴〔S P ①・⑤：黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土がレンズ状に混入）〕、住居底面では6基の柱穴〔S P ②～④・⑥～⑧：黒褐色粘質シルト〕を検出した。柱穴規模は径15～30cm、深さ6～10cmを測る。柱穴からは少量の土師器片が出土した。

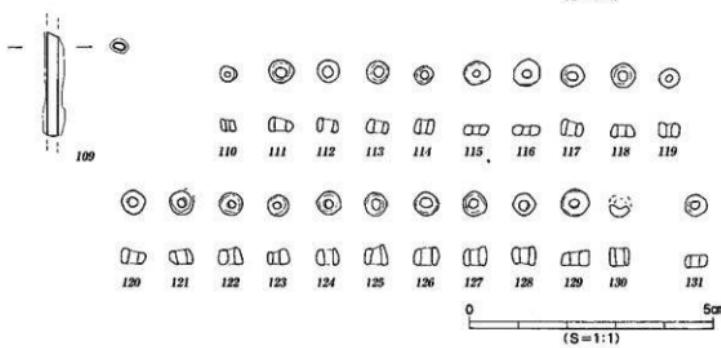
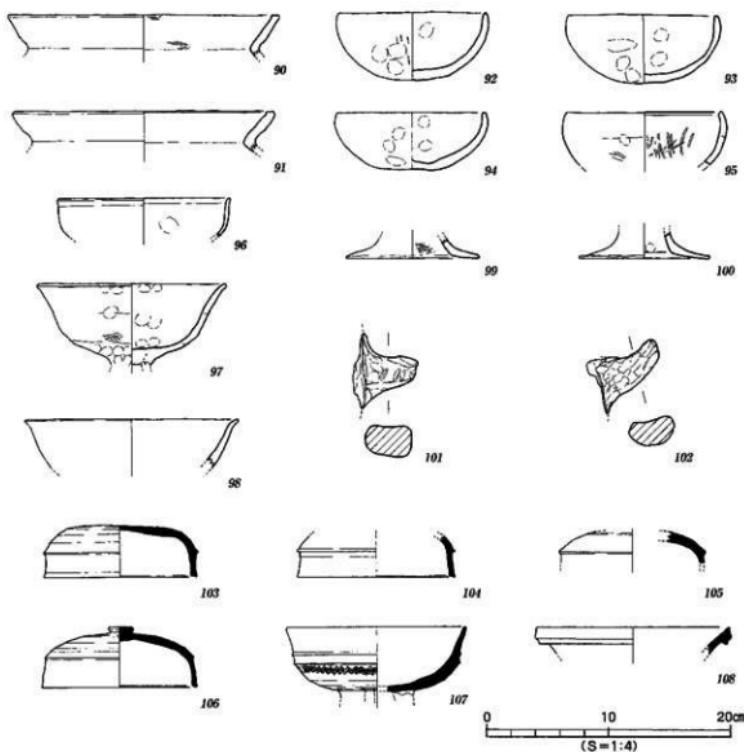
遺物は①層及び②層中より、完形の土師器椀（92）や須恵器のほか、鉄器（109）が出土した。また、整理作業時には、発掘調査で採取した住居埋土の水洗いやふるい作業をおこない白玉21点とガラス小玉1点が出土した。

出土遺物（第33図、図版20）

90・91は土師器の甕である。口縁端部は内傾し、内側にやや肥厚する。92～96は土師器の椀である。92は口径12.0cm、器高5.5cmを測る完形品である。92～95は口縁部が内湾し、92～94は口縁端部が尖り気味、95は内傾する面をもつ。97～100は土師器の高坏である。97はカマド出土品で坏部は深く、坏部下位に稜をもつ。99・100は脚部で、柱裾部境内面に稜をもつ。101・102は土師器甌の把手部で、断面楕円形を呈する。103～105は須恵器坏蓋である。103は天井部が扁平で、口縁端部は水平な凹面をなす。106は須恵器有蓋高坏の蓋、107は無蓋高坏である。107は口縁部が直立し、体部中位に凸線2条と波状文を施す。108は須恵器の広口壺で、口縁端部は断面三角形状となる。109は器種不明の鉄器である。



第32図 SB10 カマド測量図



第33図 SB10 出土遺物実測図

る。110～130は滑石製の白玉である。直径0.36～0.57cm、厚さ0.18～0.41cm、重さ0.03～0.15gを測る。色調で分類すると、灰色4点、緑灰色9点、黒灰色8点となる。131はガラス小玉である。直径0.50cm、厚さ0.25cm、重さ0.09gを測る。色調は青色を呈する。

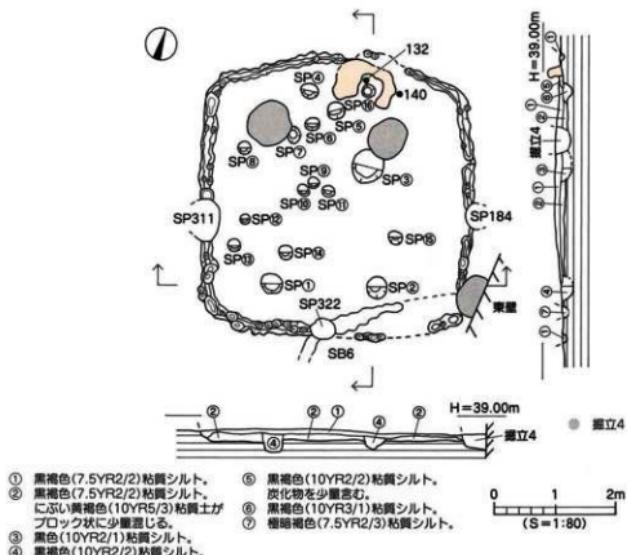
時期：出土遺物の特徴より、SB10の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半、5世紀後半とする。

SB5 (第15・34・35図、図版14・15)

調査区中央部南東寄りE3・4区に位置する。第Ⅶ層上面にて検出した。住居南東隅はSB6と掘立4柱穴に切られ、住居壁体は暗褐色粘質シルトを埋土とする3基の柱穴(SP184・311・322)に切られている。住居の平面形態は方形を呈し、規模は東西長4.47m、南北長4.74m、壁高は10～20cmを測る。住居埋土は2層に分層でき、①層黒褐色粘質シルト、②層黒褐色粘質シルト(にぶい黄褐色粘質土がブロック状に少量混入)である。なお、検出状況から②層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。

内部施設は、周壁溝とカマドを検出した。壁溝は住居壁体に沿ってほぼ全周し、幅6～30cm、深さ2～15cmを測る。壁溝埋土は黒褐色粘質シルトである。壁溝底面には径5～15cm、深さ2～5cmを測る小ピットを多数検出した。

カマドは住居北壁中央部、周壁溝に接して付設されている。第Ⅳ層掘り下げ時に住居上面にて焼土が検出されたことから、カマドの存在を確認した。形状は南側に開く馬蹄形状を呈するが、調査ではカマド上部は削平されており、下部のみの検出である。規模は東西長0.96m、南北長0.74m、高さ20cmを測る。カマドは壁溝に接する半円形の範囲(東西2.0m、南北1.7m)を深さ10～30cm程度掘り下げた



第34図 SB5 測量図

後、硬くしまった灰黄褐色土（5層）を貼り基盤としている。これは、住居構築以前にカマドの位置があらかじめ決められていたことを示している。また、カマド炊口のあたりには径45cm、深さ30cmのピット1基（S P⑯）を検出した。

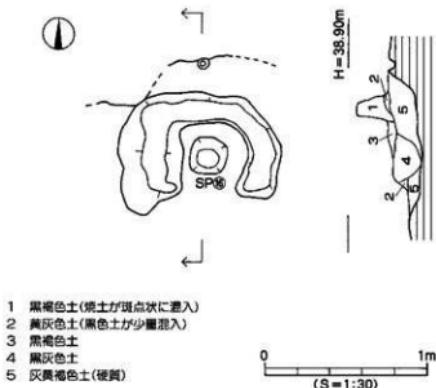
このほか、埋土②層上面にて10基の柱穴（S P①・②・⑤・⑦・⑨～⑪：黒褐色粘質シルト、S P③・⑥・⑭：黒色粘質シルト）、住居底面からは5基の柱穴（S P④・⑧・⑫・⑬・⑮：黒色粘質シルト）を検出した。各柱穴は径10～50cm、深さ10～30cmを測り、柱穴内からは土師器片や須恵器片が数点出土した。

遺物はカマド燃焼部内にて、土師器壺（132）が正置で押しつぶされた状態で出土したが、復元すると完形品となった。そのほか、カマド東側袖部付近からは須恵器壊身（140）が出土したほか、②層中からは土師器片や須恵器片が散在して出土した。

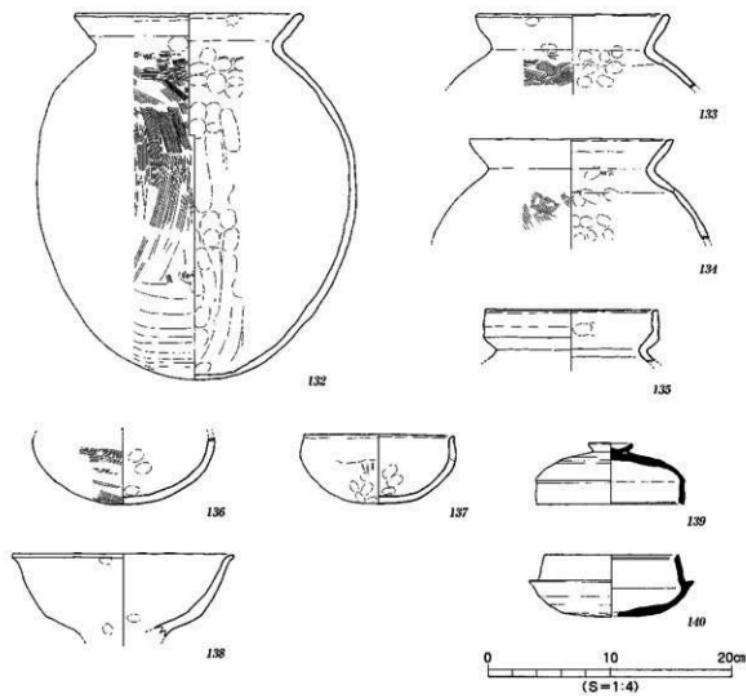
出土遺物（第36図、図版21）

132～134は土師器の壺である。132はカマド出土品で、復元完形品である。口径18.4cm、器高28.0cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がり、肩部外面はハケメ調整、内面はナデ調整を施す。133は口縁中位に膨らみをもち、口縁端部は内傾する。134は口縁端部が内傾する丸みのある面をもち、内側にやや肥厚する。135～136は土師器の壺である。135は二重口縁壺で、口縁端部は内傾する凹面をなす。137は土師器の楕である。口縁部は直立し、口縁端部は内傾する。138は土師器の高壺で、壺部下位はわずかに稜をなし、口縁部は外反する。139は須恵器有蓋高壺の蓋で、つまみ中央部が凹む。140は須恵器壊身で、推定口径10.8cmを測る。

時期：出土遺物の特徴より、SB5の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半、5世紀後半とする。



第35図 SB5 カマド測量図



第36図 SB5 出土遺物実測図

SB3 (第15・37図)

調査区中央部東寄りC 3～D 4区に位置し、住居東側は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であるが、ベルトの土層観察によりSX 1上面から掘り込まれていることを確認した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.56m、南北長4.74m、壁高は約20cmを測る。住居埋土は2層に分層でき、①層黒褐色粘質シルト、②層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土がブロック状に少量混入）である。なお、検出状況から②層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。住居床面からは大小6基の柱穴を検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。各柱穴は径36～80cm、深さ8～25cmを測る。柱穴埋土は3種類あり、SP①・③・⑤は黒色粘質シルト、SP②・⑥は暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色土がブロック状に混入）、SP④は褐色粘質シルトである。なお、SP⑤からは柱痕を検出した。住居底面は第Ⅸ層であり、やや凹凸が認められる。遺物は①層中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が混在して出土した。

出土遺物（第37図）

141は須恵器壺蓋で、推定口径11.2cmを測る。丸みのある天井部をもち、口縁部は内傾する。142・143は土師器壺である。142は口縁部がわずかに外反する。144～147は弥生土器の壺である。144・145は口唇部に凸帯を貼り付け、144は凸帯上に押圧、145は刻目を施す。146・147は口唇部より下がった位置に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。弥生前期前半。148～150は弥生土器の壺である。148は肩部に貝殻施文による列点文を施す。弥生中期後半。149は肩部片で、ヘラ描き沈線文と弧文及び斜線文を施す。弥生前期。150は底部片で、外面にヘラ描き沈線文2条を施す。弥生前期。

時期：出土した土師器や須恵器の特徴より、S B 3 の廐棄・埋没時期は占墳時代中期後半、5世紀後半とする。

S B 8（第15・38・39図、図版16）

調査区中央部南寄りE 2～F 3区に位置する。第Ⅶ層上面にて検出した。住居南側はS B 9と重複し、西側はS B 10を切り、北東部は掘立4柱穴及びS P 291（埋土：暗褐色粘質シルト）に切られている。なお、住居検出時にはS B 8中央部は既に床面が露出する状況であった。また、調査当初にはS B 9をS B 8と同一住居と判断し、掘り下げや遺物の取り上げをおこなったため、両者の遺物は混在している可能性が高い。ここでは、一括してS B 8出土遺物として実測図を掲載している。

住居の平面形態は南北にやや長い方形を呈し、規模は東西長4.88m、南北長5.40m、壁高は10～12cmを測る。住居埋土は、極暗褐色粘質シルトである。内部施設は主柱穴と周壁溝、及びカマドを検出した。主柱穴はS P ①・③・⑩・⑫の4本と考えられ、規模は径14～80cm、深さ20～25cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色粘質シルトである。周壁溝は、住居南東部と南西部で部分的に検出した。幅6～20cm、深さ2～10cmを測り、埋土は住居埋土と同様の極暗褐色粘質シルトである。また、住居北東部や北西部では径3～10cm、深さ3～6cmを測る小ピット列を検出した。

カマドは、住居北壁中央部に付設されている。第Ⅳ層掘り下げ時に住居上面付近から焼土を検出したことから、カマドの存在を確認した。平面形態は南側に開く馬蹄形状を呈し、規模は東西長1.0m、南北長0.86m、高さ15cmを測る。カマドは住居北壁に接する半円形の範囲（1.0m×1.2m）について、深さ4～10cm程度に床面を掘りくぼめた後、黄灰色土を貼り基盤としている。

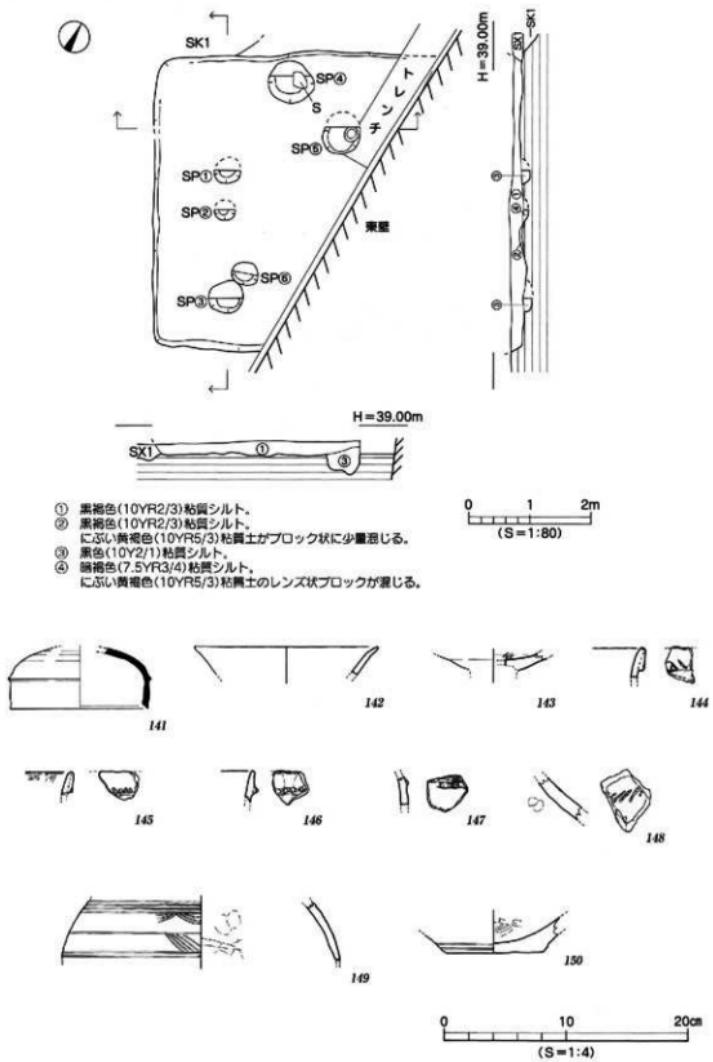
このほか、住居底面にて大小21基の柱穴を検出した。柱穴規模は径10～60cm、深さ8～50cmを測る。柱穴埋土は4種類あり、極暗褐色粘質シルト：S P ②・⑤・⑥・⑪～⑬・⑯・⑰・㉑・㉓、黒褐色粘質シルト：S P ⑦・⑨・⑪・㉑、黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質土が混入）：S P ④・⑧・⑭、黒色粘質シルト：S P ⑨・⑩・⑯・㉑・㉓・㉔である。各柱穴からは、弥生土器片や土師器片、須恵器片が数点出土した。

住居底面は第Ⅸ層であり、やや凹凸が認められる。遺物はカマド内の埋土中より土師器片（154・155）や須恵器壺身（160）が出土したほか、住居埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が出土したほか、完形の土錐や石庖丁片が出土した。なお、出土した土師器、須恵器の特徴より、本来はカマド出土品や須恵器壺（164）などがS B 8、須恵器壺蓋（158・159）や甌（165）などがS B 9に帰属する遺物と考えられる。

出土遺物（第40図、図版21）

151・152は土師器の壺である。151は口縁端部が内傾し、口縁端部内面は内側に肥厚する。152はII

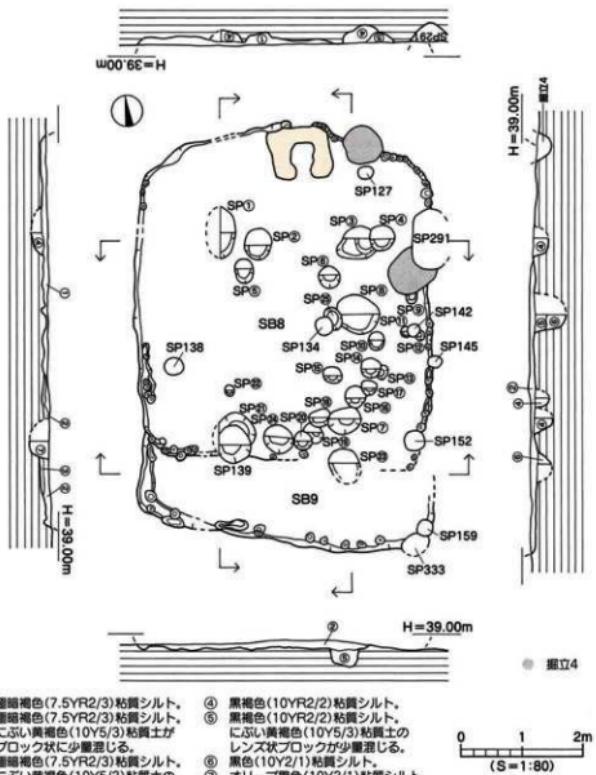
遺構と遺物



第37図 SB3 測量図・出土遺物実測図

縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。153～155は土師器の高坏で、153は坏部下位に稜をもち、154・155は柱据部境内面に明瞭な稜をもつ。156は土師器の楕で、口縁端部は丸く仕上げる。158・159は須恵器坏蓋である。推定口径12cm以上を測り、口縁端部は内傾する。160は須恵器坏身で、推定口径11.9cmを測る。たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は丸く仕上げる。161は須恵器有蓋高坏の蓋、162は脚部である。163は須恵器の短頸壺で、口縁端面に沈線1条が巡る。164は須恵器の広口壺で、口縁端部は上下方に拡張する。165は須恵器頸の頸部片で、波状文を施す。166は弥生前期の壺で、ヘラ描き沈線文と木葉文を施す。167は完形の土錐で、長さ4.3cm、幅1.3cmを測り、径0.4cmの孔を穿つ。168は結晶片岩製の石庖丁である。

時期：カマド内出土品の特徴より、S B 8 の廃棄・埋没時期は古墳時代後期後半、6世紀後半とする。



第38図 SB8・9 測量図

SB9 (第15・38図、図版16)

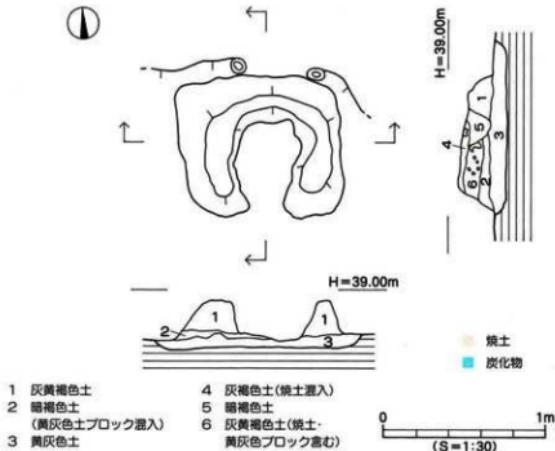
調査区南側F2・3区に位置する。第VII層上面で検出した。住居北側はSB8、南東隅は2基の柱穴(埋土:灰色土)に切られ、東側壁体は消失している。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西長4.36m、南北検出長1.50m、壁高は8~12cmを測る。住居埋土は2層に分層でき、①層極暗褐色粘質シルト、②層極暗褐色粘質シルト(にぶい黄褐色粘質土がブロック状に混入)である。なお、検出状況から②層は住居床面修復に伴う貼床土と考えられる。住居南西部壁体に沿って、幅15~20cm、深さ8~12cmを測る周壁溝を検出した。また、住居南側壁体に沿って、径10~16cm、深さ3~12cmを測る小ピットを検出した。ピットは壁溝に伴う杭痕と考えられる。壁溝及びピット埋土は、極暗褐色粘質シルト(にぶい黄褐色土がブロック状に混入)である。

住居底面は第VII層であり、やや凹凸が認められる。遺物はSB8として一括で取り上げられたため、厳密には識別することはできないが、SB8出土遺物として第40図に掲載した遺物のうち、土師器壺(151)や須恵器壺蓋(158・159)などがSB9帰属遺物と考えられる。

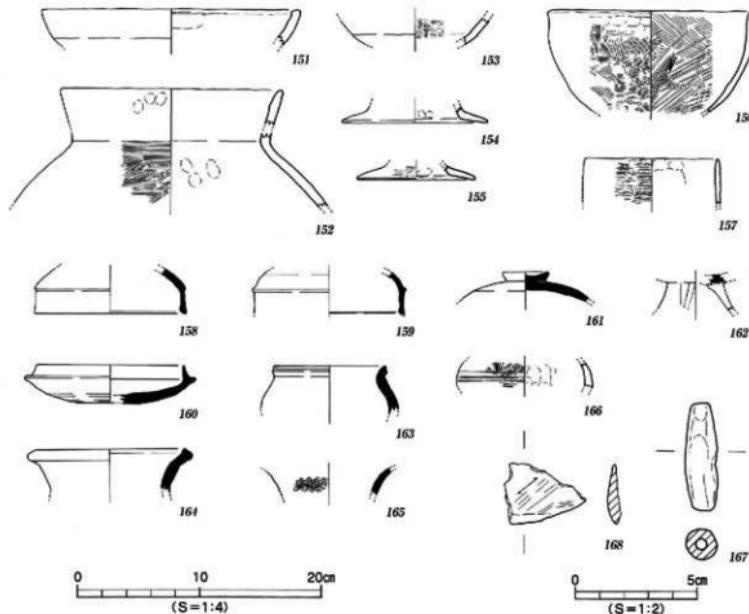
時期:出土遺物の特徴とSB8に先行することから、SB9の廃棄・埋没時期は古墳時代後期前半、6世紀前半とする。

SB6・7 (第15・41図、図版15)

調査区南東部E・F4区に位置する。第VII層上面での検出であるが、住居検出時には壁体が遺存しておらず、周壁溝のみの検出である。周壁溝は二重に巡っているが、平面精査では重複関係が認められず、同一住居か個別の住居の重複であるかは判断し得なかった。ここでは便宜上、外側を巡る周壁溝を持つ住居をSB6、内側を巡る住居をSB7として報告する。なお、整理作業において土層堆積を検討していく中で、SB7がSB6に先行することが確認された。



第39図 SB8 カマド測量図



第40図 SB8 出土遺物実測図

① SB6

住居北部はSB5を切り、住居北東部は掘立4柱穴、住居北西部は2基の柱穴〔S P180・322（埋土：暗褐色粘質シルト）〕に切られている。調査区南壁及び東壁の土層観察により、第Ⅲ層が住居上面を覆う。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.6m、南北検出長4.4mを測る。調査区東壁の土層観察により、住居埋土は極暗褐色粘質シルトである。

壁溝は住居北西部で検出され、幅16~20cm、深さ6~20cmを測る。また、住居南西部では径8~16cm、深さ4~10cm程度の小ピット列を検出したが、壁溝に伴う杭痕と考えられる。壁溝及びピット埋土は極暗褐色粘質シルトである。遺物は壁溝内から土師器片が少量出土したが、固化しうるものはない。

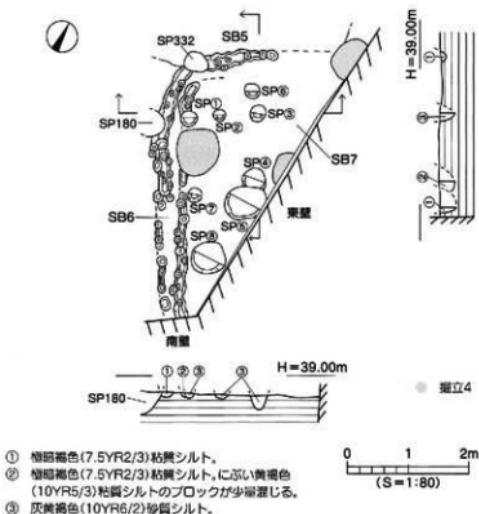
② SB7

住居西側壁体及び東側は掘立4柱穴に切れ、住居南側や東側は調査区外に続く。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.8m、南北検出長3.9mを測る。調査区東壁、南壁の土層

観察により、住居埋土は極暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）である。周壁溝は住居西側で検出され、幅12~20cm、深さ5~10cmを測る。壁溝内からは、径10~15cm、深さ3~10cmの小ピットを多数検出した。壁溝及びピット埋土は、住居埋土と同様の極暗褐色粘質シルトである。

住居底面にて大小8基の柱穴を検出したが、主柱穴は特定できなかった。各柱穴は径20~60cm、深さ8~30cmを測る。柱穴埋土は3種類あり、SP①~③は灰黄褐色砂質シルト、SP⑤~⑦は極暗褐色粘質シルト、SP④・⑧は極暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）である。柱穴内からは土器片や須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位やSB5との切りあいと住居埋土がSB8と酷似することなどから、SB6・7の廃棄・埋没時期は概ね古墳時代後期、6世紀代とする。



第41図 SB6・7 測量図

2) 挖立柱建物

掘立1 (第15・42図)

調査区北西部A 2～B 3区に位置する。東西3間以上、南北1間以上の総柱建物で、SB 1及びSB 2との切り合いより、掘立1は2棟の住居より後出する。建物を構成する7基の柱穴（SP①～⑦）は第Ⅳ層上面及びSB 1、SB 2床面にて検出した。建物規模は東西検出長7.19m、南北検出長3.14mを測り、建物方位をN-22°-Wにとる。各柱穴の平面形態は円形または梢円形を呈し、規模は径36～104cm、深さは検出面下18～30cmを測る。柱穴掘り方埋土は8層あり、①層暗褐色粘質シルト、②層暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトが混入）、③層黒褐色粘質シルト、④層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトが混入）、⑤層黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入）、⑥層暗褐色粘質シルト、⑦層暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）、⑧層黒褐色粘質シルトである。なお、②層や⑦層中には径3～5cm大の礫が少量含まれている。柱痕は5基の柱穴（SP③～⑦）で検出した。規模は径12～24cm、深さは検出面下44～80cmを測る。柱痕埋土はオリーブ黒色粘質土である。SP④・⑤では、柱痕上面にて径10cmと30cm大の扁平な石を検出したほか、SP⑤・⑥は柱穴上位が部分的ではあるが段掘り状となっている。いずれの柱痕も②層または⑤層が覆っていることから、柱は抜き取られたものと考えられる。

遺物は、柱穴掘り方埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が少量出土した。

出土遺物 (第42図)

169は須恵器壺蓋で、推定口徑12.2cmを測る。170は須恵器高杯の脚部片で、長方形状の透かしを2箇所で看取する。171は弥生土器の壺で、頭部に貼付凸帶文1条を施し、凸帶上に布目痕が残る。172・173は弥生土器の壺で、172は口縁端面に円線文と円形浮文を施す。173は肩部に刻目を施す。171～173は弥生中期後半、174は弥生土器の高杯である。弥生後期。

時期：出土した須恵器の特徴とSB 1・2に後出することから、古墳時代後期後半、6世紀後半とする。

掘立2 (第15・43図)

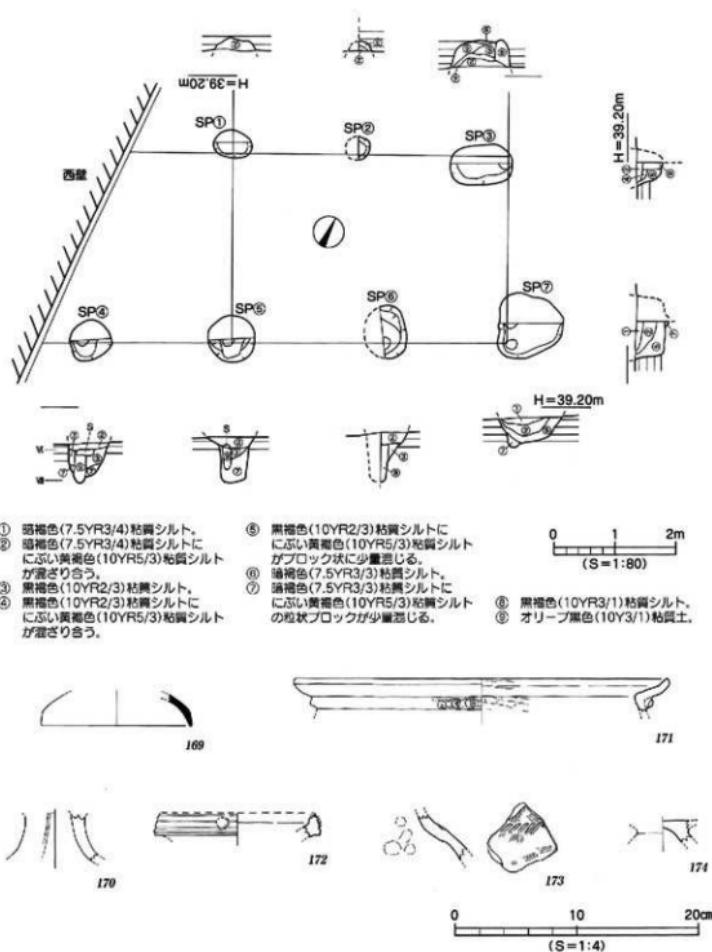
調査区北西部B 2～C 3区に位置する。桁行3間、梁行2間を測る総柱建物で、SB 1・2より後出する。建物を構成する12基の柱穴（SP①～⑫）は第Ⅳ層上面及びSB 1・2床面にて検出した。調査区西壁の土壙観察により掘立2は第Ⅳ層上面より掘り込まれており、第Ⅳ層が覆っていることを確認した。建物規模は、桁行長6.80m、梁行長5.42mを測り、建物方位をN-14°-Wにとる。各柱穴の平面形態は円形または梢円形を呈し、規模は径48～100cm、深さは検出面下16～56cmを測る。柱穴掘り方埋土は5層あり、①層暗褐色粘質シルト、②層暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入）、③層黒褐色粘質シルト、④層にぶい黄褐色粘質シルト、⑤層黒褐色粘質シルト（黄色砂が混入）である。なお、①層や②層中には径3～5cm大の礫が少量含まれている。柱痕は3基の柱穴（SP③・④・⑦）で検出した。規模は径12～16cm、深さは検出面下32～64cmを測る。柱痕埋土はオリーブ黒色粘質土である。なお、SP⑦では柱痕上面に①層が覆っていることから、柱は抜き取られた可能性が高い。

遺物は柱穴掘り方埋土中より、弥生土器片や土師器片、須恵器片が少量出土した。

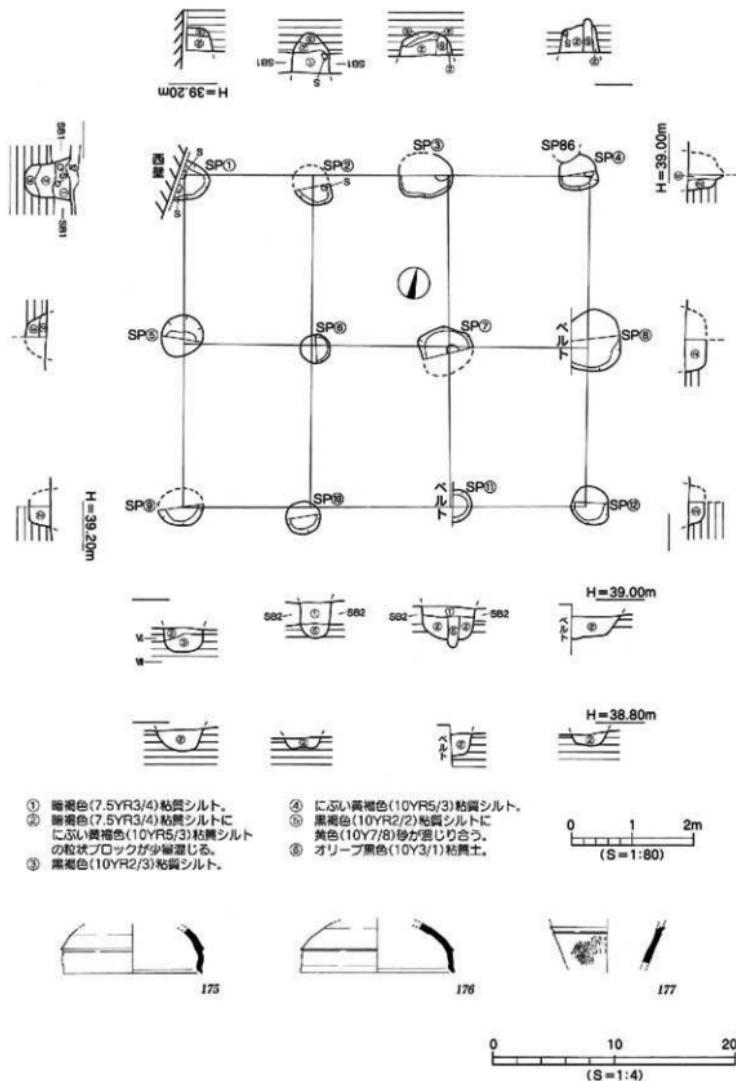
出土遺物（第43図）

175・176は須恵器壺蓋である。丸みのある天井部をもち、口縁端部は内傾する。177は須恵器壺の頭部片で、凸線2条と波状文を施す。

時期：出土遺物の特徴とS B 2との切り合いより、古墳時代後期前半、6世紀前半とする。



第42図 据立1 測量図・出土遺物実測図



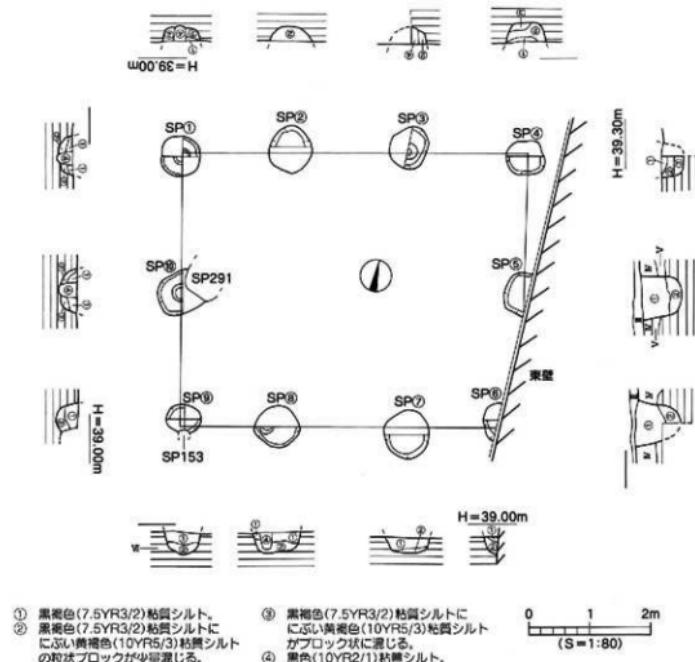
第43図 挖立2 測量図・出土遺物実測図

掘立4 (第15・44図)

調査区南東部E 3・4区に位置する。桁行3間、梁行2間を測る東西棟で、切り合いよりS B 5・7・8より後出する。建物を構成する柱穴は10基 (S P①~⑩) あり、第Ⅳ層上面及びS B 5・7床面にて検出した。なお、調査区東壁の土層観察によりS P⑤・⑥は第Ⅳ層上面から掘り込まれていることを確認した。建物規模は桁行長5.62m、梁行長4.27mを測り、建物方位をN-12°-Wにとる。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径44~80cm、深さは検出面下30~40cmを測る。柱穴掘り方埋土は3層あり、①層黒褐色粘質シルト、②層黒褐色粘質シルト (にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入)、③層黒褐色粘質シルト (にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入)である。柱痕は4基の柱穴 (S P①・③・⑧・⑩) で検出した。規模は径16cm、深さは検出面下28~32cmを測る。柱痕埋土は黒色粘質シルトである。

遺物は柱穴掘り方埋土中より上師器片や須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、S B 8より後出することから上限を概ね古墳時代後期後半、6世紀後半とする。



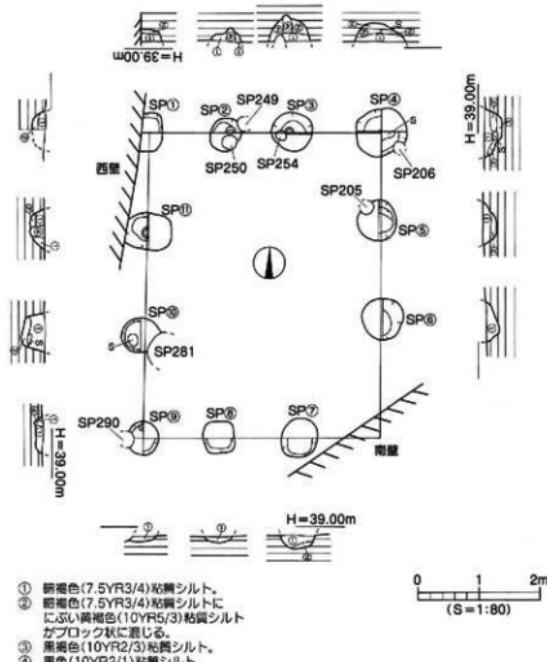
第44図 掘立4 測量図

掘立5（第15・45図、図版16）

調査区南西隅G 1～H 2区に位置する。桁行3間、梁行3間を測る南北棟で、建物を構成する柱穴は第2層上面にて11基（S P①～⑪）を検出した。建物規模は桁行長4.94m、梁行長3.91mを測り、建物方位をN-4°-Wにとる。各柱穴の平面形態は円形または梢円形を呈し、規模は径56～84cm、深さは検出面下12～40cmを測る。柱穴掘り方埋土は3層あり、①層暗褐色粘質シルト、②層暗褐色粘質シルト（にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入）、③層黒褐色粘質シルトである。なお、S P④・⑩では②層上面にて径10～15cm、厚さ3～4cm大の扁平な石が出土した。柱痕は4基の柱穴（S P②・③・⑨・⑪）で検出した。規模は径8～16cm、深さは検出面下20～40cmを測る。柱痕埋土は黒色粘質シルトである。

遺物は柱穴掘り方埋土中より少量の上師器片や須恵器片が出土したが、固化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないがSB 11に後出する柱穴を切っていることから、上限を古墳時代後期、6世紀代とする。

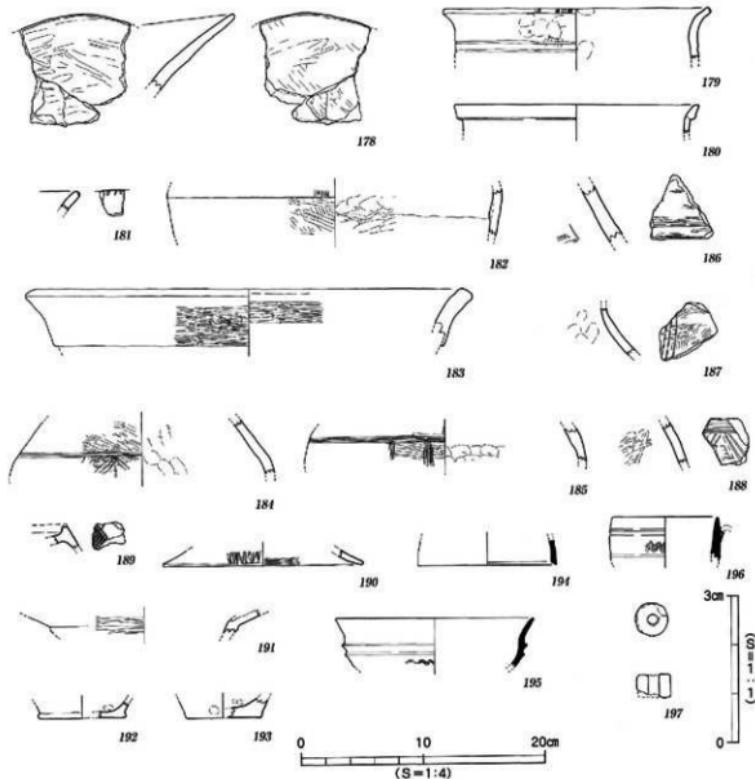


第45図 掘立5 測量図

3) 性格不明遺構

SX1 (第46図)

調査区北側B3～D4区で検出した不整形状の凹みである。第V層上面での検出であり、第V層と同様の黒褐色粘質シルトで埋没している。SX1内に設定したベルトの土層観察により、SB1・2・3及び掘立2柱穴はSX1上面より掘り込まれた遺構であることを確認した。また、SK1上部にはSX1埋土が覆っている。SX1の規模は東西検出長12.0m、南北検出長11.5mを測る。深さは北側で検出面下40cm、南側では15cmを測る。SX1底面はほぼ平坦であるが、わずかに中央部が凹む。SX1南側壁体沿いには径3～10cm、深さ2～8cm大の小ピットが点在するほか、テラス状となる



第46図 SX1 出土遺物実測図

箇所が遭査南側にて検出された。

遺物は埋土中より縄文土器片や弥生土器のほか、土師器や須恵器が混在して出土した。

出土遺物（第46図、図版21）

178は縄文晩期の浅鉢片で、RL条痕が残る。179～182は弥生前期の甕で、179は口縁端部に刻目、胴部にヘラ引き沈線文2条を施す。180は口唇部に凸帯を貼り付ける。182は胴部片で、縱方向のヘラ引き沈線文を施す。183～188は弥生前期の甕である。183は推定口径34.6cmを測る大型品で、口縁下に段をもつ。なお、186は183と同一個体と考えられる。184～188は肩部片で、184はヘラ引き沈線文と木葉文、185は沈線文、188は沈線文と2条1組の工具による山形文を施す。189は広口壺の口縁部片で、口縁端面に斜格子日文を施す。弥生中期中葉。190・191は弥生後期の高坏で、191は坏部外面にヘラミガキ調整を施す。192・193は甕の底部である。弥生前期。194は須恵器坏片、195は無蓋高坏である。196は須恵器碗で、把手部は欠損している。体部に凸線2条と波状文を施す。5世紀中葉～後半。197は滑石製の白玉で、一部を欠損している。直径0.68cm、厚さ0.45cm、重量0.32gを測る。

時期：遺物が混在しており時期特定は難しいが、堅穴住居の検出等から概ね古墳時代後期以降に埋没したものと考えられる。

（3）古代から中世の遺構と遺物

古代から中世の遺構は、掘立柱建物2棟（掘立3：古代、掘立6：中世）である。

掘立3（第15・47図）

調査区西北部C2・3区に位置する。桁行2間、梁行2間を測る総柱建物で、SB2床面にて検出した。建物を構成する柱穴は8基（SP①～⑧）を検出した。建物規模は桁行長4.81m、梁行長2.79mを測り、建物方位をE-20°-Wにとる。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径30～36cm、深さは検出面下10～12cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色粘質シルトである。柱痕はSP⑧で検出され、径8cm、深さ10cmを測る。柱痕埋土は暗褐色粘質シルトである。なお、SP④・⑥では埋土中に径3～5cm大の礫が数点含まれていた。

遺物は柱穴掘り方埋土中より、土師器片が少量出土した。図化しうるものを1点掲載した。

出土遺物

198は土師器坏の底部である。推定底径6.0cmを測る。底部外面は摩滅により調整は不明である。

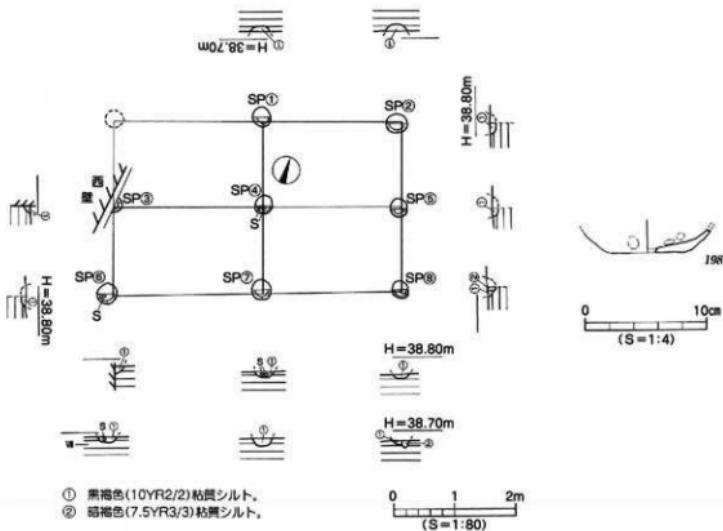
時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、出土品の特徴から概ね古代の遺構とする。

掘立6（第15・48図）

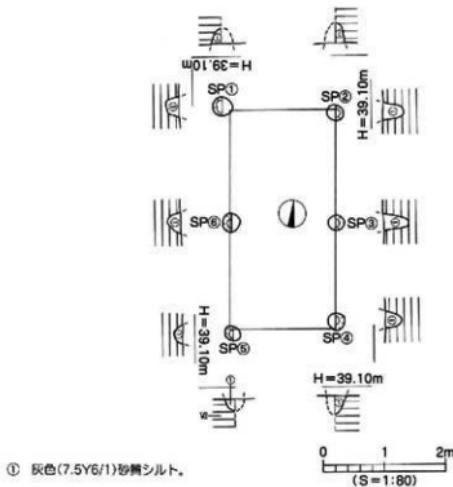
調査区南西部F・G2区に位置する。桁行2間、梁行1間の南北棟で、建物を構成する6基の柱穴（SP①～⑥）は、第VII層上面にて検出した。建物規模は桁行長3.68m、梁行長1.88mを測り、建物方位をN-5°-Wにとる。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径24～32cm、深さは検出面下16～40cmを測る。柱穴掘り方埋土は灰色砂質シルトである。

遺物は埋土中より少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が基本層位の第II層に類似することから、概ね中世の遺構とする。



第47図 挖立3 測量図・出土遺物実測図



第48図 挖立6 測量図

(4) その他の遺構と遺物

調査では遺構内及び掘立柱建物柱穴を除き、205基の柱穴を検出した。このほか、第V層中や重機掘削時に遺物が出土した。なお、重機掘削時の出土品は層位や地点が不明であるため、ここでは「地点不明出土遺物」として実測図を掲載する。

1) 柱 穴

調査で検出した柱穴は、埋土で分類すると以下の6種類（1類～6類）である。

- 1類：灰色土……………77基（土師器、陶磁器、鉄器が出土）
- 2類：灰褐色土……………20基（土師器が出土）
- 3類：褐色土……………6基（土師器、須恵器が出土）
- 4類：暗褐色土……………86基（弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土）
- 5類：暗褐色土（黄色土混入）……………12基（弥生土器、土師器、須恵器が出土）
- 6類：黒褐色土……………4基（弥生土器、土師器、石器が出土）

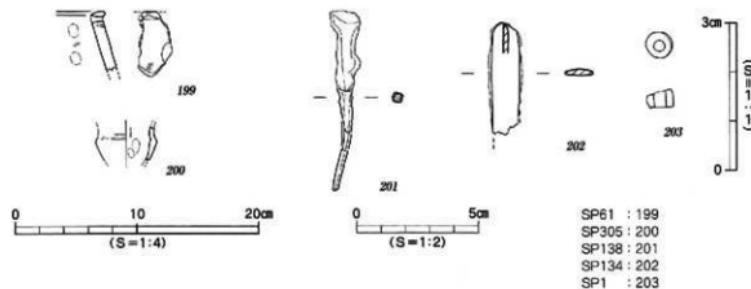
上記の柱穴のうち、1類と4類の柱穴から出土した遺物を5点掲載した。

出土遺物（第49図、図版21）

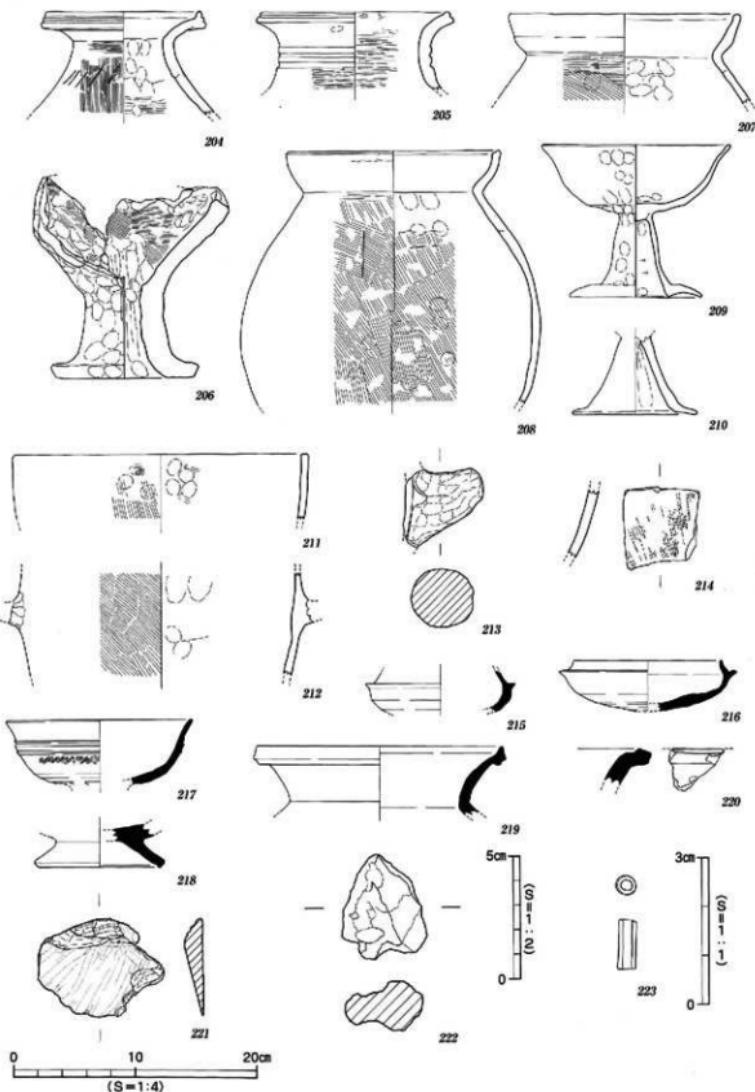
199はS P 61（4類）から出土した、弥生土器の壺である。口縁下に径0.4cm大の円孔を穿つ。弥生後期。200はS P 305（1類）出土のミニチュア品である。古墳時代。201はS P 138（1類）、202はS P 134（1類）から出土した鉄器で、201は釘、202は器種不明品である。203はS P 1（4類）から出土した滑石製の白玉で、直径0.55cm、厚さ0.35cm、重さ0.12gを測る。

2) 第V層出土遺物（第50図、図版22）

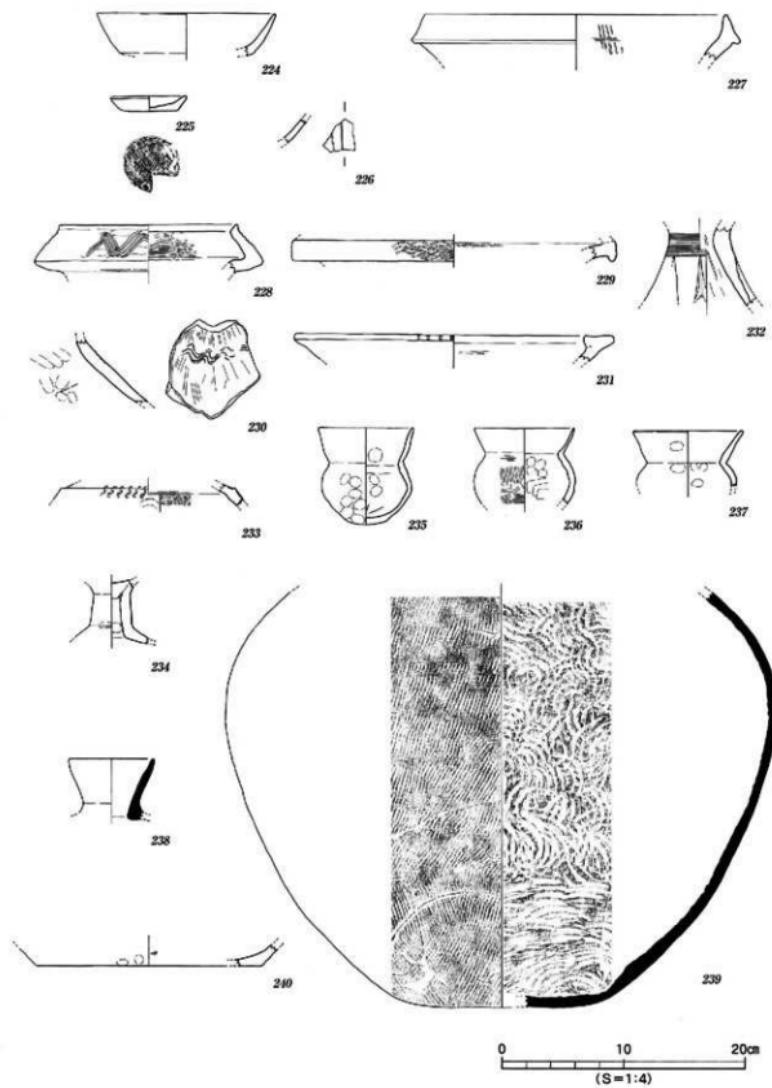
204・205は弥生土器の壺で、204の頸部には「ノ」の字状文、205は沈線文2条を施す。両者共に内面へラミガキ調整を施す。204は弥生中期後半、205は弥生前期。206は弥生土器の支脚で、受部は大きく「U」字状にカットされ、柱部は中空となる。弥生後期後半。207・208は土師器壺で、口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する。209・210は土師器高杯で、209は坏脚部の接合は充填技法による。211～213は土師器の瓶で、213は断面円形状を呈する。5世紀後半。



第49図 柱穴 出土遺物実測図



第50図 第V層 出土遺物実測図

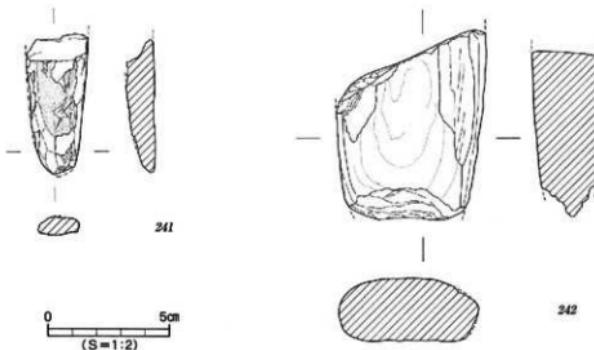


第51図 地点不明 出土遺物実測図(1)

214は軟質土器の甕または瓶の胴部片で、外面に純蒂文を施す。5世紀。215・216は須恵器の坏身、217は無蓋高坏である。215・217は5世紀中葉、216は6世紀後半。218は須恵器台付椀の脚部、219・220は甕の口縁部である。219は口縁端部を上方に拡張し、220は口縁部が方形状となる。219は5世紀後半、218・220は7世紀。221はサヌカイト製の剥片、222は鉄滓である。223は碧玉製の管玉で、直径0.36cm、長さ1.0cm、重さ0.21gを測る。

3) 地点不明出土遺物（第51・52図、図版22）

224は上師器坏、225は皿である。225は推定口径5.8cm、器高1.2cmを測るほぼ完形品で、底部の切り離しは回転糸切り技法による。226は青磁碗の胴部片で、蓮弁文が施される。13世紀。227は備前焼の擂鉢で、体部内面に条線が残る。14世紀。228～230は弥生土器の壺で、228・229は口縁部、230は肩部に櫛描き波状文を施す。228・229は弥生後期後半、230は弥生中期後半。231は弥生土器高坏の坏部片で、口縁端面に刻目を施す。弥生中期中葉。232～234は高坏の脚部片で、232は沈線文と未貫通の矢羽根状透かしを施す。弥生中期後半。233は半截竹管文と径1.4cm大の円孔を穿つ。弥生後期後半。234は短い柱部から裾部が稜をなして屈曲する。弥生末。235～237は土師器の小型壺である。口縁部は直立しない内済気味に立ち上がり、236の胴部外面にはハケメ調整を施す。5世紀。238は須恵器提瓶の口縁部で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。6世紀。239は須恵器大甕で、胴部外面に平行叩き、内面には円弧叩きを施す。6世紀。240は土師器甕または鉢の底部である。241は緑色片岩製の石盤で、基部は欠損する。242は結晶片岩製の伐採斧で、基部と刃部を欠損する。重量199.95gを測る。



第52図 地点不明 出土遺物実測図(2)

4. 小 結

今回の調査では、古墳時代前期から後期の竪穴住居・掘立柱建物から構成される集落間連造構のはかに、古代や中世の遺構や遺物を確認することができた。ここでは、集落の変遷を中心まとめをおこなう。

(1) 弥生時代

弥生時代の遺構は、竪穴住居1棟と土坑1基を検出した。S B 4は円形住居であるが一部を検出したにすぎず、規模は不明である。なお、住居検出時には壁体は遺存しておらず周壁溝のみを検出した。壁溝内からは杭痕と思われる小ビットを多数検出した。出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、概ね弥生時代中～後期の住居と考えられる。S K 1は直径4.1～4.4m、深さ1.3m前後を測る円形土坑で、土坑内からは中位付近にて径3～15cm大の河原石がレンズ状の堆積をなし、さらに土坑基底部付近には径1～3cm大の小砾が密集して堆積していた。なお、基底部付近からは湧水が認められたことから土坑の性格は井戸または、ため池等の施設であった可能性がある。土坑内からは、弥生時代前期から中期後半の上器片が埋土上位付近から出土したほか、底部を欠損した土師器甕が土坑上面にて出土した。時期特定は難しいが、検出層位や遺物から土坑の上限を弥生時代中期後半、下限は古墳時代中期後半とする。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構は、竪穴住居11棟と掘立柱建物4棟を検出した。竪穴住居の時期は、切り合いや出土遺物から4世紀後半、5世紀前半、5世紀後半、6世紀に大別される。

① 4世紀前半：S B 1は一辺5.7m前後を測る方形住居で、住居上位には径5～20cm大の河原石と共に弥生中期から後期の土器がまとまって出土した。検出状況から、住居廃絶に伴い人为的な埋め戻しがおこなわれたものと考えられる。住居構造では住居床面にて床修復に伴う貼床が施され、壁体に沿って周壁溝が付設されていた。貼床上面からは完形の小型丸底甕が出土したほか、埋土中より滑石製のF1玉や、鉄滓などが出土した。

② 5世紀：S B 2はS B 1と切り合う一辺約6mを測る方形住居で、S B 1と長軸方向をほぼ等しくする。4本柱構造の住居で、床面には部分的に貼床が施されていた。住居内からは完形の小型丸底甕や土師器甕などのほか、埋土上位付近からは弥生土器（前期～後期）が出土した。出土遺物の特徴より、S B 2の廃棄・埋没時期は5世紀前半頃と考えられる。次に、5世紀後半では5棟の竪穴住居を検出した。S B 3・5は一辺4.5m、S B 10は一辺5.7m、S B 11・12は一辺7mを測る方形住居で、S B 5・10・11には造り付けのカマドが付設されていた。カマドは住居北壁及び東壁に付設され、住居床面を掘りくぼめた後、土を充填し基盤を造った後に構築されている。住居構築以前の段階で、カマド位置があらかじめ決められていたことがわかる。S B 10では高壇の壊部が伏せた状態で検出され、カマド廃絶に伴う祭祀行為がおこなわれたものと推測される。このほか、S B 10からはガラス小玉1点と白玉21点が出土した。また、S B 11からはカマド燃焼部内にて完形の甕が正置に押しつぶされた状態で出土している。なお、いずれの住居においても主柱穴は特定できなかった。

③ 6世紀：6世紀の遺構は、竪穴住居4棟と掘立柱建物4棟を検出した。S B 8・9は重複する住居で、S B 8は一辺5m前後を測る方形住居である。4本柱構造で、住居北壁中央部に馬蹄形状のカマドが付設されている。S B 9はS B 8に先行する住居であるが、平面形態や規模は定かではない。

出土遺物は混在して取り上げたものの、出土地点や遺物の特徴からSB9は6世紀前半、SB8は6世紀後半の住居と考えられる。一方、SB6・7も重複する住居であるが明確な切り合い関係は認められず、改築住居の可能性がある。時期特定しうる遺物の出土はないが、住居埋土がSB8・9に酷似することなどから、概ね6世紀代の住居と考える。堅穴住居のほかに、掘立柱建物が4棟検出された。このうちの3棟は堅穴住居と切り合いが認められる建物である。掘立1、掘立2はSB2に後出する建物で、2間×3間の柱状構造である。両者共に柱は抜き取られたものと考えられ、掘立1では柱抜き取り後に扁平な石が柱底上面に置かれていた。また、掘立4はSB8に後出する2間×3間規模の建物、掘立5は3間×3間規模の建物である。出土遺物や切り合いから、掘立2は6世紀前半、掘立1・4は6世紀後半の建物と考えられる。掘立5は切り合いがなく時期特定しうる遺物は出土していないが、柱穴埋土が掘立1・2・4と酷似することから、概ね6世紀代の建物と推測される。

このほか、調査区北半部にて、広範囲の凹み（性格不明遺構：SX1）を検出した。深さ15~40cmを測り、第V層で埋没している。遺構内からは繩文土器や弥生土器、土師器、須恵器が混在して出土した。SX1は単なる地形の落ち込みか、あるいは何らかの施設であるかは判断しないが、樽味地区において、このような遺構は検出されておらず、その性格や構造解明は今後の課題となる。

④ 古代～中世：古代や中世では、掘立柱建物を1棟ずつ検出した。掘立3は2間×2間規模の縦柱建物で、柱穴内からは主に古代と思われる遺物が出土したが、時期特定はできなかった。また、中世では掘立6（1間×2間）を検出したほか、地点不明品として備前焼の擂鉢や青磁片などが出土した。

今回の調査では、主に古墳時代の住居を多数検出した。このうち4棟の住居からはカマドを検出した。特に、カマドの構築方法や規模、及びカマド廃絶方法を解明するうえで貴重な資料を得ることができた。また、SB1やSB2から出土した河原石や弥生土器（中期から後期）は、住居廃絶に伴い混入した可能性があり、住居の廃絶方法を考えるうえでも重要な手がかりを得たものといえよう。しかしながら、土坑SK1や性格不明遺構SX1の時期や性格特定など、課題を残す結果となった。今後は、周辺の調査事例を待ち、これら二つの遺構を解明すると共に遺構の廃絶方法についても言及していかねばならないだろう。

遺物一覧　－凡例－

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) L1→L1縁部、口端→口縁端部、天→天井部、頸→頸部、胴→胴部、
体→体部、脚→脚部、底→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では泥和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4)→「1~4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表8 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		色調(外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径(21.7) 残高 6.1	「く」の字状口縁。 口縁部内面に明瞭な稜あり。	①ヨコナデ ②ミガキ	③ヨコナデ ④皆ナデ?	暗茶褐色 暗灰褐色	石・長(1~3)金 ⑤		18
2	甕	口径(22.4) 残高 6.1	「く」の字状口縁。 口縁部はわずかに上方に肥厚する。	①ヨコナデ ②ハケーミガキ	③ヨコナデ ④ミガキ	暗褐色 暗褐色	石・長(1~3)金		
3	甕	残高 2.6	斜口凸帯文1条。小片。弥生前期。	ヨコナデ	ナデ	明茶色 明茶色	石・長(1) ⑤		18
4	西	口径(17.6) 残高 3.6	広口唇。口縁下端部に刻目。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~2) ⑤		
5	甕	残高 3.2	貼付凸帯文2条。	ヨコナデ	ハクリ	暗褐色 船底色	石・長(1~3) ⑤		
6	甕	残高 5.5	頭部に段をもつ。弥生前期。	ヨコナデ ミガキ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~2)金 ⑤		18
7	高杯	口径(22.0) 底径 3.3	口縁部に痕跡文による列点文あり。	①ヨコナデ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④ハケーミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1)金		18
8	高杯	口径(26.5) 底高 3.5	折曲口縁。口縁部内面に段をもつ。	①ヨコナデ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④ハケーミガキ	明暗褐色 暗褐色	石・長(1~2)金 ⑤		18
9	高杯	残高 4.4	へら線文5条+山形文。	ミガキ	①ヨコナデ ②ナシボリ痕	茶褐色 灰褐色	石・長(1) ⑤		
10	ショナル	口径(16.8) 残高 8.3	口縁部分、 口縁部は尖り気味に丸い。	ミガキ ヨコナデ	②ヨコナデ ④ナデ・ミガキ	黑色 暗褐色	石・長(1~2)金 ⑤		
11	甕	底径 6.8 残高 4.6	底底 くびれの上げ底。	ナデ・ヨコナデ (マメツ)	マメツ	暗褐色 黑褐色	石・長(1~3) ⑤		
12	西	底径 9.5 残高 4.5	上げ底。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~4)金 ⑤	黒斑	
13	西	底径 8.0 残高 5.6	上げ底。	ミガキ ④ナデ	ハケ ④ナデ	乳褐色 淡灰黄色	石・長(1~3)金 ⑤		
14	不明	長さ 3.6 幅 3.7	「×」の捺跡あり。小片。	ナデ	ナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1)金 ⑤		18
15	甕	口径(17.0) 底高 30.1	復元完成品。口縁部は内側する。	①ヨコナデ ④ハケーナデ	②ヨコナデ ④板ナーナデ	明茶褐色 茶褐色	石・長(1~6)金 ⑤	輝付等	18

表9 SB1出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		色調(外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
16	甕	口径(12.6) 残高 3.1	内湯口縁。器壁は薄い。小片。	ナデ	①ナデ ④クズリ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~2)金		
17	甕	口径(14.0) 残高 4.8	内湯口縁。口縁部はわずかに 内方に肥厚。器壁は薄い。	ナデ	ナデ	淡褐色 淡灰茶色	石・長(1~5)金 ⑤	黒斑	
18	甕	口径(16.1) 残高 4.9	外反口縁。 口縁部内面に明瞭な稜あり。	ハケー ヨコナデ	②ハケーヨコナデ ④クズリ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~2)金 ⑤		
19	甕	口径(14.0) 残高 4.0	内湯口縁。口縁部は内方に肥厚。	ヨコナデ ハケ?	ナデ・ヨコナデ (マメツ)	淡褐色 淡褐色	密・金 ⑤		
20	甕	口径(15.5) 残高 4.1	直立口縁。器壁は厚い。	ヨコナデ ナデ	②ヨコナデ ④ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) ⑤		
21	甕	口径(16.1) 残高 5.2	直立口縁。器壁は厚い。 中位に膨らみをもつ。	ヨコナデ ナデ	②ヨコナデ ④ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~3)金 ⑤		
22	甕	口径(17.0) 残高 1.9	内湯口縁。口縁部は丸い。 腹内系。小片。	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ ナデ	淡黃褐色 淡黃褐色	長(1~2)金 ⑤		
23	甕	口径(23.6) 残高 5.8	大型甕。口縁部は上内外に弧張。 口縁部面は凹む。	①ヨコナデ ②ヨコナデ ③ナデ	③ヨコナデ ④ナデ ④クズリ	暗褐色 暗褐色	石・長(1~3)金 ⑤		
24	甕	口径 10.7 残高 8.3	小型丸窓の復元品。口縁部は尖り気味に 仕上げ。底部外側には手持ちラグズリを施す。 横口縁。	ヨコナデ ナデ	①ヨコナデ ②ヨコナデ ③ヨコナデ ④ナデ ④クズリ ⑤工具ナデ	淡乳褐色 淡乳褐色	石・長(1~4)金 ⑤	黒斑	18
25	甕	口径(20.5) 残高 8.0	二重口縁。口縁部1/2の粗底。 腹内系。小片。	ヨコナデ ナデ	③ヨコナデ ④ナデ ④クズリ ⑤板ナーナデ?	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3)金 ⑤		18
26	鉢	口径 11.6 残高 4.0	口縁部は丸い。小片。	ナデ	ナデ	乳茶褐色 淡褐色	石・長(1~2)金 ⑤		
27	鉢	底径(12.0) 残高 4.5	脚付鉢。柱部裏面に沈線文1条。	ハケ(5本/φ) ヨコナデ	ケズリ	暗褐色 暗褐色	石・長(1~3) ⑤		
28	高杯	残高 8.3	円筒状の柱部。柱部内面にシボリ 痕あり。柱部完形品。	ナデ	シボリ痕 工具ナデ・ナデ	乳茶褐色 乳褐色	石・長(1~4) ⑤		18
29	高杯	残高 6.9	円筒状の柱部。	ハケ・ミガキ ヨコナデ	ナデ	暗茶色 淡黃褐色	石・長(1~2) ⑤		
30	高杯	残高 7.5	円筒状の柱部。 柱部内面にシボリ痕あり。	ミガキ(マメツ) ナデ	シボリ痕 ナデ	褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ⑤		

遺物観察表

S B 1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法縫(cm)	形態・論文	封 窓		色調(外側) 色調(内面)	陶土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
31	高杯	残高 5.6	脚部片。	ハケ(10本/cm)	ケズリ	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1~2)金 ◎	黒斑	
32	高杯	底径(10.3) 残高 6.3	ラップ状に開く脚部。 脚部端部は丸い。	ハケ(5~6本/cm) マツメ	(ナ)テ・ハケ ? ◎ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3)金 ◎		
33	壺	口徑(20.6) 残高 4.1	折口縫。口縫溝面に斜目文。肩部にヘラ沈 被文又は刻文を有す。弥生後期。小円。	ヨコナデ	◎ヨコナデ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ◎	黒斑	18
34	壺	口徑(26.3) 残高 1.5	折口縫。口縫溝面に沈文と刻 目文を施す。弥生前期。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金 ◎		
35	壺	口徑(22.0) 残高 3.1	貼付凸縫文 1条。口部上に布目压 痕あり。弥生中段。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2) ◎		
36	壺	口徑(26.8) 残高 1.6	口縫溝面は上方に延びる。小片。 弥生中段。	ナデ・マツメ	ヨコナデ・ナデ マツメ	茶褐色 茶褐色	長(1)金 ◎		
37	壺	口徑(17.1) 残高 4.5	内窓口。小片。弥生中期。	◎ヨコナデ ◎ハケ→ナデ ◎ハケ	◎ハケ→ヨコナデ ナデ	褐色 黒褐色	長(1)金 ◎	黒斑	
38	壺	残高 2.3	貼付凸縫文 1条。小片。弥生前期。	ナデ	ナデ ミガキ	褐色 褐色	長(1) ◎		
39	壺	残高 1.8	折口縫。口縫内面に強圧痕あり。 小片。弥生前期。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ◎		
40	壺	残高 3.8	沈文又 1条+山形文。小片。 弥生前期。	ミガキ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ◎		
41	壺	残高 3.9	ヘラ沈文又 2条+山形文。小片。 弥生前期。	ナデ・ミガキ	ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ◎		18
42	壺	底径(6.2) 残高 4.6	平底。弥生中段後半。	ミガキ	ナデ	茶褐色 褐色	石・長(1~2)金 ◎		
43	壺	底径(6.8) 残高 4.6	上げ底。弥生中期中段。	ナデ・ヨコナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
44	壺	口徑(17.2) 残高 6.5	広口型。口縫上面面に斜目文。唇部に 貼付の帯又は縫を施す。弥生中期中段。	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3)金 ◎	黒斑	18
45	壺	口徑(16.7) 残高 7.4	太腹壁。口縫端部は下方に強圧し、口縫 溝面に凹縫又は斜目文を施す。弥生中段後半。	ナデ・ハケ (ナ)テ・マツメ	ヨコナデ ハケ・ミガキ	褐色 淡茶褐色	石・長(1~3) ◎		
46	壺	口徑(18.6) 残高 6.1	太腹壁。口縫溝面に凹縫又 3条。肩部に貼付 凸縫文(布目压痕)を施す。弥生中段後半。	ヨコナデ	ヨコナデ ハケ→ミガキ	乳褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金 ◎	黒斑	
47	壺	残高 2.8	複合口縫。波紋又 2段あり。 小片。弥生後期。	ヨコナデ	ハケ(8本/cm)	茶色 茶色	石・長(1) ◎		
48	壺	残高 6.0	貝殻泥文による列点文あり。 弥生中段後半。	ナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3)金 ◎		
49	壺	残高 3.4	貝殻泥文による列点文あり。小片。 弥生中段後半。	マツメ	ナデ	茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2) ◎		19
50	壺	残高 3.1	貝殻泥文による列点文+沈文5条。 小片。弥生中期後半。	マツメ	ナデ	淡茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~4) ◎		19
51	壺	底径 5.3 残高 5.5	平底。底部完形。	ハケ・マツメ	ハケ→ナデアゲ ハケ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3) ◎	黒斑?	
52	鉢	口徑(18.3) 残高 4.9	外反縫。口縫端部は上下方に強盛。 小片。弥生後期。	ハケ→ミガキ?	ヨコナデ ハケ→ミガキ?	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ◎	輝付蓋?	
53	鉢	口徑(19.8) 残高 6.7	外反縫。口縫端部は丸い。 弥生後期。	マツメ ハケ(2本/cm)	ヨコナデ ハケ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ◎		
54	鉢	底径(9.0) 残高 2.4	脚付鉢。脚部は「口」の字状に仕 上げる。弥生後期。	ハケ(2~13本/cm)	ハケ(11~12本/cm) (高麗)ヨコナデ ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3)金 ◎		
55	高杯	口徑(21.2) 残高 4.6	凹縫文又 1条+刻目文。 弥生中段後半。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 乳褐色	石・長(1)金 ◎		
56	器台	残高 8.8	柱部片。φ2.0cmの円孔2段を2 箇所に施す。	マツメ	マツメ(ナ)テ	褐色 褐色	長(1) ◎		
57	支脚	底径(13.0) 高さ 15.5	U字形支柱。脚部の一部のみ欠損。ナデ	ナデ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金 ◎	黒斑	19
58	漆鉢	残高 3.0	口縫端部に斜目文。小片。 漆文晚期。	ナデ	ナデ	淡茶褐色 黒褐色	石・長(1~2)金 ◎	黒斑	

表10 S B 1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 縫				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
59	スクレイバー	ほぼ完存	サヌカイト	2.2	5.2	0.7	8.40		
60	スクレイバー	完存	サヌカイト	1.4	2.6	0.2	0.85		

表11 SB1出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
61	斧	-	不明	4.2	5.4	2.3	75.58	19

表12 SB1出土遺物観察表 玉類

番号	器種	残存	材質	色	法 量			備考	図版
					直径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
62	白玉	完形	滑石	灰色	0.38	0.2	0.03		

表13 SB2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	装 飾		色調(外) (内)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
63	豆	口径(13.2) 残高 17.6	直立口縁。口縁裏部は「コ」の字状。 1/3の残存。	ヨコナデ ハク	ヨコナデ ハク	淡黄褐色 橙色	石・長(1~3)金 ◎		19
64	豆	口径(12.9) 残高 8.8	内溝口縁。口縁裏部は丸い。 器壁は薄い。	マツツ ハク(14cm/φ)	マツツ マツツ(ケズリ)	黒灰褐色 乳褐色	石・長(1~3)金 黒斑 ◎		19
65	豆	口径(15.4) 残高 13.3	内溝口縁。口縁裏部は内方にやや 抵抗。口縁内面に被りあり。	マツツ	マツツ (ナ・ケズリ)	橙褐色 橙褐色	石・長(1~4)金 黒斑 ◎		
66	豆	口径 9.8 残高 6.9	小型丸底窓の完形品。口縁裏部は尖り気 味。底部外観に手持ちケズリを有す。	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ ケズリ	淡黄褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金 黒斑 ◎		19
67	豆	残高 4.6	小型丸底窓の頸面部片。	ヨコナデ	ヨコナデ ヨコナデ	明褐色 明褐色	石・長(1~2)金 ◎		
68	豆	残高 6.3	小型丸底窓の頸面部片。 1/2の残存。	ヨコナデ ハク(10cm/φ)	ヨコナデ ハク	褐色 淡茶褐色	石・長(1)金 黒斑? ◎		
69	豆	残高 3.2	頸面部小片。	ハク (7本/cm)	ミガキ ヨコナデ	灰茶褐色 灰茶褐色	石・長(1~4) ◎		
70	高环	口径(16.5) 残高 5.2	环部片。	ヨコナデ	ミガキ?	乳茶色 乳白褐色	石・長(1~2)金 ◎		
71	高环	残高 3.3	柱部外側に磨取り痕あり。	ハナデ 磨取り	ミガキ・ナデ ハナデ	褐灰色 淡茶褐色	石・長(1~2) ◎		
72	高环	底径(11.2) 残高 2.0	脚部小片。柱部裏面に後振り。	マツツ (ヨコナデ)	マツツ (ヨコナデ)	乳褐色 乳褐色	密 ◎		
73	豆	口径(25.0) 残高 10.2	直立口縁。口縁裏部は丸い。	ヨコナデ	マツツ(ナデ)	茶褐色 淡茶褐色	石・長(1)金 ◎		
74	豆	口径(25.0) 残高 3.5	折曲口縁。口縁裏部に刻目文。颈部にへらす跡 文3条とタ下方の山形文があり。弔生差崩。	ヨコナデ ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ・ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2)金 ◎		
75	豆	口径(24.2) 残高 5.9	折曲口縁。口縁裏部に刻目文。颈部にへらす跡文3条あり。弔生前期。	ナデ・ヨコナデ	ナデ(マツツ)	灰褐色 淡褐色	石・長(1~3)金 黒斑 ◎		
76	豆	口径(18.0) 残高 1.8	折曲口縁。口縁裏部に刻目文あり。 小片。弔生前期。	ヨコナデ	ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2) ◎		
77	豆	口径(27.3) 残高 2.3	口縁裏部に貼付凸彫文2条。口下部に 刻目文。颈部に擦剥あり。弔生前期。	ヨコナデ	ナデ	灰褐色 灰茶褐色	石・長(1~2)金 ◎		19
78	豆	口径(24.0) 残高 2.8	広口型。口縁裏面に貼付凸彫文。口縁 裏面に山形文あり。弔生中期中葉。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1~3) ◎		19
79	高环	口径(25.4) 残高 3.9	环部片。弔生後期後葉。	マツツ	マツツ	褐色 橙色	石・長(1~2) ◎		
80	豆	底径 4.0 残高 7.0	上げ底。弔生後期前葉。	マツタタキ・ハク ナデ	ナデ	茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3)金 黒斑 ◎		
81	深鉢	口径(28.8) 残高 3.5	口縁裏に貼付凸彫文、凸帯下端に 刻目文を施す。圓文輪廓。	ヨコナデ マツツ・ハクリ	ナデ・ヨコナデ ナデ・ヨコナデ	暗褐色 褐色	石・長(1) ◎		19

表14 SB11出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	装 飾		色調(外) (内)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
82	豆	口径(20.3) 残高 5.8	外反口縁。口縁中位に膨らみを もつ。口縁多く1/2の残存。	ヨコナデ ハク	ヨコナデ ハク	淡茶褐色 茶褐色	石・長(1~4) ◎		
83	豆	口径(25.5) 残高 3.3	内溝口縁。口縁裏部はわずかに 内傾する。小片。	ヨコナデ (マツツ)	ヨコナデ (マツツ)	明褐色 明褐色	石・長(1~4)金 ◎		
84	豆	口径 16.1 残高 15.6	底部欠損。外反口縁。	ヨコナデ ハク	ヨコナデ ハク	橙褐色 淡茶褐色	石・長(1) ◎		20
85	高环	口径 16.5 残高 5.6	外部ほぼ完形。环部下位にはわざ かに被りあり。	マツツ	マツツ	明褐色茶色 明褐色茶色	石・長(1~2)金 ◎		20
86	高环	口径 5.4	环部片。环部下位に被りあり。	ナデ・ヨコナデ ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ ナデ・ヨコナデ	暗褐色 褐色	密 ◎		

遺物観察表

SB11出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
87	高杯	徑高 2.5	脚部。	ナデ	工具ナデ	灰青褐色 灰青褐色	密 ◎		
88	壺	口径 13.1 残高 5.1	口縁部を一部欠損。口縁部は尖り 気味。底部は平底。	マメツ(ナデ)	マメツ	稻葉色 乳白褐色	石・長(1) ◎	黒斑 20	

表15 SB12出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
89	壺	口径(16.8) 残高 3.0	口縁部に凸線1条。 口縁部は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		20

表16 SB10出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
90	壺	口径(22.1) 残高 3.3	内縁口。口縁部は内傾し、 やや肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	淡青褐色 淡褐色	石・長(1)金	黒斑	
91	壺	口径(21.0) 残高 3.3	内縁口。肩側部は内傾し、内側に やや肥厚する。口縁部はナデむ。	ヨコナデ	⑤ヨコナデ ④ナデヨコナデ	淡黄灰色 淡黄灰色	石・長(1~3)金 ◎		
92	壺	口径 12.0 器高 5.5	ほぼ完形品。口縁部は尖り気味。	ナデ	ナデ	明褐色 明褐色	密・金 ◎		20
93	壺	口径 12.0 器高 5.5	3/4の残存。口縁部は尖り気味。	ナデ	ナデ	淡褐色 明褐色	密・金 ◎		20
94	壺	口径(12.0) 器高 4.7	口縁部を一部欠損。 底部は凹む。	ナデ	ナデ	明褐色 明褐色	密・金 ◎		
95	壺	口径(12.6) 残高 4.3	口縁部内面に内傾する面をもつ。 体部内面に羅文風のカラミカキあり。 ミガキ?	ヨコナデ	②ヨコナデ ③ミガキ	淡褐色 乳褐色	密・金 ◎	黒斑	
96	壺	口径(13.9) 残高 3.1	外反口縁。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 淡褐色	石・長(1~3)金 ◎	黒斑	
97	高杯	口径 15.1 残高 6.6	环部完形品。环部下位に不明瞭な 横あり。口縁部はやや反する。	③ヨコナデ ナデ・ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ・ナデ (マメツ)	黄褐色 褐色	密 ◎		20
98	高杯	口径(17.0) 残高 4.5	环部小片。	マメツ	マメツ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2)		
99	高杯	底径(10.8) 残高 1.6	脚部小片。柱基部内面に横あり。	マメツ	ハケ マメツ(ナデ)	淡褐色 淡褐色	密・金 ◎		
100	高杯	底径(10.6) 残高 2.2	脚部。柱基部内面に明瞭な横あり。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	長(1) ◎		
101	壺	残高 6.1	把手部完形品。肩部との接合痕あり。	ナデ		灰褐色	石・長(1~2)金 ◎		
102	壺	残高 5.0	把手部完形品。 肩部との接合に伴う突起部あり。	ナデ		乳褐色	石・長(1~4)金 ◎		
103	环	口径(2.0)残高 4.2	2の残存。異常に天井部。口縁部 は水平な面をもつ。底部はややむ。	④回転ヘラケズリ ⑤回転ナデ	ナデ ④回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		20
104	环	口径(12.8) 残高 3.3	小片。口縁部は内傾する面をもつ。 なす。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
105	环	残高 2.5	小片。扁平な天井部。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ 回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
106	蓋	口径(12.6) 器高 4.9	青蓋高杯の蓋。1/3の残存。	⑥回転ヘラケズリ →回転ナデ	ナデ 回転ナデ	黑色 青灰色	密 ◎		
107	高杯	口径(14.6) 残高 5.7	無蓋高杯。1/3の残存。 波状文(6~8条)。透かし痕あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 黑色	密 ◎	自然釉	20
108	壺	口径(15.6) 残高 2.2	広口壺。口縁部は画面三角形状 を呈する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表17 SB10出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量			備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
109	不明	不明	鉄	2.1	4.5	0.3	0.34	20

表18 SB10出土遺物観察表 玉類

(1)

番号	器種	残存	材質	色	法 量			備 考	図版
					直径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
110	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.36	0.26	0.03		20

SB10出土遺物観察表 玉類 (2)

番号	器種	残存	材質	色	法 面			備 考	図版
					直径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
111	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.49	0.28	0.06		20
112	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.44	0.30	0.07		20
113	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.47	0.28	0.07		20
114	臼玉	完形	滑石	灰色	0.39	0.29	0.07		20
115	臼玉	完形	滑石	灰色	0.52	0.18	0.07		20
116	臼玉	完形	滑石	灰色	0.54	0.18	0.08		20
117	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.45	0.34	0.08		20
118	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.49	0.23	0.08		20
119	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.40	0.29	0.08		20
120	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.50	0.29	0.08		20
121	臼玉	ほぼ完形	滑石	緑灰色	0.47	0.29	0.08		20
122	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.48	0.35	0.09		20
123	臼玉	完形	滑石	灰色	0.48	0.30	0.09		20
124	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.49	0.33	0.10		20
125	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.48	0.41	0.10		20
126	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.49	0.36	0.11		20
127	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.48	0.37	0.11		20
128	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.48	0.38	0.12		20
129	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.57	0.31	0.15		20
130	臼玉	1/2	滑石	緑灰色	(0.41)	0.37	0.04		20
131	小玉	完形	ガラス	青色	0.50	0.25	0.09		20

表19 SB5出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法面(cm)	形態・施文	調 整		色調(外 面)	胎土 焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
132	甕	口径(18.4) 底面 28.0	復元完形品。口縁下位に棱あり。 内窓口縁。	⑧ハグ 一感ナデ ナデ	⑩ヨコナデ ⑪ヨコナデ ナデ	暗灰褐色 褐色 ◎	石・長(1~3)金 石	黒斑	21
133	甕	口径(15.4) 底面 6.0	内窓口縁。口縁部は内棱する丸味 のある面をもつ。	⑫ヨコナデ ⑬ヨコナデ ⑭小ケ(1日本) CT	⑪ヨコナデ ⑫ヨコナデ ナデ	淡褐色 淡褐色 ◎	石・長(1~4)金 石		
134	甕	口径(16.5) 底面 8.3	口縁。口縁部は内棱する丸味のあ る面をもち、内側にわずかに肥厚する。	⑮ヨコナデ ⑯ハグ(マツツ) ナデ	⑯ヨコナデ ⑰ハグ(マツツ) ナデ	淡褐色 淡褐色 ◎	石・長(1~2)金 石		21
135	亞	口径(13.9) 底面 4.3	二重口縁。口縁部はナテ凹む。 小片。	ヨコナデ ナテ	⑪ヨコナデ ⑫クズリーナデ ナテ	乳茶褐色 乳茶褐色 ◎	墨・金 ◎	黒斑	
136	亞	死窓 5.4	底部完形品。	⑨ハグ ⑩ハグ-ナデ	ナテ・板ナテ	橙褐色 橙茶褐色 ◎	石・長(1~2)金 石	黒斑	
137	碗	口径 12.1 底面 5.6	体部は内窓し、口縁部は短く直立 する。口縁部は内棱する。	⑪ヨコナデ ⑫ナデ	⑪ヨコナデ ⑫ナデ	橙褐色 橙褐色 ◎	石・長(1~3)金 石		21
138	高环	口径(17.7) 底面 5.6	环部下位にわざかに棱をもち、 口縁部は外反する。	マツツ マツツ	マツツ	淡褐色 淡褐色 ◎	石 石		
139	器	口径(11.9) 底面 5.1	有蓋高环。つまみ上部は凹む。 口縁部は内棱する凹面をなす。	⑪ヨコナデ ⑫ヨコナデ	回転ナデ 回転ナデ	灰色 青灰色 ◎	密 密		
140	环身	口径(10.8) 底面 5.0	たちあがり部は内棱し、受部窓 に沈没状の凹みが追る。	⑫ヨコナデ ⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ	青灰色 青灰色 ◎	密 密		

遺物観察表

表20 SB3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外側) (内面)	胎土 焼成	備考 図版
				外 面	内 面			
141	环	口径(11.2) 残高 4.8	丸味のある天井部。 □縁端部は内傾する。	⑥凸輪ヘラクスリ ⑦凹輪ナデ	凹輪ナデ	灰色 青灰色	密	
142	高杯	口径(14.8) 残高 2.3	□縁部小片。	ナテ	ナテ	橙褐色 橙褐色	密	黒斑
143	高杯	残高 1.5	环部小片。	ナテ	ミガキ	淡褐色 橙褐色	密・金 ○	
144	壺	残高 2.6	貼付凸輪文1条。□唇部に押圧あり。 弥生前期。	ナテ・ヨコナデ	ナテ	茶褐色 褐色	石・長(1)金 ○	
145	壺	残高 2.3	貼付凸輪文1条。□唇下位に刻目あり。 又あり。弥生前期。	ナテ	ミガキ?	茶褐色 褐色	石・長(1~2)金 ○	
146	壺	残高 2.5	貼付凸輪文1条。□唇上に刻目あり。 弥生前期。	ナテ・ヨコナデ	ミガキ?	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)	
147	壺	残高 3.0	貼付凸輪文1条。□唇上に刻目あり。 弥生前期。	ミガキ?	マツツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○	
148	壺	残高 3.5	脚部片。肩部施文による列点文あり。 弥生中期後半。	マツツ(ナテ)	ナテ	暗茶褐色 淡茶色	石・長(1~3)金 ○	
149	壺	残高 4.8	ハラ沈線文4条+弧文+ハラ沈線文1条 +斜線文+ハラ沈線文2条。弥生前期。 平底。底部外側にハラ沈線文2条。 弥生前期。	ナテ?	ナテ・板ナテ	淡褐色 乳茶褐色	石・長(1~2)金 ○	黒斑
150	壺	底径 8.0 残高 2.9	ナテ	ミガキ? ○	マツツ	橙褐色 橙褐色	石・長(1~2)金 ○	

表21 SB8出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外側) (内面)	胎土 焼成	備考 図版
				外 面	内 面			
151	壺	口径(21.0) 残高 2.9	内窓口縁。□縁端部は内傾し、 内方にやや厚厚する。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~3) ○	
152	壺	口径(18.0) 残高 5.9	直立口縁。□縁端部は丸く仕上げる。 (マツツ)	⑥ハケ(10本)(cm)	ナテ(マツツ) (マツツ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金	
153	高杯	残高 2.7	环部下位に穂あり。小片。	マツツ(ナテ)	マツツ(ハケ?)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1) ○	
154	高杯	底径(11.8) 残高 1.3	柱状部内面に明瞭な筋あり。小片。	マツツ	ナテ(マツツ)	淡茶褐色 淡茶褐色	密	
155	高杯	底径(9.7) 残高 1.2	柱状部内面に明瞭な筋あり。小片。	ミガキ・ナテ (マツツ)	ヨコナデ (マツツ)	茶褐色 淡茶褐色	密	
156	壺	口径(16.4) 残高 8.2	体部は内窓し、口縁部はわずかに 外反する。	⑦ヨコナデ ⑦ハケ	ハケ	緑茶褐色 緑茶褐色	石・長(1~2)金 黒斑	
157	製塩 土器	口径(10.8) 残高 3.6	直口口縁。□縁端部は尖る。	タタキ	ナテ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1) ○	21
158	环	口径(12.2) 残高 3.7	丸味のある天井部。 □縁端部は内傾する。	凹輪ナデ	凹輪ナデ	青灰色 青灰色	密	自然釉
159	环	残高 3.5	断面三角形状の穂の筋あり。小片。	⑤凹輪ヘラクスリ ⑤凹輪ナデ	凹輪ナデ	青灰色 青灰色	密	自然釉
160	环身	口径(11.9) 残高 3.1	たちあがりは低く内傾し、たちあがり り筋部は尖り気味。1/4の残渣。	⑤凹輪ナデ ⑤凹輪ヘラクスリ ⑤凹輪ナデ	凹輪ナデ 凹輪ナデ	青灰色 青灰色	密	
161	蓋	つまみ径 3.8 残高 2.4	舟底高底。つまみ中央部は凹む。	⑤凹輪ナデ ⑤凹輪ヘラクスリ ⑤凹輪ナデ	凹輪ナデ	灰色 青灰色	密	自然釉
162	高杯	残高 3.0	脚部片。透かしを2器所看取。 小片。	凹輪ナデ	凹輪ナデ	青灰色 青灰色	密	
163	壺	口径(8.7) 残高 3.8	外反口縁。□縁端部に沈線1条あり。	凹輪ナデ	凹輪ナデ	青灰色 青灰色	密	自然釉
164	壺	口径(12.0) 残高 3.5	広口型。□縁端部は上下方に膨張 する。	凹輪ナデ	凹輪ナデ	白灰色 白灰色	密	
165	壺	残高 2.2	盤部片。波状文10条あり。	凹輪ナデ	ナテ	暗茶褐色 茶褐色	密	
166	壺	残高 2.1	ハラ沈線文3条+木葉文。弥生前期。	ミガキ	ナテ	灰褐色 茶褐色	石・長(1)金 ○	黒斑 21
167	土器	長さ 4.3 幅 1.3	完形品。φ0.4cmの穿孔。	ナテ(マツツ)	マツツ	橙褐色 乳茶褐色	密	21

表22 SB8出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 寸	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
168	石磨丁	1/5	結晶片岩	2.2	3.2	0.4	3.55		

表23 挖立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法面(cm)	形態・施文	調査		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
169	环底	口徑(12.2) 残高 2.5	小片。口縁裏部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色 青灰色	密 ◎	自然陶	
170	高环	残高 3.8	脚部片、透かしを2箇所看取。小片。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 灰色	密 ◎	自然陶	
171	甕	口徑(30.3) 残高 2.7	内灌口縁。縁部に貼付凸帯文1条。 凸帯上に布有印痕あり。	ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~2) ◎		
172	甕	残高 2.0	凹線文4条+円形浮文。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎		
173	甕	残高 5.6	脚部片。刻目文あり。小片。	ハケーミガキ ナデ	ナデ	茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~2) ◎		
174	高环	残高 1.3	脚部小片。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~2) ◎		

表24 挖立2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法面(cm)	形態・施文	調査		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
175	环底	口徑(11.3) 残高 3.6	丸味のある天井部。 口縁裏部は内縮する。小片。	回転ハラグズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
176	环底	口徑(12.4) 残高 4.0	丸味のある天井部。 口縁裏部は内縮する。	回転ハラグズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
177	甕	残高 3.1	凸線2条+波状文16条。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 黒灰色	密 ◎	自然陶	

表25 S X 1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法面(cm)	形態・施文	調査		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
178	浅鉢	残高 6.2	小片。	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	褐褐色 灰褐色	石・長(1~4) ◎	金 黒斑	21
179	甕	口徑(21.5) 残高 4.1	折曲口縁。口縁裏面に刻目文、肩部 にへら沈線文2条。	ミガキ・ナデ	ナデ	茶褐色 淡褐色	石・長(1~3) ◎		
180	甕	口徑(20.0) 残高 2.5	口縁に貼付凸帯文1条。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶褐色	石・長(1~2) ◎	金	
181	甕	残高 1.7	口縁裏部に刻目文。	ナデ	マツツ	暖褐色 淡茶褐色	石・長(1) ◎		
182	甕	残高 3.9	ヘラ振き子沈線文6条。	ミガキ	ヨコナデ	暗茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2) ◎	金	
183	甕	口徑(34.6) 残高 4.6	大型品。口縁下に段あり。	ミガキ	ミガキ	茶色 茶色	石・長(1~2) ◎	金 黒斑	
184	甕	残高 4.5	ヘラ沈線文2条+木葉文。	ミガキ	ナデ	淡茶褐色 淡褐色	石・長(1~4) ◎	金	21
185	甕	残高 2.8	ヘラ沈線文3条+タテ沈線文5条+ タテ沈線文3条。	ミガキ	ヨコナデ	暗茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2) ◎	金 黒斑?	
186	甕	残高 5.2	頭部片。段あり。	ミガキ	ハケ・ナデ	橙茶褐色 褐色	石・長(1~2) ◎	金	
187	甕	残高 4.9	脚部片。斜線文3条。	ミガキ	ナデ	黄茶褐色 橙茶色	石・長(1) ◎	金	
188	甕	残高 3.5	ヘラ沈線文3条+山形文(2条1組)。	ミガキ	ナデ ミガキ?	淡褐色 淡褐色	石・長(1) ◎	金	
189	甕	残高 1.9	広口型。口縁部は上下方に弧張り。 口縁裏面に割離子文あり。	ヨコナデ	マツツ	乳茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~2) ◎		
190	高环	底径(16.5) 残高 1.2	脚部小片。	ヨコナデ ミガキ	ハケ(6本/組)→ ミガキ(ヨコタケ)	淡橙茶色 淡橙茶色	密 ◎	金	
191	高环	残高 1.8	環部下位に段あり。	ミガキ	ナデ	茶色 茶色	石・長(1~2) ◎	金	
192	甕	底径(7.2) 残高 1.3	平底。小片。	ナデ	ナデ	暗灰茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) ◎	金 黒斑	
193	甕	底径(6.2) 残高 1.5	平底。	ナデ	ナデ(マツツ)	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
194	环底	口徑(11.2) 残高 2.0	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
195	高环	口徑(16.0) 残高 4.1	無蓋高环。口縁2条+波状文5条。	回転ナデ	回転ナデ	濃青灰色 濃青灰色	密 ◎	自然陶	
196	甕	口徑(8.6) 残高 3.6	把手付碗。口縁2条+波状文6条。 小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然陶	21

遺物観察表

表26 SX1出土遺物観察表 玉類

番号	器種	残存	材質	色	法面			備考	図版
					直径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
197	臼玉	3/4	滑石	緑灰色	0.68	0.45	0.32		

表27 挖立3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法面(cm)	形態・施文	圓盤		色調(外面)	色調(内面)	施土焼成	備考	図版
				外面	内面					
198	环	底径(6.0) 残高 1.9	平底。		マメツ(ナデ)	マメツ(ナデ)	淡乳褐色 淡乳茶色	密 ◎		

表28 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法面(cm)	形態・施文	圓盤		色調(外面)	色調(内面)	施土焼成	備考	図版
				外 面	内 面					
199	壺	残高 5.2	口縁下にφ0.4cmの内孔あり。	ナデ	ナデ	暗灰茶褐色	石・長(1~2)金	SP61 黒斑		
200	ミニア	残高 2.8	小片。	タカ?	ナデ	淡赤茶色 乳白色	石・長(1)金	SP305		

表29 柱穴出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	法面(cm)	形態・施文	法面			備考	図版	
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
201	釘	ほぼ完存	鉄	7.3	1.2	0.6	4.79	SP138	21
202	不明	不明	鉄	4.6	1.4	0.3	3.83	SP134	21

表30 柱穴出土遺物観察表 玉類

番号	器種	残存	材質	色	法面			備考	図版
					直径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
203	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.55	0.35	0.12	SP1	

表31 第V層出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法面(cm)	形態・施文	圓盤			色調(外面)	色調(内面)	施土焼成	備考	図版
				外 面	内 面	色調					
204	壺	口径(12.4) 残高 8.3	口縁表面に凹線文2条。頸部にノリの字状文あり。	②ヨコナデ ⑧ハク(10本)	③ヨコナデ ⑨ナデ→ミガキ	灰茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~2)金 ◎				
205	壺	口径(15.0) 残高 6.3	口縁表面に凹線文1条。頸部に沈泡文2条。	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~2)金 ◎				
206	支脚	口径(11.2) 残高 16.4	U字形支脚。中空。	ナデ・ハク	ナデ・ハク	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~5)金 ◎				22
207	壺	口径(18.6) 残高 7.2	口縁下部に破損。口縁底部は内側部で封緘する。	②ヨコナデ ⑧ハク(5本)	③ヨコナデ ⑨ナデ・板ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~2)金 ◎				
208	壺	口径(17.1) 残高 20.6	内側口縁。口縁底部は内側する凹面をなす。裏面に凹凸方向の沈泡文1条あり(背後か)。(マメツ)	④ヨコナデ ⑩ハク(5本)	⑤ナデ ⑪ハク(3~4本)	樹脂色 樹脂色	石・長(1~2)金 ◎				22
209	高杯	口径(15.2) 器高 12.4	口縁部は外反し。柱面部外方に内窓して開く。充填技法。	ナデ→ヨコナデ	②ナデヨコナデ	明茶茶色 明茶茶色	石・長(1~2)金 ◎				22
210	高杯	口径(10.0) 残高 6.3	柱面部内面に不明瞭な模様をもつ。マメツ	マメツ	シボリ痕 マメツ	淡茶褐色 淡茶褐色	密 ◎				黒斑
211	壺	口径(24.0) 残高 5.2	薄口縁。柱面部はナデ凹凸。小片。	マメツ (ハク・ナデ)	マメツ (ハク・ナデ)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金 ◎				
212	壺	口径 8.3 残高 6.3	肩部。把手部接合痕が残る。小片。	ハク(5本)	ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~2)金 ◎				
213	壺	口径 10.0 残高 5.5	把手部完形。断面内形。	マメツ(ナデ)	マメツ(ナデ)	淡茶茶色 乳茶色	石・長(1~2) ◎				
214	壺か蓋	口径 10.0 残高 5.5	敷土器。外面に燒痕文あり。	タカ(マメツ)	マメツ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~3) ◎				22
215	杯舟	口径 3.3	たちあがりは内傾し、受部は水平にのびる。	回転ナデ 回転ヘラクズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎				
216	杯舟	口径(12.2) 残高 4.0	たちあがりは底く内傾し、端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ 回転ヘラクズリ	回転ナデ 回転ヘラクズリ	灰色 青灰色	密 ◎				
217	高杯	口径(15.0) 残高 5.2	無底高杯。凸線2条+波状文5条。	回転ナデ 回転ヘラクズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎				
218	台付柄	口径(10.0) 残高 3.5	「八」の字状に聞く高台。	回転ナデ	回転ナデ 一ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎				
219	壺	口径(20.0) 残高 5.5	口縁部は上方に延長し、断面三角形を呈する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎				自然輪

第V層出土遺物観察表 土製品 (2)

番号	器種	法面(m)	形態・施文	調査		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
220	瓶	残高 2.9	口縁部は方形状を呈し、口縁部にはやや凹む。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		

表32 第V層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法面				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
221	剥片	—	サスカイト	7.9	10.3	1.5	104.43		

表33 第V層出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法面				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
222	鉄滓	—	鉄	4.3	3.5	2.0	28.48		22

表34 第V層出土遺物観察表 玉類

番号	器種	残存	材質	色	法面				備考	図版
					直径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)			
223	碧玉	完形	碧玉	青緑色	0.36	1.00	0.21			22

表35 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法面(m)	形態・施文	調査		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
224	杯	口径(14.4) 残高 3.4	小片。	マツメ (ヨコナデ)	マツメ (ヨコナデ)	灰白色 灰白色	密 ◎		
225	皿	口径(5.8) 残高 1.2	底部回転糸切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ (回転糸切り)	ヨコナデ (回転糸切り)	乳茶色 乳茶色	密 ◎		
226	碗	残高 2.0	青磁碗。蓮井文あり。小片。	施釉	施釉	深緑色 海緑色	密 ◎	胎土: 灰色	
227	焼鉢	口径(24.8) 残高 3.7	側面削ぎ、条線5条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗赤褐色 暗赤褐色	密 ◎		
228	酉	口径(14.5) 残高 4.0	複合口縁西。波状文4条あり。 弥生垂肩。	ヨコナデ	ハケ(7本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~6)直 ◎		
229	酉	残高 1.7	複合口縁西。口縁部に波状文4~ 5条あり。弥生末。	ヨコハケ?	ハケ(10本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)直 ◎		
230	酉	残高 5.2	複合口縁西。波状文4条以上。 弥生中期後半。	ハケ(マツメ)	ナデ	深褐色 淡黄褐色	石・長(1~4)直 ◎		
231	高环	口径(25.8) 残高 2.0	口縁部に目文。弥生中頃中直。 弥生後期後半。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金 ◎	黒斑	
232	高环	残高 6.5	次彌文9条+未眞通の矢羽根模様か。 弥生中期後半。	ナデ	シボリ痕 ナデ(マツメ)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金 ◎		
233	高环	残高 1.7	半體竹彌文+△1.4cmの円孔。 弥生後期後半。	ミガキナデ	ナデ・ハケ	淡茶色 淡茶色	石・長(1) ◎		
234	高环	残高 5.2	短い柱部。弥生末。	マツメ	マツメ (クズリヨコナデ)	橙褐色 橙褐色	石・長(1~3) ◎		
235	酉	口径 7.6 残高 7.9	小型丸底西。口縁部を一部欠損。	ヨコナデ (工具ナデ)	ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~2)直 ◎	黒斑	22
236	酉	口径(8.1) 残高 6.2	小型丸底西。口縁部はやや内溝する。 内溝(8本/cm) 工具ナデ	ヨコナデ (ナデヨコナデ 内溝(8本/cm) 工具ナデ)	ナデヨコナデ ナデ(工具ナデ)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1)金 ◎	黒斑?	
237	酉	口径 8.6 残高 4.6	小型丸底西。口縁部は直立気味。	ヨコナデ (ナデ)	ヨコナデ (ナデ)	淡黄灰色 淡黄灰色	石・長(1)金 ◎	黒斑	
238	壺脛	口径(6.8) 残高 4.9	口縁部。口縁部は尖り気味に丸い。	回転ナデ (ナデ)	回転ナデ (ナデ)	青灰色 灰色	密 ◎		
239	壺	底径(15.0) 残高 33.8	壺脛1/4の残存。	平行叩き	内振叩き	灰色 灰色	密 ◎		
240	壺か鉢	底径(18.2) 残高 1.8	小片。	マツメ(ナデ)	マツメ	乳白色 乳白色	密 ◎		

表36 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法面				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
241	石器	基部欠損	綠色片岩	5.7	4.5	1.2	24.10		22
242	磨製石斧	1/2	結晶片岩	7.7	6.1	2.5	199.95		22

第5章 調査の成果と課題

樽味四反地遺跡14次・16次調査は、樽味地区重要遺跡確認調査として実施した。両調査からは主に、古墳時代を主体とする集落遺構や遺物を確認することができた。

弥生時代の遺構は、14次調査にて中期後半の土坑を、16次調査では、中期から後期の竪穴住居と土坑を検出した。このうち、16次調査検出の土坑SK1は直径4m以上、深さ1.3m前後を測る大型円形土坑で、土坑内からは砂や河原石が密集して出土したほか、土坑基底部からは湧水が認められた。これらのことから、SK1は井戸もしくは貯水施設として利用された可能性が考えられる。これまで、樽味地区においては、井戸や貯水施設等の遺構は検出されておらず、今後、周辺の調査により、SK1の性格や用途が解明できることを期待する。

このほか、SK1や古墳期の竪穴住居内より、弥生時代前期の土器片が数点ではあるが出土している。

さて、今回の報告では古墳時代の遺構の検出例が最も多い。特に16次調査では、11棟の竪穴住居や4棟の掘立柱建物を確認した。このうち、竪穴住居は4世紀後半のSB1を初現とし、5世紀前半のSB2、5世紀後半では5棟の竪穴住居（SB3・5・10・11・12）が検出され、さらに6世紀では4棟の竪穴住居（SB6・7・8・9）を検出した。これらの中には建替えもしくは重複関係が認められるものもあり、樽味地区においては、古墳時代を通して集落が継続して営まれていたことがわかる。

検出した竪穴住居のうち、SB1では埋土上位にて大量の河原石と共に弥生時代中期後半から後期の土器がまとまって出土しており、住居廃絶に伴う人為的な埋戻しが行われた様子が伺われる。

住居形態をみると、平面形態は方形もしくは長方形を呈し、規模は一辺6m前後のものと、4.5m前後のもののか、一辺7mを超えるやや大型住居がある。なお、6世紀代の住居は、住居全体を検出しておらず、平面形態や規模は定かではない。

このほか、掘立柱建物は切り合いや出土遺物より、概ね6世紀以降の建物と推測される。

注目される遺物では、第V層中より縄縞文を施した軟質土器片が1点出土している。

次に、古代では14次調査検出の溝SD1・2が注目される遺構である。溝の形状は調査地内を東西方向に延び、溝西端は南側へ向けて「L」字状に折曲がっている。溝内からは弥生土器や土師器、須恵器が混在して出土したが、主に7～8世紀代の土器が占める割合が高く、埋土や出土遺物より概ね、古代まで存続した溝と推測される。樽味地区における古代遺構の検出事例は少ないものの、硯片や奈良三彩などの出土例が報告されており、今回検出した溝を含め、今後、樽味地区における古代集落の範囲や構造及び性格解明が重要となる。

写 真 図 版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、 4×5 判や 6×7 判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、 35mm 判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーANGULON90mm	他	
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67	55mm	他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール28~85mm	他	
フィルム	白 黒 ネオパンSS・アクロス				
カラー	アスティア100F				

2. 遺物は、 4×5 判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュ-45G
レンズ	ジンマーS 240mm F5.6他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白黒 ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

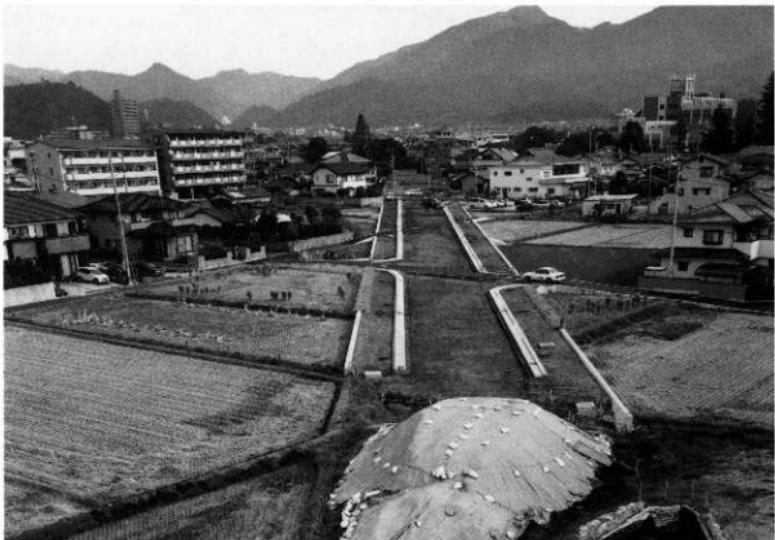
引伸機	ラッキー450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RCペーパー

4. 製 版 写真図版175線

印 刷	オフセット印刷
用 紙	マットコート 76.5kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1~19 『報告書制作ガイド』

〔大西朋子〕



1 調査前全景（西より）



2 北壁土層（南東より）

図版
2



1 造構検出状況（東より）



2 完掘状況（東より）



1 SK 1 棟出状況（北より）



2 SD 2 遺物出土状況①（北東より）

図版
4

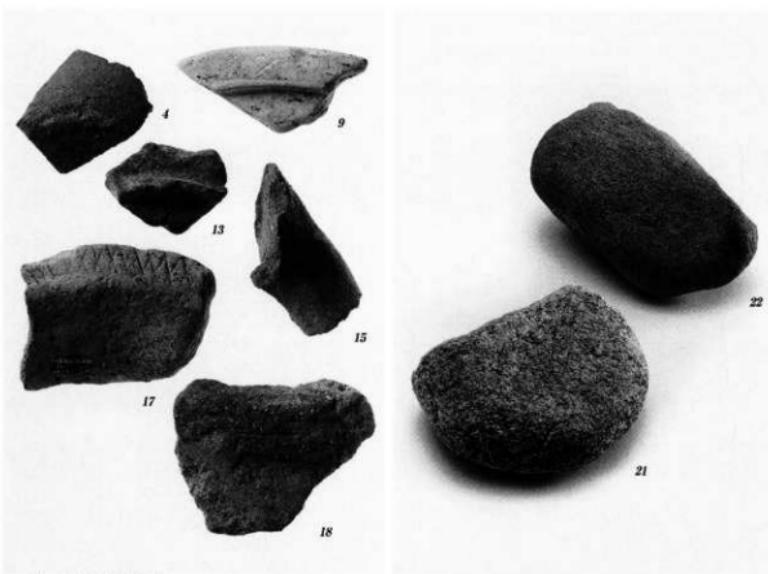


1 SD 2 遺物出土状況②（南東より）

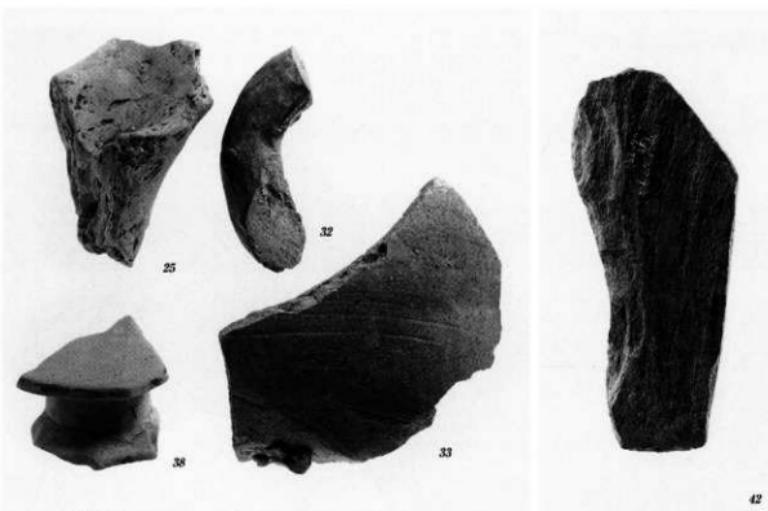


2 SD 1・2 完掘状況（西より）

圖版
5



1 SD 1 出土遺物



2 出土遺物 (SP 4: 25、第III層: 32・33、地点不明: 38・42)

図版
6



1 調査地全景（北東より）



2 西壁土層（南東より）

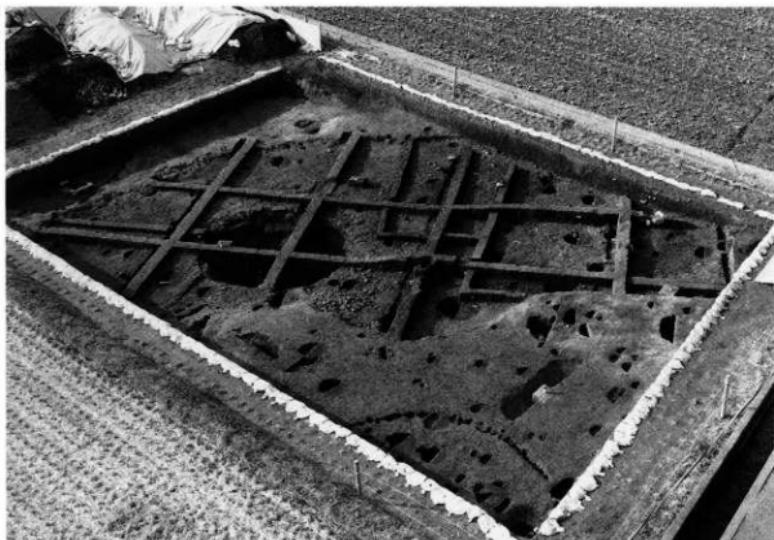


1 北半部遺構検出状況（南より）



2 南半部遺構検出状況（北より）

図版
8



1 北半部発掘状況（北東より）



2 南半部発掘状況（北より）



1 SB 4 検出状況（北より）



2 SK 1 造物出土状況（南東より）

図版
10



1 SK 1 完掘状況（南より）



2 SB 1・2 検出状況（東より）



1 S B 1 遺物出土状況①（北より）



2 S B 1 遺物出土状況②（南より）

梅味四反地遺跡16次調査

図版
12



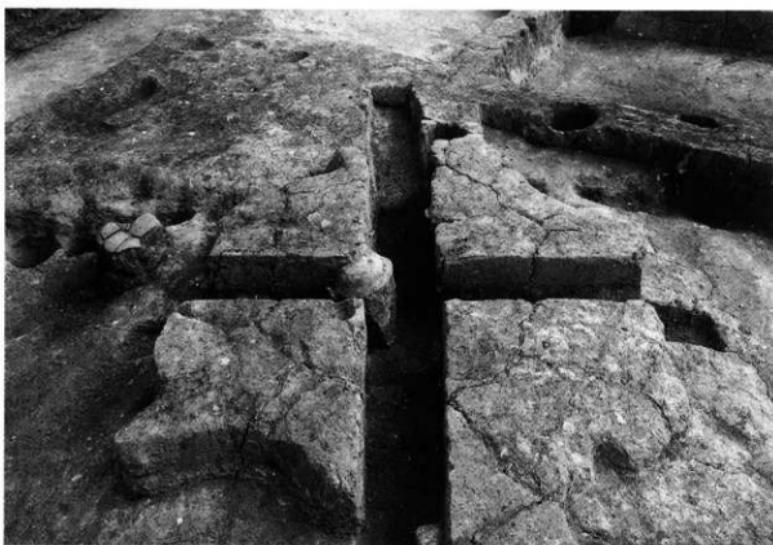
1 SB11・12検出状況（西より）



2 SB11カマド検出状況（東より）



1 S-B10検出状況（南より）



2 S-B10カマド検出状況（西より）

図版
14



1 SB 5 検出状況（南より）



2 SB 5 カマド遺物出土状況（南東より）

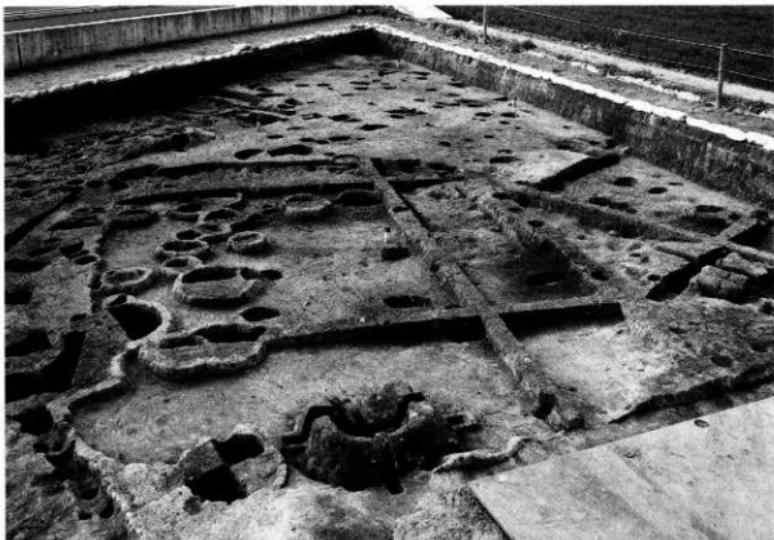


1 SB 5 カマド検出状況（南より）



2 SB 6・7 検出状況（北より）

図版
16



1 S B 8・9 検出状況（北東より）



2 挖立5検出状況（北より）

博味四反地遺跡16次調査

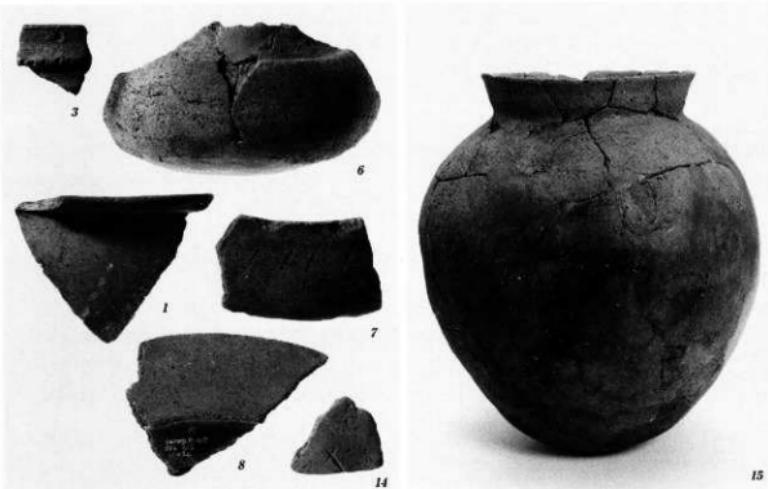


1 作業風景（南より）



2 現地説明会（北より）

図版
18

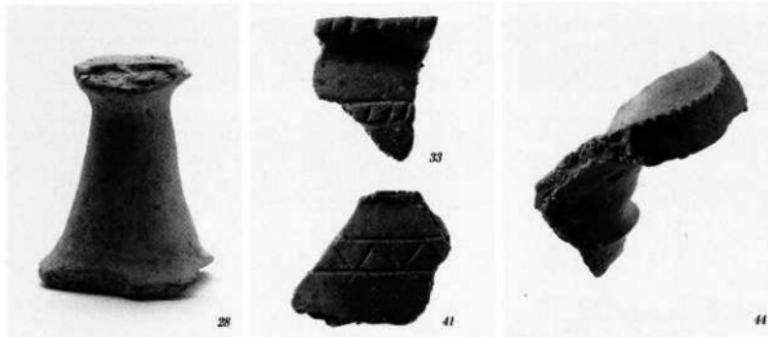


14

15

21

25



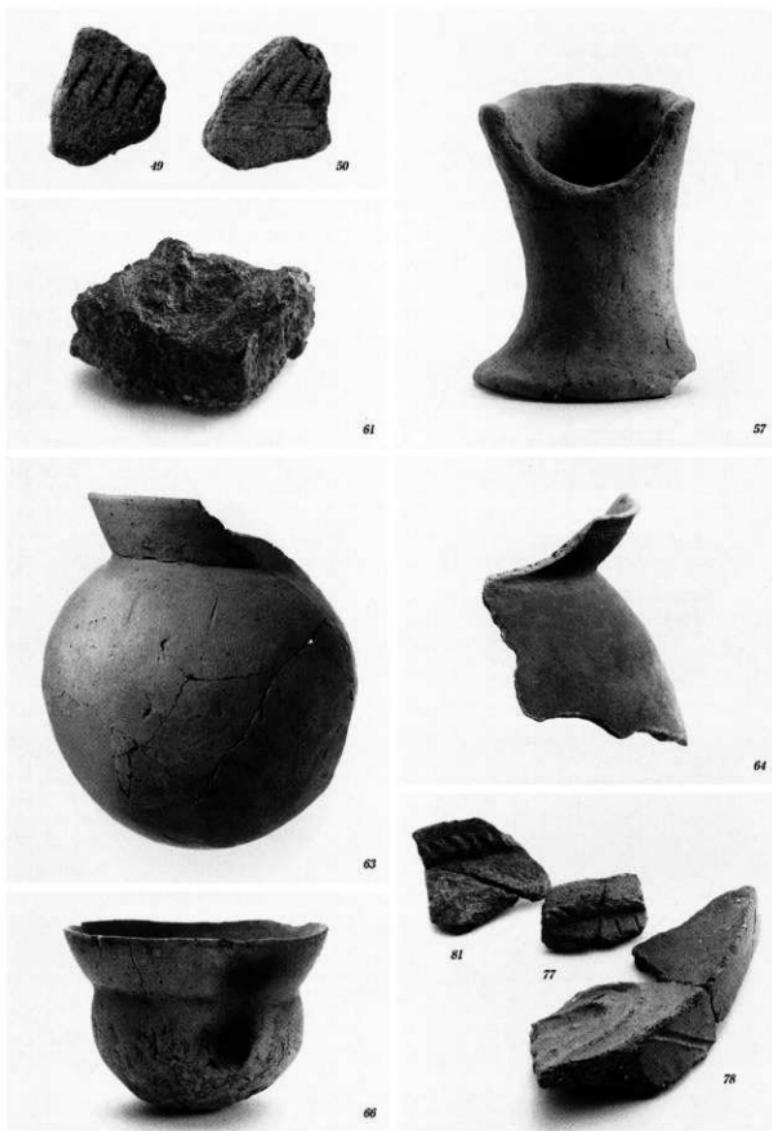
28

33

41

44

1 出土遺物 (SK 1:1・3・6~8・14・15、SB 1①:24・25・28・33・41・44)



1 出土遺物 (SB 1②: 49・50・57・61、SB 2: 63・64・66・77・78・81)

図版
20



84



85



88



89



92



93



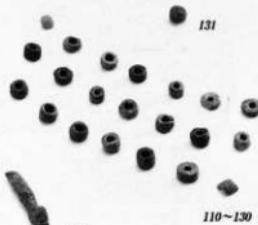
103



97



107

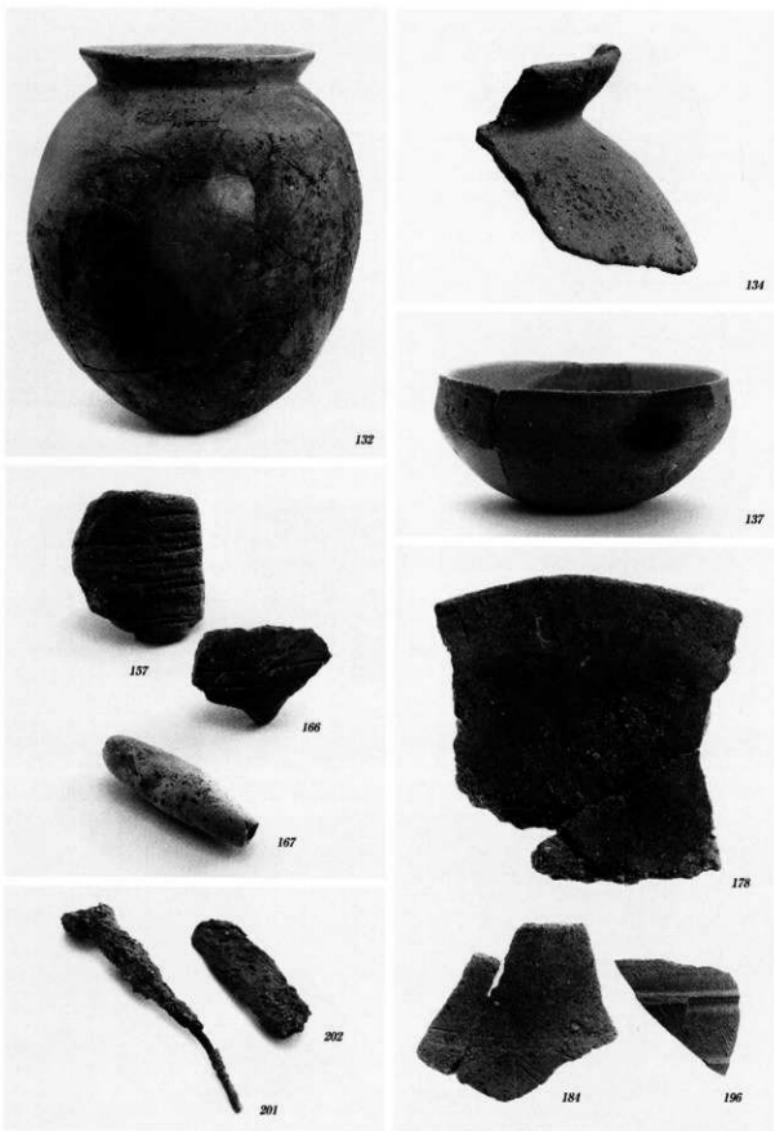


109

131

110~130

1 出土遺物 (SB11:84・85・88、SB12:89、SB10:92・93・97・103・107・109~131)



1 出土遺物 (SB 5 : 132・134・137、SB 8・9 : 157・166・167、SX 1 : 178・184・196、
柱穴 : 201・202)

梅味四反地遺跡16次調査

図版
22



206



208



209



214



222



223



235



241

242

1 出土遺物（第V層：206・208・209・214・222・223、地点不明：235・241・242）

報告書抄録

松山市文化財調査報告書 第133集

樽味四反地遺跡

—14次・16次調査—

平成18年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書1

平成21年1月31日 発行

編集 松山市教育委員会

発行 〒790-0003 松山市三番町6丁目6番地1

TEL (089) 948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6

TEL (089) 923-6363

印刷 株式会社明朗社

〒791-2112 伊予郡砥部町重光150番地1

TEL (089) 958-6868

